

---

# 東方蟹騎士伝

たぬえもん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方蟹騎士伝

### 【Nコード】

N9243P

### 【作者名】

たぬえもん

### 【あらすじ】

様々な願いや欲望を叶えるために戦った騎士達が居た、この物語はその中で一番最初に散った蟹騎士の物語。騎士は幻想の世界で何を思いどのように生きていくのか？今蟹騎士の新たな物語が始まる！！

この小説は作者の自己満足で書いたものです。誤字や脱字が在るかも知れないうえグダグダで駄作ですが、それでも読んで貰えたら幸いです。

<追伸>誰でも感想を書ける様にしました。ご感想、ご意見があればお書きください。

## はじめに

はじめまして。作者のためえもんという者です。

この小説は仮面ライダー龍騎と東方projectのクロスオーバー作品です。

この作品には以下の要素が含まれています。

東方における二次設定。

ご都合主義

亀更新&不定期更新。

幻想入り

作者は東方をプレイしたことがなく二次創作やウィキペディアとプレイ動画を見た程度の知識しか持っていません

作者は今回が初投稿です。そのため誤字や脱字があるかもしれません  
オリジナル設定

オリキャラ

以上の事を知った上で観て頂けたなら幸いです、文才が無く駄文ですがよろしくお願ひします。

## プロローグ

ミラーワールドそれは鏡の中に存在し、左右反転されている以外は現実世界とそっくりな世界、そんな世界で二人の騎士が戦っていた。

一人は蟹の様な仮面をした騎士・仮面ライダーシザースもう一人は蝙蝠の様な仮面をした騎士・仮面ライダーナイト二人の騎士はお互いの武器を激しくぶつけ合っていた、シザースは巨大な蟹の鋏の形をした武器シザースピンチをナイトに向かって振り下ろし、ナイトは巨大な槍の形をした武器ウイングランサーを使いその攻撃を防ぐ。しかしナイトが少しずつに押されていく。

「くっ！」

「どうしました？その程度ですか？」

仮面ライダーナイト・秋山 蓮が苦しそう声を出すのに対し仮面ライダーシザース・須藤 雅史は余裕そうな声を出す。

それもそのはずこの須藤 雅史という男、自分の契約モンスター・ボルキヤンサーをパワーアップさせるためだけに一般人を襲わせ食わせていたのだ、当然ながら契約モンスターがパワーアップすればライダーの力も上がる対して秋山 蓮はその様な事をしないために力に差が空いてしまう。

シザースがナイトの首を落とそうとシザースピンチを開き襲い掛かる、ナイトは咄嗟にウイングランサーを首とシザースピンチの間に

割り込ませる形で防ぎなんとか首が落ちずに済んだが動きを封じられてしまう。

「終わりですね」

シザースはそう言ってシザースピンチに力を入れウイングランサーごとナイトの首を落とそうとする。

「はあ！」

しかしナイトは空いている腕で翼召剣ダークバイザーを掴みシザースのカードデッキを攻撃する。

「うわあー!!」

シザースはその衝撃でナイトから離れてしまう、その隙を突いてナイトはダークバイザーにカードをセットする。

<ファイナルベント>

その音声と共にナイトの契約モンスターである蝙蝠型のモンスター・闇の翼ダークウイングが現れナイトの背中に引っ付きマントのよう

な形になるナイトはそのまま上空に飛ぶとウイングランサーを芯にマントをドリル状に変形させて突撃する  
技「飛翔斬」を発動させる。

ファイナルベントとはライダー達がそれぞれ持つ必殺技を発動させるためのカードだ。

その光景を見たシザースはすぐさま甲召鉄シザースバイザーにカードをセットする。

<ファイナルベント>

シザースもファイナルベントを発動させると背後に蟹型のモンスター・ボルキャンサーが現れ両腕でシザースをジャンプさせる、そして高速で空中前転しながら体当たりする技「シザースアタック」がナイトの「飛翔斬」とぶつかり合う。

「ぐはあ！」

結果パワーアップしていたシザースがナイトの技を打ち破る形で終わった。

「これで一人減りましたね」

自分の勝利を確信したシザースだったが、勝利の女神は彼に微笑まなかつた。

バツキンという音と共にシザースのカードデッキが砕け散る。

「なに!?!」

驚愕するシザースだが彼の後ろから自身の契約モンスター・ボルキヤンサーが近づいてくる、シザースはボルキヤンサーにすがる様に。

「わ、私は絶対に最後まで勝ち残って!」

そこから先の言葉を彼が言うことは無かった、契約が破棄されたシザースはボルキヤンサーにとって餌でしかなかった。

「あゝあゝあゝ ああああああゝゝ!?!?!」

自分が今までに犠牲とした者達と同じように生きたままボルキヤンサーに食われ、肉を裂き骨を砕く不快な咀嚼音と共に断末魔の悲鳴を上げながら彼はこの戦いから脱落した。

- - - - -

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

本来なら彼の物語はここで終わるのだが、彼は再び物語を紡ぐ事になる彼の居た世界とは違う世界で様々な幻想が住まう世界<幻想郷>その世界で彼がどのようにして生きていくかは今はまだ、誰にも分からない。



## 第1話 蟹騎士の幻想入り（前書き）

いよいよ本編スタートです、今回の話では雅史とよく関わるオリキヤラが登場します。

短い上に駄文ですが読んでいただけたら幸いです。

## 第1話 蟹騎士の幻想入り

幻想郷それは忘れ去られた者達の楽園、2種類の結界・幻と実体の境界と博麗大結界により外の世界から切り離された世界。

この世界には外の世界で空想の存在とされる者達が多く暮らしている、妖怪、魔法使い、神、鬼、吸血鬼、妖精、幽霊、亡霊その他にも様々な種族が幻想郷で暮らしている。

そして今この幻想郷に一人の男が幻想入りしようとしていた願いと欲望が渦巻く戦いで一番最初に敗れた蟹の力を宿した騎士、彼が幻想郷の住人達と関わっていくことで何が起こるかは今はまだ誰にも解からない。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

ここは人里から離れたある道、普段なら妖怪が時々出るため人里の者なら余り近寄らないところだがその道を二人の兄弟が歩いていた兄のほうは18歳くらいの青年で名前を上月信吾という弟のほうは10歳くらいの少年で名前を上月琢磨という、この二人がなぜこの道を歩いているかというこの辺りでしか取れない花を取りにきていたのだ。

この二人は幼い頃に両親を亡くしてからは里の手伝いをしながら暮らしていた、里の人たちは兄弟に色々と親切にしてくれるし、弟の通う寺小屋の先生もその友人の少女も何かと気を使ってくれるため二人は今の生活に不満は無かった。

今日この辺りに花を取りに来ていたのは普段お世話になっているおばさんが病気になったため、少しでも元気になるように、おばさんの好きな花を取ってくることにしたのだ最初は寺小屋の先生と友人の少女も一緒に行くと言っていたのだが大事な用ができたため来れなくなってしまった。

信吾はまだ日も明るいから大丈夫と言い二人を説得したのだが、当の本人達はまだ納得してないような顔だった。

「兄ちゃん、綺麗な花が取れてよかったね、これならおばさんも元気になるよね」

そんなことを考えていると弟の琢磨が声をかけてきた。

「ああそうだな、きっと元気になるよ」

そういうと琢磨は嬉しそうな表情で頷いた、あとはこの道をまっすぐ行くと人里に着く、ここまで妖怪に出会うことも無くこれたのはよかった、そう思っていると。

「あ！兄ちゃんあそこに誰か倒れてるよ！」

突然琢磨が指を前に向け叫んだ、前を見ると人が道の真ん中に倒れていた。

「本当だ！」

そう言い近づくと自分より年上の変わった服を着た男が倒れている。

「大丈夫ですか！」

そう呼びかけるが反応が無い、体を確認するが特に傷ついていないし呼吸もしっかりしている、どうやら気を失っているだけのようだ。

「兄ちゃん、その人大丈夫？」

琢磨が心配そうに話しかけてくる。

「ああ大丈夫だ気を失っているだけだ」

そう言うと琢磨は安心したようにほつと息を吐く。  
改めて男を見ると自分たちとは違う変わった服を着ていた。

「外来人？」

外来人とは幻想郷の外の世界の人間を指す言葉だ、なにかの拍子に  
結界を越えてやって来る人達がいる、そういう人達を外来人と言う。

「とりあえず里まで連れて行こう、ここに置いていたら妖怪に食わ  
れてしまう」

大抵の外来人は幻想郷に来てても妖怪に食われて命を落とすことが多  
い、だから早く安全な人里に連れて行かなければならない。

「琢磨は花を持ってくれ俺はこの人を背負っていくから」  
琢磨に花を渡すと信吾は男を背負い里に向かって走り出した、その  
後ろから琢磨が付いていく形で走る。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

信吾が男を背負い琢磨と人里に向かって走り出したとき、遠くから三人を見ている者が居た、外見は2メートル越えの大男で上半身は服を着ておらず手には大きな鉈を持っており顔の目は一つしか付いていなかった、そうこの男は妖怪だった人間の匂いがして来てみると三人の人間がいたのだ。

「くくく、まさかこんなところで人間に出くわすとは運がいいちよ  
うど腹が空いていたところだ、早速食らってやるうか」

そう思い三人を襲おうとして鉈を構えたとき、背後から何かの気配がした。

「なんだ？」

しかし後ろには何もおらず地面に鏡のような物があるだけだった。

「鏡？こんな物さつきは無かったぞ」

変だと思い鏡に近づいて、鏡を覗いた瞬間。

「がっ！？」

いきなり鏡から巨大な鋏が飛び出し妖怪の首を挟んだ、妖怪は必死に抵抗するが、抵抗虚しく鏡の中に引きずり込まれてしまう。静寂が辺りを支配する、しばらくして鏡から妖怪の持っていた鉈だけが飛び出してきたその鉈は先ほどと違い血で真っ赤に濡れていた、そして鏡は最初から無かったかのように砕け散って消えた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

こうして彼は幻想の世界に足を踏み入れ二人の兄弟に助けられた、目を覚ましたとき彼が何を想うかは彼本人にしかは解からない。

## 第1話 蟹騎士の幻想入り（後書き）

オリキャラの設定

上月信吾

温厚で心優しい人里の青年で困っている人がいると放っておけない性格そのため里のもの特に子供に人気がある。  
両親が亡くなってからは弟の琢磨と二人暮らしをしている。  
琢磨のことを誰よりも愛している

上月琢磨

元気でよく笑う明るい性格の少年で里の子供たちといろんな遊びをする特に今はサッカーがお気に入りなので、よく他の子供たちとサッカーをするがボールを強く蹴り過ぎてよくガラスを割っては自分の通う寺小屋の先生の頭突きを受けている。  
兄の信吾のことを凄く尊敬している。

とりあえず今回の話でオリキャラを出しました、東方キャラの出番はもう少し先になるかも知れません。



## 第1・5話 白い空間の中で（前書き）

この話は須藤雅史がどのようにして幻想入りしたのかわかる話です。

この話では雅史以外に龍騎キャラが出ます。

## 第1・5話 白い空間の中で

須藤雅史はただ白いだけの空間の中を彷徨っていた。

「此処はいつたい何処なんだ？」

自分はナイトとの戦いでカードデッキが壊れてしまい契約が無効になったボルキヤンサーに食われたはず、あの時の食われていく感覚は今でも鮮明に思い出せる。

あの痛みも苦痛もとても忘れることが出来る物ではない、ましてや夢であるはずが無い。

そして気がつけばこの白い空間にいた。

「私は確かにあの時、死んだはずまさか此処が死後の世界なのか？」

雅史がそんな事を考えていると。

突然、彼の目の前に黒い球体が現れた。

「何だ？これは」

雅史が不思議そうに黒い球体を見つめていると、いきなり球体が弾ける。  
するといきなり彼の体に激しい痛みが襲い掛かる。

「ぐうああー……っ!!」

堪らず悲鳴を上げながら倒れのた打ち回る雅史。痛みは彼の体だけではなく精神にも伝わってくる。

「な、何だ!!この痛みは!?!うああああああああっ!!」

叫ぶ雅史だが頭の中に様々な感情が流れ込んできたことで、さらに大きな悲鳴を上げる。  
流れてきた感情を言葉で表すなら恐怖、絶望、苦痛そういった感情が一気に彼の頭の中に流れ込んでくる。

「うあああああ!!がああああああー……!!」

もお彼の精神が崩壊しようとした時、今まで感じていた痛みがいきなり消えた。

「はあ、はあ、はあ、な、何だったんだ、あの痛みは?」

息を整えてから先ほど起こったことを考えていると。

「それは、お前の罪だ」

いきなり後ろから声を掛けられ、すぐに後ろを振り向くと其処には黄金の鎧を纏った神々しくも圧倒的な威圧感を放つ不死鳥の様な仮面の騎士がいた。

「あ、貴方は一体誰ですか？」

騎士の威圧感に押されながらも雅史は尋ねる。

「ライダーバトルで一番最初に脱落したお前が知らないのも無理は無い、私の名はオーディン。神崎士郎の手駒であり最後まで勝ち残ったライダーと戦う者だ」

仮面ライダーオーディンは雅史の質問に答える。

「では先ほど言った私の罪とはどういう意味ですか？」

雅史が更にオーデインに質問する。

「言葉通りの意味だ。あの黒い球体はお前の命令で動いていたモンスターに食い殺された人間たちの残留思念だ」

オーデインの話聞いた雅史の顔がどんどん青ざめていく。

「しかしお前の最後は随分と滑稽だったな。他の者たちにした様に自らの契約モンスターに食い殺されるとは、どうだった？自分が食われる感覚は？苦しかったろう？痛かったろう？お前は他の者たちにも同じ痛みを与えていたのだ。どうだ少しは自分の罪の重さが分かったか？（もっとも罪の重さなら王蛇である浅倉威の方が上だろうがな）」

オーデインの責める様な言葉を聞いて雅史は俯いたまま手から血が流れる程強く握り締めている。

オーデインの言葉に怒りを覚えたわけではない、自分自身の愚かさ  
に怒りを覚えたのだ。

何を今更と思ってしまうが、今思えば自分は刑事でありながらその  
地位を隠れ蓑として利用し様々な悪事を働いた。

更にライダーになってからはライダーの頂点を極めるという勝手な  
理由で多くの人間を犠牲にしてきた催促悪党と言われ地獄に落ちて  
も仕方ないだろう。

雅史の後悔するような顔を見ていたオーデインは。

(ふっ、正に自分の行いを悔いている顔だな、まあ自分の行いに対して反省できるだけ浅倉よりましだろう)

そお思ったオーデインは雅史に話しかける。

「お前が自分の行いを悔い、罪を償いたいと言つのならば手を貸そう」

その言葉を聞いた雅史は顔をバツと上げた。

「本当ですか！しかし一体どうやって？」

「お前や私の居た世界は一度リセットされミラーワールドやモンスター、ライダーの存在が無かった事になっているあの世界はもう、我々を受け入れてはくれないだろう、そこでお前を違う世界のある場所に送る。忘れ去られた者達の楽園、様々な幻想が住まう地、すべてを受け入れる残酷であり優しき世界、幻想郷へ。そこでお前は精一杯生き誰かのために戦え、それがお前の罪滅ぼしに繋がる」

オーデインの言葉を聞いた雅史は涙を流しながら。

「ありがとうございます。私何かの力で何処まで出来るか分かりませんが、その世界で精一杯生きて誰かのために頑張っていきます」

その言葉を聞いたオーディンは無言で頷き雅史にある物を渡す、それを見た雅史は驚く。

「!?こ、これは」

それは長方形の金属製ケースで蟹の紋章が描かれていた。それはナイトとの戦いで粉々に壊れた筈のシザースのカードデッキだった。

「なぜこれを私に、いや、それよりもこのデッキは粉々に壊れた筈では?」

「そのデッキは私が復元したものだ。更にお前にしか使うことが出来ないようにしておいた。契約モンスターはボルキャンサーのままだが、復元する時に幾分か力を上げておいたから、問題ないだろう。今からお前が行く幻想郷は少しばかり物騒なところだな(少しと言ふ言葉で済ませられるような所ではないが)、無論安全な場所もあるが危険が付き纏う事も多い、だからその世界で生きるにしろ、誰を守り戦うにしろ、ある程度の力は必要だろう?」

「しかしその幻想郷がどれだけ危険かはまだ知りませんが、ライダーの力は危険では」

「力を使うかどうかはお前が決めればいい事だ(まあ、嫌でも使うとき来るかもしれんが)」

話を終わるとオーディンの手に鳳凰召錫ゴルトバイザーが現れる、オーディンがゴルドバイザーを掲げると白い空間に黒い穴が空く。

「これは!?!う、うああああああああああ!！」

驚く雅史だがいきなり体が浮き、凄い勢いで穴に吸い込まれいく、そして雅史を吸い込んだ後、穴は無かったかのように消滅した。

「仮面ライダーシザース・須藤雅史よ、お前が幻想の地でどの様に生きていくかは、まだ私にも解からない、しかし今は幸運を祈っておこう。ふっ、お前があのか・城戸真司の様なバカになれば面白そうだが」

オーディンがそう言うと彼の傍らに黄金の光を神々しく放つ不死鳥の様な契約モンスター・ゴルトフェニックスが現れ、神々しく鳴く

「クオオオオオオーーーーー」

「そうか、お前もそう思うか」

ゴルトフェニックスの鳴き声に答えるとオーディンは一枚のカードを取り出す。

「須藤雅史、お前が更なる力を望んだときこのカードを渡そう」



オーデインが持っていたカードは普通のカードとは桁違いの力を内包していた、それは龍騎やナイトそしてオーデインが持つカード、使う事でどんな不利な状況も覆す可能性を秘めたカード、「烈火」「疾風」「無限」その三つとはまた違う四枚目のカード「サバイブ・激流」。

- - -  
- - -  
- - -  
こうして蟹騎士は不死鳥の騎士によって幻想の世界に導かれた。

不死鳥の騎士が何を思ったかは本人とそのパートナーにしか解からない

## 第1・5話 白い空間の中で（後書き）

という訳でオーディンを登場させました、何か小説を書いている時オーディンが主役？的な感じだなっと思いました。

今回はオリジナルカード「サバイブ・激流」を出してみました、最初は「甲殻」と言う名前でしたが感想で「激流」という案が出てそちらの方がカッコイイと思ったので変更しました。

少しでも面白く読んでいただけののなら幸いです。

## 第2話 新たな居場所（前書き）

更新が遅れてすみませんでした！

仕事が忙しい&話の内容が上手く浮かばず遅れてしまいました。

大分グダグダな話ですが読んでいただけたら幸いです。

## 第2話 新たな居場所

「……………うづう……………ここは？」

雅史が目を覚ますと知らない部屋に寝かされていた。部屋はどうやら和室のようで自分が寝ていた布団の横には、自分の着ていた上着が畳まれて置いてあった。

（ここは一体？そつだ確か私は白い空間の中でオーディンに出会って、幻想郷に送ると言われたあと黒い穴に吸い込まれて意識を失ったんだ）

雅史は自分の身の上で起こった事を思い出した。

（しかし……オーディンも送るならもう少し静かに送ってほしいものだな）

雅史が心の中でオーディンの送り方に対して文句を言っていると、部屋の入り口の障子の方から足音が聞こえてきた。

（誰か来るな。助けてくれたなら礼を言わないとな）

雅史がそんな事を考えていると障子が開いて一人の青年が入ってきた。  
年齢は18歳くらいだろうか、服装は昔の人が着ていたような着物を着ている。

「あ、気がつかれたんですね。よかった貴方を道で見つけた時は本当にびっくりしましたよ」

そう言うと青年は自分と弟が花を取りに行った帰りに、道の真ん中で倒れていた雅史を見つけて自分の家まで運んでくれたそうだ。

「助けてくれてありがとうございます。私の名前は須藤雅史といいます、貴方のお名前は？」

「いえ私は当然の事をしただけです。まだ自己紹介してませんでしたね。私の名前は上月信吾といいます。それにあのままにしていたら妖怪に食べられていたかも知れませんか」

「妖怪？」

信吾が言った妖怪という言葉に首を傾げる雅史。

「・・・その服装、それに妖怪を知らないということやはり、貴方は外来人のようですね」

また雅史のよく分からない言葉が出てきた。

「あ、あの少し説明してもらえませんか？妖怪に外来人とはどういう意味ですか」

「ああ、すいません行き成りそんな事を言われても分かりませんよね。今から私の知る範囲で説明します」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「ーという事ですが、分かって貰えましたか？」

「つまり此処は幻想郷という所で此処には妖怪や妖精、神までもがいる世界ということですか」

信吾の説明を聞いて雅史は自分が幻想郷にいることが分かった。しかしここまで非常識な世界とは思わなかった。たしかにオーディンが『様々な幻想が住まう地』と言っていたが此処までとは思わなかった。

「あまり驚かないんですね？」

「いえ、驚いてはいます。ただ私も不思議な事には経験がありますから」

確かに雅史は幻想郷の説明を受けた時、なんて非常識な世界だろう

と思ったが、今考えると自分もミラーワールドでモンスターやライダーと戦うという普通じゃありえない経験をした。その事を考えるとこんな世界があっても不思議ではないと思えてくる。

「そうなんですか。ところで須藤さんはこれからどうするんですか？」

「雅史で構いませんよ。そうですね、出来るなら此処で暮らしてみたいですね」

「それだったらこの家で暮らしませんか？」

「いいですか？しかしご迷惑では？」

「構いませんよ、困った時はお互い様ですから。それにこの家は私と弟だけでは少し広いので」

信吾の提案に内心驚いた雅史だったが幻想郷で暮らすなら住む所は必要だろうそれに、信吾の目を見て嘘を言っていない事が分かるこれも刑事だった立場上いろんな人間を見てきた。その事から彼が善意でこの提案を進めてきたことが理解できた。

「分かりました、それではご好意に甘えさして貰います」

「そうですね、もうじき弟の琢磨も帰ってくると思いますので、もうしばらく休んでおいてください。」

「分かりました、いろいろと気を使ってくださってありがとうございます」

「それでは琢磨が帰ってきたら呼びに来ますね」

そう言う信吾は部屋から出て行った。

「親切な人に助けてもらって良かったな。おまけに住む所まで提供してくれるとは、かなりのお人好しだな。だがそんな人に最初に出会えてよかった」

ふと雅史はズボンのポケットに手を入れるとカードデッキを取り出した。

そしてデッキから一枚のカードを取り出す。そのカードには雅史の契約モンスター・ボルキャンサーが描かれていた。

雅史がそのカードを持って念じると、部屋に置いてあった鏡にボルキャンサーが現れた。

「ボルキャンサー、お前に命じておく私の許可なしに人や他の生き物を襲うな。餌の方は後でどうにかするからそれまで我慢している」

ボルキャンサーは不満そうな感じだったが、雅史達を襲おうとしていた妖怪を捕食したため、まだ腹は減っていなかった。そのため雅史の言葉に頷くとまた鏡の中に消えていった。

（これで誰かが襲われる事は無いな、しかし餌の方をなんとかしないと契約破棄と見なされてしまう。もう食われるのは嫌だからな、餌の方も何とかしないと）



雅史はそんな事を考えながら再び布団に横になると、これからの事を考えながら目を閉じた。

## 第2話 新たな居場所（後書き）

東方キャラの出番がないですね！

次の話くらいには東方キャラを出せると思います。

次話も遅れると思いますが、それでも読んでいただけたら幸いです。

### 第3話 人里での出会い（前書き）

今回の話でやっと東方キャラが出ます。

キャラの性格や喋り方などが自分の知っているものと違うかも知れません。

今回もグダグダな話です。

それでも見ていただけたら幸いです。

### 第3話 人里での出会い

「ふう〜〜こんなところか」

雅史は自分に宛がわれた部屋を掃除し終え、一息ついていた。彼に宛がわれた部屋は結構な広さで一人住むには十分過ぎる部屋だった。

信吾の弟、琢磨が帰って来て、雅史がこの上月家で暮らすことを信吾から聞いた琢磨は、家族が増えたみたいで嬉しいと笑顔で言っていた。

（あの時の琢磨君の笑顔は見ている此方も幸せな気分になれる物だったな）

雅史がそんな事を考えていると、部屋の障子が開いて琢磨が入って来た。

「雅史さん、兄ちゃんが呼んでいたよ」

「ああ、琢磨君ありがとうございます。此方も部屋の掃除が終わったので直に行きます」

二人は信吾の居る居間に移動した。

「兄ちゃん、雅史さんと呼んできたよ」

「ああ、琢磨ありがとう、雅史さんも突然呼んだりしてすいませんでした。部屋の掃除はもう終わっただんですか？」

「ええ、部屋自体そんなに汚れていませんでしたから。しかしあんな大きな部屋を貸していただいてありがとうございます。」

「ハハハ、構いませんよ。部屋は結構余っていますから。そうそう雅史さんに話があるんです」

「話ですか？一体なんでしょうか？」

雅史が話の内容を信吾に尋ねる

「はい、雅史さんも人里で暮らすなら慧音先生に会っていた方がいいと思ったので」

「慧音？ああ、確か人里の守護者で琢磨君の通う寺小屋の先生でしたね」

雅史は信吾に幻想郷の説明を受けた時に上白沢 慧音という人物の話聞いた。

彼女は獣人ワハクタクと呼ばれる妖怪で有りながら常に人間の側に立ち、人里を守る守護者をしている。

また人里を守る以外にも寺小屋を開いて里の子供達に勉強を教えている様だ。

そのため里の者達から非常に信頼された人物らしい。

「ええ、私も寺小屋に通っていた時にお世話になりました。人里で暮らすなら慧音先生にも挨拶しておいた方がいいと思いましたが」  
「でも、慧音先生の授業はあんまり面白くないだよね〜それに頭突きが物凄く痛いしさ〜」

「頭突き？なんで頭突きなんですか？」

雅史はなんでそこで頭突きという言葉出てきたか、気になったので信吾に聞いてみた。

「それは、お前が宿題を忘れてたり、サッカーで窓を割ったりするからだろう。ああ、雅史さんは知りませんでしたね。いや慧音先生は宿題を忘れてたり、悪戯したりするとお仕置きで相手に頭突きをしますよ。私も寺小屋に通っていた時に食らった事がありますが、あれは痛かったですね」

信吾は懐かしそうに言う。

「そ、そうなんですか。しかし里の人達からそれほど信頼された人物なら一度会ってみたいですね」

「ええ、ですから今から慧音先生の所に行こうと思うので行く準備をしてくれませんか」

「分かりました、準備といっても直ぐに出来るので、先に玄関で待っていてもらえますか？」

「はい、では準備が出来たら玄関に来てくださいね」



すると玄関の戸が開いて一人の女性が出てきた。

頭が変わった帽子を被り、胸元に赤いリボンの付いた青いワンピースの様な服を着た長い銀髪の綺麗な女性、彼女が上白沢 慧音だろうと雅史は思った。

「信吾に琢磨じゃないか。一体どうした？」

「慧音先生いきなり尋ねて来てすいません。今日は慧音先生に話があつて来たんです」

「話？何か困った事でもあつたのか？・・・ん、そういえばその男性は誰だ？」

慧音が雅史の事に気がつく。

「初めまして、私は須藤 雅史と言います。アナタ達で言うところの外来人です。」

雅史は慧音に自己紹介をする。

「なるほど外来人だったか、道理で見たことが無い筈だ。」

「ええ、それで雅史さんの希望もあつて、私の家で暮らす事になったんです。今日はその事を伝えに来ました」

「そうか、本人達が決めたことなら何も言うことは無い。最初は色々と分からない事も多いだろう、そういう時は遠慮なく聞いてくれ」



「気を使ったださってありがとございます」

(いい人だな、これなら里の人から信頼されるのも肯けるな)

「しかし、外来人を見るのは今日で二度目だな」

「私以外に外来人が来たんですか？」

「ああ、お前達が来る3時間前くらいにやって来てな。今は私の友人の藤原 妹紅と一緒に住む所と働く場所を探している」

雅史は自分以外の外来人の事が気になった。

「その人はどんな人なんですか？」

「そうだな・・・調子がいい奴だが悪い奴じゃないな。それになかなか面白い奴だ」

「そうですか。一度会ってみたいですね」

「もうそろそろ帰って・・・おっ、噂をすれば影だな、ちょうど帰ってきた」

雅史たちが顔を向けると、道の向こうから二人の男女が歩いてきた。一人は長い白髪で白のカッターシャツに紅いもんぺを履いた可愛らしい少女だった。

もう一人は信吾よりいくつか年上という感じの青年だった。

「妹紅に満どうだった、住む所と働き場所は見つかったか？」

「あ！慧音さん、はい！妹紅さんのおかげで住み込みで雇って貰えましたよ！」

満と呼ばれた青年は明るい表情で慧音に報告した。

「いや、私はただ満の事を紹介しただけだ」

「いやいや！妹紅さんが紹介してくれたから、上手くいったんですよ」

「とりあえず、仕事と住む所が見つかって良かったな。おめでとう」

「慧妹さんに妹紅さん。ほんとくに、ありがとうございます」

会話が終わると、満は雅史たちに気がつく。

「そういえば、そちらの人たちは誰ですか？」

三人がそれぞれ自己紹介をする。

「初めまして、上月 信吾といます。こっちは弟の琢磨です」

「上月 琢磨です。信吾兄ちゃんの弟で慧音先生の寺小屋に通っています」

「須藤 雅史といます。貴方と同じ外来人です」

「わざわざ、自己紹介ありがとうございます。俺の名前は佐野 満です。それにしても、俺以外にも外来人が来てたなんて驚いたなあ」

「ええ、私も自分以外に外来人が来てたなんて、思いもしませんでした」  
「そうだ！今日は私の家で雅史さんと満さんの歓迎会をしませんか。もちろん慧音先生と妹紅さんも一緒に」

信吾が雅史と満の歓迎会をしようと提案する。

「そうだな。私も今日は用事も無いから構わないぞ。妹紅はどうだ？」  
「私も今日はあのバカの所に行く予定も無いからいいぞ」  
「俺も全然問題ないすっよ」  
「決まりですね。それじゃ、家に行く途中で買い物をしていきましようか」

信吾がそう言うと六人は上月家に向かって歩き出した。

(それにしても歓迎会か、楽しみだな)

雅史が五人の後ろについて行きながら、そんな事を思っていると。

キイイイン

(！？)

僅かながらモンスターの気配がしたような感じがして、雅史が周りに意識を集中させるが気配は消えていた。

(いま確かにボルキャンサー以外のモンスターの気配がしたと思っただが。気のせいかな?)

雅史がそんな事を考えていると。

「雅史さん?どうかしたんですか?」

雅史が止まっていた為、先頭を歩いていた、信吾が話しかけてくる。

「すみません。なんでもありませんよ」

そう言い五人を追いかける。

後でボルキャンサーに調べさせてみようと思つた雅史は考えていた。

### 第3話 人里での出会い（後書き）

なんとか今月中に更新できました。

今回の話で東方キャラを出せましたが、キャラの喋り方などはこんな感じで良かったでしょうか？

次の話で雅史は変身して戦う予定です。

また新たな龍騎ライダーもでる予定です。

誰が出るかは、大体予想出来るでしょうが（笑）

次の話もいつになるか分かりませんが、それでも読んでいただけたら幸いです。

**第4話 蟹の騎士と群れを従える騎士（前書き）**

ようやく雅史が変身します。

そして新たな龍騎ライダーは誰か？てっタイトル見れば分かります  
よね（笑）

今回もグダグダな話です。

それでも見ていただけたら幸いです。

#### 第4話 蟹の騎士と群れを従える騎士

雅史は自分の部屋でカードデッキを見ながら考え事をしていた。

（あれから三日ほど経つが、ボルキャンサーからの報告は無し。やはり私の気のせいかな？）

雅史と満の歓迎会から三日、あの時に僅かながら感じたミラーモンスターの気配が気になった雅史はボルキャンサーに命じてモンスター搜索をさせていたが、一向にボルキャンサーからの報告は無かった。

（気のせいならそれでいい。今にして思えば幻想郷にミラーモンスターはボルキャンサー以外にいない筈だ）

この幻想郷は自分のいた世界とは違う世界だからミラーモンスターは自分の契約モンスター以外にはいないだろうと雅史は考えた。

（さて、今日は信吾君と琢磨君は寺小屋の課外授業で里の外に行っていないから、何をしようか）

信吾と琢磨の二人は寺小屋の授業で里の外まで動植物の観察に行っている。





人里から離れた森の中を慧音達は里に向かって歩いてきた。課外授業は思いのほか早く終わったため、予定よりも早く帰る事になった。

生徒達は自分や妹紅そして信吾に今日の授業であった事を楽しそうに話していた。

その光景を見ていた慧音は自分の頬が緩むのが分かった。

「今日は何事も無くて良かったですね」

信吾が話しかけてくる。

「今はまだ日が高いからな、妖怪もまだ本格的に活動する奴はいないだろう。だが里に着くまでは気を抜かない方がいいぞ」

「まあ、今の時間帯に動いている妖怪はそんなに多くないし、仮に出会っても話が通じる奴が殆どだと思うから大丈夫だろう。それに仮に襲つてきても返り討ちにしてやるさ」

「ははは、そうですね。慧音先生と妹紅さんがいれば、怖いもの無しですね」

「まったく・・・私と妹紅がいるからといって、絶対に安全とは限らないんだぞ」

三人が話していると急に慧音と妹紅が立ち止まる。

「慧音。気がついてる？」



「お前達は」

慧音が言い終わる前にシアゴーストの1体が襲い掛かってくる。

「ヴ、ヴウ！」

しかし飛んできた弾幕がシアゴーストに直撃して怯んだ。

「いきなり襲い掛かるなんて、礼儀を知らないのか？」

弾幕を撃った妹紅が静かに言う。

「妹紅。すまない、助かった」

「別にいいさ。それにしても結構強めに弾幕を撃つたのに、あんまり効いていないな」

妹紅の言葉に慧音がシアゴーストの方を見ると、シアゴーストにたいした傷は見られず、再び慧音たちに襲い掛かって来る。

慧音と妹紅は弾幕を放ち、応戦するがシアゴーストは怯むだけで、たいしたダメージを与えられないでいた。

「まったく！こいつら一体どれだけ頑丈なんだ！」

「落ち着け！妹紅、あまり熱くなり過ぎるな」

慧音が妹紅を落ち着かせる。

「・・・ごめん・・・慧音、私があいつらを引き付けるから、信吾達を里まで逃がしてくれ」

「妹紅！お前、囷になるつもりか！こんな得体が知れない奴ら相手に危険だ！」

「大丈夫さ・・・慧音だって知ってるだろ？私は不死だから死なないよ。でも信吾達はまだ死ぬには早すぎる。だから信吾や琢磨達を頼む」

「・・・しかし」

慧音が迷っていると、信吾達の近くにいるの間にか鏡のような物がある事に気がついた。

すると鏡からいきなり9体目のシアゴーストが飛び出してきた。

「信吾！みんな！」

「危ない！」

慧音と妹紅が信吾達を助けに行こうとした瞬間、シアゴースト達が口から糸を吐き二人の動きを止める。

二人は急いで糸を引き千切ろうとするが糸はなかなか千切れない。そうしている間にもシアゴーストは信吾達に近づいていく。

「お前達！何してる！早く逃げる！！」

「！？みんな早く逃げるよ！！」

慧音の声に唾然としていた信吾は我に戻ると琢磨や他の子供達と逃げようとする。

しかし。

「うわぁ！」

「琢磨！！」

逃げようとした、琢磨の足にシアゴーストの吐いた糸が絡まり琢磨が倒れる。

信吾は糸を千切ろうと力を入れるが、慧音や妹紅でもなかなか千切れない糸だ。

能力も無い普通の人間の信吾の力では千切れる筈も無い。

シアゴーストが二人に近づくと、口を開き食らい付こうと襲い掛かる。

「信吾！！琢磨！！」

「やめる！！！！！！！！」

慧音と妹紅が叫ぶなか、信吾は琢磨を庇う様に抱きしめると、心の

中で願った。

（誰でもいい！琢磨や慧音先生、妹紅さんや寺小屋の子供達を助けてくれ！）

信吾はそう願い、来るであろう痛みに備え目を強く閉じる。

だが。

「はあ！！」

「ヴウヴウ！」

突然、何者かに蹴られ、シアゴーストが地面を大きく転がる。いきなりの出来事にシアゴースト達は動揺する。信吾が目を開けるとそこには。

「ま、雅史さんに満さん？」

「大丈夫ですか？信吾君に琢磨君」

「俺達が来たからにはもう大丈夫ッスよ！」

二人の外来人、須藤 雅史と佐野 満だった。



しばらく走っていると途中で満と出会う。

「あれ！雅史さん！なんで雅史さんが此処に」

「満君の方こそ！まさか！満君もモンスター気配を？」

雅史は満にカードデッキを見せる。

「！？雅史さんもライダーだったんですか！」

「やはり、貴方もライダーでしたか。いえ！それよりも今はモンスターの方を、信吾君達が危ないかも知れないんです！」

「え！・・・そういえば今日は寺小屋の課外授業で里の外まで行っているんでしたっけ！」

「はい！だから、急ぎましょう！」

「分かりました！」

雅史と満が気配のする方向に走っていると、信吾と琢磨に襲い掛かろうとしているシアゴーストが見えた。

「「はあ！！」」

「ヴウヴウ！」

二人は走っている勢いを利用して、シアゴーストに蹴りを食らわず。シアゴーストは地面を大きく転がった。





「変身！」

右手を左方向に曲げてすかさず前に突き出すポーズを取るとデッキをVバックルにセットする。

満は腕を前でクロスして、前に向けて突き出すとVバックルが装着される。

その後に両腕を小さく回した後、水平に開くポーズを取ると。

「変身！」

Vバックルにデッキをセットする。

二人の体に鏡像が重なり、二人の姿が変わる。

雅史は黒いライダースーツ上にメタリックオレンジを強調した鎧を着けた蟹の様な仮面を着けた騎士・仮面ライダーシザースに満は黒いライダースーツの上に茶色を強調した鎧を着け頭と両肩に角を付けた騎士・仮面ライダーインペラーにその姿を変えた。

その場にいる全員がいきなりの出来事に啞然とする中、シアゴース

ト達だけが二人を敵として認識し襲い掛かる。  
シザースとインペラーはデッキからカードを一枚抜く。

「あれは、スペルカードか？」

慧音が言うのと同時にシザースはシザースバイザーにカードをセツトする。

<ストライクイベント>

認証音声と共にシザースの右腕にシザースピンチが装備される。

インペラーも足を上げて、鈴召膝甲ガゼルバイザーにカードをセツトする。

<スピンドラント>

認証音声と共にインペラーの右腕に2連ドリル・ガゼルスタップが装備される。

シザースとインペラーがシアゴースト達に向かって走り出す。

「はああ！」

「ヴウヴウ!?」

シザースはシアゴーストの1体をにシザースピンチを振り下ろす。シアゴーストの体から火花が飛び散り大きく倒れる、シザースは直に別のシアゴースト達に攻撃を繰り返していく。

「ヴウー」

シアゴーストの1体がシザースに向かって糸を吐き出した。

「甘い！」

吐き出された糸をシザースピンチに絡ませると自分の方へ引き寄せ  
る。

「ヴウ、ヴウヴウ！」

「がら空きだ！」

引き寄せたシアゴーストをシザースバイザーで斬りつけるとシザースピンチを開き、よろめいて居たシアゴーストを挟むと別のシアゴーストに向かって投げつけた。

「「ヴウー!!」」

互いに激突し合い地面を転がる。

「たあ!!」

「ヴウヴウ!!」

一方、インペラーはシアゴーストにとび蹴りを食らわせると、ガゼルスタップを叩き付ける。

「ヴウー————!!」

「おっと!!」

シアゴーストが攻撃してくると、体を横に回転させて避けると、回転の勢いを使いガゼルスタップでシアゴーストの背中を攻撃する。

「ヴウヴウー!!」

インペラーは攻撃を受け倒れる、シアゴーストに目もくれず別のシアゴーストに連続キックを食らわす。

「てい！てい！てい！」  
「ヴウ、ヴウヴウ！」

シザースとインペラーは自分の戦い方でシアゴースト達にダメージを与えていった。

「・・・雅史さんに満さん・・・凄い」

その光景を見ていた信吾が声を漏らす。

「弾幕があまり効かなかった相手にあそこまでダメージを与えるなんて」

「ああ、それに、あのカードもスペルカードとは違うようだ」

妹紅と慧音がそんな事を話している内に戦いは終盤に差し掛かろうとしていた。

「満君、決めますよ」  
「了解っス！」

シザースとインペラーはけりをつけるためにカードを引き抜き、それぞれのバイザーにセットする。

<ファイナルベント>  
<ファイナルベント>

シザースがファイナルベントを発動するとシザースの背後にボルキヤンサーが現れシザースを両腕でジャンプさせる、シザースは空中前転しながら5体のシアゴースト達に体当たりする。

「「「「ヴウウウウ!!!」」」」

大きな爆発が起こり、5体のシアゴースト達は爆発四散した。

シザースのファイナルベント「シザースアタック」

インペラーがファイナルベントを発動すると何所からとも無くメガゼール、マガゼール、ネガゼール、オメガゼールといったレイヨウ系のモンスターの群れが現れ4体のシアゴースト達を攻撃する、そして最後にインペラーがその内一体に左足で飛び膝蹴りを食らわせる。

「「「「ヴウウウウ!!!」」」」

膝蹴りを食らった1体を中心に爆発が連鎖的に起こり4体のシアゴ

ースト達が爆発四散する。

インペラーのファイナルベント「ドライブバイダー」

爆発の中からシアゴースト達の生命エネルギーが現れ、ボルキャンサーやギガゼール達に吸収される。その光景を見た後にシザースとインペラーはVバツクルからデッキを外し変身を解除する。

「終わりましたね。でも雅史さんもライダーだったなんて驚きましたよ」

「私ですよ。まさか自分以外にもライダーが幻想郷に来てたなんて。貴方もオーデインに此方に飛ばされたんですか？」

「雅史さんですか。はい俺も・・・その死んだと思ったら白い空間に居て、其処でオーデインに出会ってこの幻想郷に飛ばされました」

死んだと言った時の満の表情は悲しげな感じだった。

「・・・そう、ですか」

雅史がそう言っていると慧音達が近づいてきた。



「慧音さんに妹紅さん、それに信吾君や琢磨君達、怪我はありませんでしたか？」

「ああ、幸い琢磨が膝を軽く擦り剥いたくらいで済んだよ。お前達の御蔭だ。ありがとう」

「いや、いや、慧音さんと妹紅さんが信吾君達と一緒に居てくれたから俺らも全力で戦えたんですよ」

「それよりもさ、雅史に満。そいつらは大丈夫か？気配はあいつらと同じなんだけど」

妹紅がボルキヤンサーやギガゼール達を指差して言ってきた。

「大丈夫ですよ、妹紅さん。彼らは私達の契約モンスターですから」

「そうそう、俺らが命令しない限り誰も襲いませんよ」

「契約モンスター？そっいえば、お前達はあいつらの事も知っているんだっただな？」

慧音が質問してくる。

「ええ、とりあえず里に戻ってから説明します」

「そうだな。何時までも此処に居る訳にもいかんからな。とりあえず里に戻ろう」

「俺らのモンスターにも護衛させますから、安全ですよ！」

「いや、かえって怖いと思うけど・・・(汗)」

雅史や満それに慧音達やボルキヤンサー達一行は人里に向かって移

動した。

ボルキャンサー達を見て里の人々が驚くのはまた別の話。

#### 第4話 蟹の騎士と群れを従える騎士（後書き）

戦闘シーンは書くのが難しいです！しかし自分にはこれが限界です、  
すいません！！

この話に出てくるシザースはカードのAPが上がっています。  
今回はその設定を書いてみました。

アドベント（ボルキヤンサー）「5000AP」

ストライクベント（シザースピンチ）「2000AP」

ガードベント（シエルディフェンス）「3500GP」

ファイナルベント（シザースアタック）「6000AP」

こんな感じですよ。

蟹の癖にパワーアップし過ぎだろう！！と思われる方も居るかも知  
れませんがそこは主人公補正やご都合主義という事でお願ひします  
（汗）

それでは次の話もいつになるか分かりませんが、それでも読んでい  
ただけたら幸いです。

**第5話 問題の一部解決と新たな騎士の影（前書き）**

いいサブタイトルが思いつかないです（汗）

今回の話も大分無理矢理感がある展開です。

それにご都合主義な設定も出てきます。

グダグダな話ですがそれでも見ていただけるなら幸いです。

## 第5話 問題の一部解決と新たな騎士の影

「……以上が私と満君の知っている事です」

「なるほど、つまりあいつらはお前達の世界に居たミラーモンスターという存在でお前達が変身したのが仮面ライダーという存在という事か？」

「はい、その通りです」

雅史と満は慧音の家で慧音や妹紅にミラーモンスターの事や仮面ライダーの事について説明していた。

雅史達が戻ってきた時、里の人達はボルキャンサー達を見てかなり騒いでいたが慧音や妹紅それに偶然その場に居た命蓮寺の人達の御蔭で騒ぎは直に治まった。

命蓮寺の人達は用事があるらしくそのまま行ってしまった。信吾や琢磨それに寺小屋の生徒達を家に帰し、慧音の家で説明する事になった。

「お前達が結界の外からでは無く、違う世界から来たとはな」

「私達にはあまり自覚はありませんが」

「そうそう、死んだと思ったら真っ白な空間に居て、その後幻想郷に飛ばされたんですから」

満が苦笑しながらそう言うと、慧音と妹紅は何所か悲しそうな表情をした。

「二人が気にする事ではありませんよ」  
「そうですよ。死んだと言っても、今はこうして生きているんです」  
「ら」

雅史と満が笑いながら二人を励ます。

「・・・そうだな、ありがとう」  
「と言うか、私達が励ます筈が逆に励まされているな」  
「ははは、今はこれからの事について話しましょう」  
「そうですよ、色々と考えなきゃいけない事が在るんですから」

4人はこれからの事について話し合う。

「しかし、お前達の話を書く限りは、ミラーモンスターはお前達の契約モンスター以外は居ない筈なんだな？」  
「はい、なぜこの幻想郷に契約モンスター以外のモンスターが居るかわかりません。しかし何か対策を考えた方がいいでしょう」  
「なあ、それも大事だけど契約モンスターの餌の方はどうするんだ？話を聞く限りは餌をやらないとお前達が危ないんだろう？」

慧音と雅史が話していると妹紅が話掛けてくる。

「そうですね、ボルキャンサーはついさっき餌を与えたばかりですから。しばらくは大丈夫でしょう」

「俺の方はモンスターの数が多いから、早めに何とかした方がいいですね」

雅史と満がそれぞれ答える。

「確か、モンスターの餌は人間や死んだモンスターの生命エネルギーだったけ」

「前者は認められないから後者という事になるが、そう都合よくモンスターが現れるかが問題だな」

妹紅と慧音がそう言う。

雅史が餌の問題について考えているとカードデッキから何かを感じられた。

雅史がカードデッキを見ると何かが挟まっている。

「何だ？これは？」

「あれ？デッキに何か挟まってる？」

満のデッキにも挟まっていたようだ。

雅史と満がデッキから抜いたのは手紙だった。

「これは、手紙ですか？しかし今までこんな物は挟まっていません

でしたが」

「雅史さんの方にも在ったんですか？」

「何だそれは、手紙か？」

「その様ですね。見てみましょう」

「いいのか？私達も見ても？」

「構いませんよ」

「そうそう、こっちも別に問題無いですよ」

雅史と満が手紙を開くと。

『この手紙はあの空間の中で説明し忘れていた事を書いた物だ。お前が変身したか、モンスターへの餌に困ったか、体に違和感を感じたら、この手紙が現れる様にしておいた』

「あの空間という事は、オーデインからの手紙！」

「俺の方も同じ内容です！」

「オーデインとは確かお前達をこの幻想郷に送った奴か？」

「はい、先を読んで見ましょう」

『まずはお前の体について説明しておく、お前を生き返らせる時に体を少々弄らして貰った。そのため身体能力が以前より上がり、自然治癒能力が向上し、寿命も以前よりも延びている、どれくらい延びたか分からないが。最もそれ以外は普通の人間だが』

「いや、それ以外はってもう普通の人間じゃないだろう！それより



も人の体を勝手に弄るな！」

「お、落ち着け！満！」

「……先を読みます」

『次に仮面ライダーについてだがそちらの方も色々と手を加えた。まず変身に関してだがこれは鏡面などが無くても変身出来る様にしておいた。次にミラーワールドでの活動限界時間も無い。それにどんな所からでもゲート作りミラーワールドに行く事が出来る、その逆も然り。また変身した状態ならライドシューターも現実世界で使  
用できる。またデッキの強度も上げておいた』

「なるほど、あの時は深く考えなかつたけど近くに姿が映る物が無くても変身できるのか。それに色々と便利に成ってますね」

「そうですね。これならモンスターが出て色々に対応しやすくなりますね。続きを読みます」

『次に契約モンスターについてだ。モンスターも復元した時に手を加えている。まずモンスターもライダーと同じ様に現実世界での活動時間に制限が無い。またモンスターもゲートを作る事が出来る。そして餌についてだが餌は以前同様に人間や死んだモンスターの生命エネルギーだ、だがこれでは色々和不味いだろう。そのため別の方法を加えておいた。まずは人間や他の生き物と同じ様に食べ物を食べさせる事。もう一つは霊力、魔力、妖力といった力を持つ者から力を分けて貰う事だ』

「お！餌の問題もこれで大丈夫じゃないですか！」

「ああ、確かにこれなら何とかできるな」  
「そうだ！ちよつと試してみようよ」

満はそう言つとギガゼールを1体呼び出す。

「なんでモンスターを呼ぶんだ？」

「本当に食べ物を食べるか試してみますよ。慧音さん、この煎餅いいですか？」

「ああ、別に構わないぞ」

慧音に許可を貰つと、机の上に置いてあつた煎餅（しょうゆ味）を1枚取るとギガゼールに投げる。

「？」

煎餅を受け取つたギガゼールは煎餅を裏返したりしながら首を傾げる。

「それを食べてみる」

満が指示するとギガゼールは煎餅を食べる。

「お！ほんとに食べた！」  
「!?!」

今までに食べた餌とは違う感覚にギガゼールは驚いた。  
今までの餌は腹が膨れたり力が付いたりするだけだったが、これは  
『美味しい』と思えた。

すると。

「おい！何かいっぱい出てきたぞ！」

次々と現れるギガゼール、オメガゼール、マガゼール、ネガゼール  
達を見て妹紅が叫ぶ。

現れたガゼール達は煎餅に殺到し、結構量が在った煎餅はあっとい  
う間にその数を減らしていく。

「・・・凄いな」

「・・・はい、まるで餌に群がるアリの様です」

慧音と雅史がそんな事を言っていると後1枚になった煎餅をめぐつ  
てガゼール達が喧嘩を始め出す。

「お前ら！喧嘩するな!!」

満が静止の声を出す。ガゼル達は中々喧嘩を止めようとせず部屋がどンドン散らかる（主に壁や床それに周りの物などが壊れる）。満が契約のカードで止めようとした時。

「……お前達……部屋を……壊すな——————」

ガツゴン!!

慧音がギガゼール1体に頭突きを食らわす。

「グアア!!」

頭突きを受けたギガゼールは頭を押さえて倒れた、他のガゼル達はその光景を見て固まり大人しくなる。  
ちなみに最後の1枚は現れた大きな鉄が回収していった。  
それを見ていた3人は。

「……慧音さん、凄いですね」

「……モンスター相手に頭突きとは（あの鉄はボルキャンサーか）」

「……弾幕よりコッチの方が効いてるな」

「ゲツ！・・・何て硬い頭だ」

慧音はフラフラしながらそう言う

「慧音さん、すいません！！部屋を散らかしてというか壊してしまつて！！」

「うう・・・まあ、仕方ないさ。まさかこんな事態になるとは誰も思わないからな」

「本当にすいません！お前らも謝れ！」

満がそう言うとガゼル達が一斉に頭を下げる。

（モンスターが一斉に頭を下げるとは、前の世界では在りえない光景だな）

雅史が心の中でそう思うと、気を取り直して。

「それでは、続きを読んでも大丈夫ですか？」

「ああ、問題無い」

「こつちも大丈夫だ」

「いいですよ」

全員の返事を聞くと手紙の続きを読む。

『それと今お前が居る幻想郷にはお前以外にも仮面ライダーが居る。しかしライダー同士で戦っても願いが叶う事は無い、つまりは戦うだけ無意味だ。お前は自分の生き方を見つければいい』

「お前達以外にも仮面ライダーが幻想郷に居るのか？」

「私は満君がライダーと知った時に何と無くそう思っていました。これではつきりしました」

「うう、俺はあまり会いたくないな。特に俺の死ぬ原因に成った奴とは（東條の奴は許せないけど、俺も人の事は言えないしアイツはアイツなりの願いが在ったんだよな、歪んでたけど。でも浅倉には会いたくないな〜）」

「それは私も一緒ですよ。（まあ、あれはデッキにダメージを受けていた事に気づかなかった私のせいでもあるから全部、秋山 蓮のせいにするのはおかしいが）しかしこれは好都合ですね」

「どついう事だ？」

妹紅が雅史に問う。

「幻想郷に他のライダーが居るということは彼らの協力を得る事が出来れば、モンスターへの対応も簡単になります」

「でも、全員が協力してくれるとは思えませんけど・・・中には攻撃してくる奴がいますよ、絶対」

「そういう相手には最悪戦っても協力して貰います。恐らく幻想郷に居る、残りのライダーは私と満君そしてオーデインを除いて10人でしょう」

「なんでオーディンを除くんですか？」  
「もし、オーディンが居るなら態々手紙を用意しないで自分で来る  
でしょう?」

雅史がそう言つと満が成る程と頷く。

「しかし、お前達の話の聞く限り、ライダーは全員が協力してくれ  
るとは限らないんだろ?」

妹紅が尋ねる。

「大丈夫ですよ。私に1人程、心当たりがあります」

「ああ！俺もありますよ」

「それは一体誰だ?」

「彼の事を一言で表すなら」

「先輩の事を一言で表すなら」

「バカ」

雅史と満が同時に言う。

「……はあ?」

慧音と妹紅の声が重なる。

「満君も知っていましたか」

「はい、先輩を表すにはこの言葉が一番でしょ」

慧音と妹紅が啞然としてる中、雅史と満は手紙の続きに目を通す。

『最後に幻想郷に行った事でお前や契約モンスターに何かしらの変化があるかも知れんが大丈夫だろう、多分。それでは幸運を祈っておく』

「……………」

雅史と満は無言で手紙を閉じると。

「多分って何だあ—————!!」

2人の声が入りに響く。

その声に慧音と妹紅が正気に戻り2人を落ち着かせるのだった。







龍は溜息を吐くと、自分の主人を追いかけ『博麗神社』に向かった。

## 第5話 問題の一部解決と新たな騎士の影（後書き）

書いていてすっごい無理矢理感のある展開&ご都合主義な設定だと思いました。

そしてそんな話しか思いつけない自分にorz

この話の進み方の予定としては仮面ライダーシザーズこと須藤雅史が幻想郷中に居る仮面ライダー会っていくという話です。

13ライダーはこの作品を思いついた時点で出す予定でした。

ただオルタナティブとアビスは今だ出すかどうか迷っています。

こんなグダグダで駄作な小説ですが、それでも読んでいただけたら幸いです。

**第6話 ある朝の出来事（前書き）**

なんとか6話目を書けました。

仕事が忙しいです。

おまけに人が辞めるため更に忙しくなるよ）・、（

今回もグダグダな話です。

それでも読んで頂けたら幸いです。



「また私の焼き鳥屋に寄ってくれ。今日のお礼に好きなだけ奢ってやるよ」

と言った。

「本当ですか！」

「それは嬉しいですね。それではまた寄らして貰います」

2人がそれぞれ答え妹紅と別れる。

雅史と満は途中まで帰り道が一緒のため並んで歩く。

「満君、少し聞きたいのですが？」

「何ですか？」

「私は最初に脱落したので自分以外のライダーは龍騎とナイトそれにオーデインの3人くらいしか知りません。満君は何人くらい知っていますか？」

「そうですね。俺の知っているライダーは龍騎、ナイト、ゾルダ、タイガ、王蛇、オーデインの6人です。あと擬似ライダーオルタナティブというのも居ましたね」

「私が死んでから随分とライダーが増えましたね、おまけに擬似ライダーという者までいるとは、とりあえず残り10人の内5人まで分かりました。龍騎・城戸真司さんは協力してくれるでしょう。ナイト・秋山連さんも協力してくれるかもしれません。満君残りの3人、ゾルダ、タイガ、王蛇は誰か知っていますか？」

「ええ、知っています。まずゾルダは弁護士の北岡秀一です」

「噂は聞いた事があります。確かどんな不利な裁判でも逆転無罪に

し『クロをシロにしてしまっ』男と呼ばれていましたね（もつとも裏では多くの大手企業に法外な報酬を請求する悪徳弁護士と呼ばれているが・・・まあそれを言うなら私も悪徳刑事だが）。彼は協力してくれそうな人物ですか？」

雅史は北岡が協力してくれる人物か尋ねる。

「それは本人に会わない事には分かりませんね。次にタイガは大学院生の東條悟です。こいつは、協力してくれるかもしれないですけど・・・もしかしたら攻撃してくるかも知れませんが会った時は警戒した方がいいかも知れません」

「・・・そうですか」

満は東條悟の事を説明する時に少し暗い顔になったが雅史はあえて聞こうとしなかった。

「次に王蛇ですが、刑事だった雅史さんはよく知っているかもしれませんが凶悪殺人犯の浅倉威です」

「なっ！あ、浅倉がライダーに！それは本当ですか！！」

雅史は周りを気にせず声を荒げながら満に詰め寄る。

浅倉威、警察関係の者ならば一度はその名を聞いた事があるほどの犯罪者だ。



(浅倉をライダーにするなんて神崎士郎は何を考えている！私も人の事を言える立場ではない悪党だが、『イライラした』という理由だけで犯罪を犯すような奴をライダーにすれば、その力で暴れる事は分かるはずだろうに！)(それが神崎士郎の目的だったが)

雅史は心の中でそう叫ぶ。

「ま、雅史さん、落ち着いてください！周りの人がびっくりするじゃないですか！」

「え？あ！」

満に言われ、雅史が周りを見ると里の人達が何事といった感じで見ていた。

冷静になった雅史は周りの人達に「すいません」と頭を下げ、再び歩き出す。

「はぁー・・・しかし浅倉まで幻想郷に居るとはオーデインも思い切った事をしますね」

「そうですね。まあ考え様によっては心強いけど、アイツ結構強いし」

「問題は彼が協力してくれるか、ですね」

「絶対攻撃してきそうですね」

2人はどの様にして浅倉に協力してもらうか頭を悩ます。

そうこうしてる内に2人が別れる道に着いた。



「おはよ」

雅史は障子を開けたままの体勢で固まる。

「あ、雅史さん、起きられたんですね。朝食の準備は出来ていますよ」

「おはよう雅史さん、どうかしたの？障子を開けたまま固まって？」

信吾と琢磨が挨拶をし、琢磨が固まっている雅史に話かける。

しかし雅史は答えず、固まったまま動かない。

彼の視線の先には朝食の置かれた机を囲む様に座る、信吾、琢磨、ボルキャンサーの2人と1体が居た。

「……あ、あの、何でボルキャンサーが其処に座っているんですか？」

我に戻った雅史は信吾に尋ねる。

「ああ、朝食の準備をしていたら偶然ボルさんが居たので、一緒に朝食を食べようと誘ったんですよ」

「ボ、ボルさん？」

「はい、ボルキャンサーよりもボルさんの方が呼びやすいと思ったので」

雅史の問いに信吾が答える。

（モンスターにあだ名を付けるとは・・・しかし彼等はボルキャンサーの事が怖くないのか？とりあえず昨日紹介したが。本当は怖いんじゃないか？）

雅史は不意にそう思った。

いくら幻想郷の人間が妖怪を見慣れているといっても、ボルキャンサーや他のモンスターの姿は何処からどう見ても怪物だ。

現にボルキャンサーやガゼール達を見た里の人間はかなり騒いでいた（雅史や満は知らないが里の人間達が騒いだ理由はボルキャンサーやガゼール達が子供達の周りを囲んでいた為だ。誰だって行き成りそんな光景を見れば騒ぐだろう、自分の子供が居れば尚更だ。その誤解も慧音や妹紅それに命蓮寺の人達の御蔭で解けたが）。

「信吾君や琢磨君はボルキャンサーが怖く無いんですか？」

雅史が2人に問いかける。

「そうですね、怖いか怖くないかと聞かれたら怖いですよ。でも怖がってばかりいたら仲良くなれないでしょ？」

「妖怪の中には人を食べちゃう怖い妖怪も居るけど、妖怪全部がそうじゃないし中には慧音先生や命蓮寺の人達みたいに優しい妖怪も

居るよ？だからボルさんとは仲良くしたいな」

2人の答えを聞いた雅史は。

（凄いな、昨日ミラーモンスターに襲われたのに同じミラーモンスターのボルキャンサーと仲良くしたいなんて。普通じゃ中々出来ない事だ。）

雅史がそう思いふとボルキャンサーの方を見るとボルキャンサーが震えていた。

「……………」

ボルキャンサーは今まで感じた事のない感覚に戸惑っていた。なぜこの人間2人は自分と仲良くしたいのだろう？普通人間は自分のようなモンスターを恐れる筈だ。今まで餌にしてきた人間達はそうだった。

なのになぜこの人間2人は自分と仲良くしたいのだろう？前まではこんな事は考えもしなかった。

オーデインに復元されてから自分は色々と考え想う様になった、この感情を言葉で表すなら。

『嬉しい』という感情だった。

「「え？」」

信吾と琢磨の声が重なる。

ボルキヤンサーが2人に向けて両腕を差し出していた、ボルキヤンサーの行動に驚いた雅史だったが直に笑うと。

「ボルキヤンサーが2人と仲良くしたいそうですよ？」

雅史の言葉に信吾と琢磨が笑顔でボルキヤンサーの腕を掴む。

(まさかボルキヤンサーがこの様な行動を取るなんて・・・これが手紙に書いてあった変化なのか?)

雅史が考えていると。

「雅史さん朝食にしましょうか」

信吾が声を掛けてくる。

「そうですね。食べましょうか」

そうして3人と1体は朝食を食べ始めた。

第6話 ある朝の出来事（後書き）

相変わらずのグダグダ小説だZ!!

4月から仕事が忙しくなるので遅れるかも知れません。  
それでも読んで頂けたら幸いです。

**第7話 博麗の巫女と赤き龍騎士（前書き）**

なんとかか今月中に書けました。

相変わらずのグダグダ小説ですが見ていただけたら幸いです。





雅史が飲んでいた麦茶を嘔き出す。

「ゲツホ！ゴツホ！た、琢磨君その話本当ですか！」

「え？」

「その博麗神社に居た人の名前が城戸真司というのは本当ですか！」  
「う、うん」

雅史の慌い問いに琢磨は気押されながらも答える。

「そうですか。琢磨君先ほどはきつい聞き方をしてすみませんでした」

「別に気にしてないけど、どうかしたの？」

「いえ、私が探している人の名前が出てきたので」

「その城戸真司という人が雅史さんの探している人ですか？」

「ええ。信吾君、博麗神社は此処から遠いですか？」

「距離自体はそんなに離れていないですが博麗神社に行くまでに妖怪に襲われる可能性がありますね」

「まあ、私はボルキヤンサーが居るから大丈夫でしょう。博麗神社に行くまでの地図はありますか？」

「有りますよ、直に持ってきますね」

そう言つと信吾は棚から地図を取り出し雅史に渡す。

「どうぞ」



よりも早くけりがついた（もつともその場合は相手の妖怪がボロ雑巾の様になっていたが）。  
雅史が階段の中間地点に来た時。

キイイイイイン キイイイイイン

「！？モンスターか！！」

階段の上からモンスターの気配を感じた雅史は階段を駆け上がる。

「変身！」

走りながらポーズを取りVバックルにデツキをセットしシザースに変身した雅史が見たのは、長い黒髪の頭に赤色のリボンをつけ肩と腋の部分に布地が無く袴ではなくスカートを履いた巫女服の少女と3体のミスパイダーと戦う赤き龍の騎士・仮面ライダー龍騎の姿だった。

（間違いないあれは仮面ライダー龍騎だ。もう一人が博麗の巫女の博麗霊夢かとりあえず手を貸そう）

シザースがそう思い龍騎の援護に向かおうとした時、ジョロウグモ型のモンスター・レスパイダーが現れ霊夢に襲い掛かる。



「真司！私のこといいからそいつらを何とかしなさい！」

霊夢はそう言うとレスパイダーに向かって退魔針やお札を投げるがレスパイダーは攻撃に怯みながらも霊夢に向かって行く。

「シューア！」

霊夢がスペルカードを発動させようとするがレスパイダーの吐いた糸が腕に当たり、持っていたスペルカードを落としてしまう。

（しまった！）

レスパイダーは腕を振り上げ霊夢に向かって振り下ろす。

「くー！」

霊夢は霊力で体を強化し即席の結界を作ると襲い掛かってくるであろう衝撃に備える。

「霊夢ちゃん！」

龍騎は霊夢を助けるため、カードを取り出そうとするがミスパイダーがそれを許さず一斉に飛び掛り動きを封じてしまう。

(不味いこのままじゃ霊夢ちゃんが！)

龍騎がもがくが拘束は解けない、そうしている間にレスパイダーが霊夢に腕を振り下ろした。

「霊夢ちゃん！！！！」

龍騎の頭の中で最悪の事態を想像し叫んだ。

そしてレスパイダーの腕が霊夢の体に・・・当たる事は無かった。レスパイダーの攻撃は霊夢に当たる前に止められたボルキャンサーによって。

ミスパイダー達がボルキャンサーの乱入に驚いている隙に龍騎は拘束を解きミスパイダーの1体に蹴りを叩き込む。

「「「シューーー！！」「」」

ミスパイダー達はドミノ倒しの様に倒れ。

「シューアー！！」

レスパイダーはボルキャンサーに投げ飛ばされ、地面を転がった。

「か、蟹？」

「このモンスターは・・・」

「危なかったですね」

霊夢と龍騎はボルキャンサーを見ていると後ろから話しかけられる。  
2人が振り向くとシザースが立っていた。

「あ、アンタは・・・」

「真司、知り合い？」

「知り合いといえば知り合いですね。しかし今はこのモンスター達を倒しましょう」

<ストライクベント>

シザースはそう言うとカードをセットしシザースピンチを装備する。

「おい、アンタまた俺のこと騙そうとしてるんじゃないのか？」

「そんな気はありませんよ。信じるか信じないかは貴方の自由です」

「・・・分かったよ。アンタの事を信用する、でもまた騙したら承知しないからな！」

「ええ、分かっています」



龍騎はデッキからカードを抜き龍召機甲ドラグバイザーにセットする。

<ソードベント>

認証音声と共に青龍刀・ドラグセイバーが現れ龍騎がそれをキャッチする。

そして龍騎はミスパイダー達にシザースはレスパイダーに向かっていく。

「シューー!!」

体勢を立て直したミスパイダー達は再び龍騎に襲い掛かる。

「おりゃ!!」

「シューー!!」

龍騎はその内の1体をドラグセイバーで切りつけると後ろのミスパイダーに蹴りを放ち、残ったミスパイダーの顔面をドラグバイザーで殴る。

龍騎はカードを抜くとドラグバイザーにセットする。

<アドベント>

「グオオオオオー！！！」

龍騎の契約モンスターである龍型のモンスター・無双龍ドラグレッツ  
ダーが現れミスパイダー達に向かって口からの火球ドラグブレスを  
放ち攻撃する。

「「シューーーーーー！！！」」

3体の内2体はドラグブレスに焼かれ爆発四散する。

「シュ、シュー」

生き残ったミスパイダーは逃げようとするが。

「逃がすか！」

龍騎は素早くデッキからカードを抜くとバイザーにセットする。



「一気に決める！」

シザースはミスパイダーに止めを刺す為にバイザーにカードを入れる。

<ファイナルベント>

認証音声が鳴るとミスパイダーと戦っていたボルキヤンサーがミスパイダーを蹴飛ばしてからシザースの後ろに行きシザースをジャンプさせる。

そしてシザースが空中前転しながらミスパイダー体当たりする。

「シュアーーーーー!!!」

断末魔を上げながら爆発四散した。

シザースのファイナルベント「シザースアタック」

戦いが終わり、シザースと龍騎はVバックルからデッキを外す。

「久しぶりですね、城戸さん」

「アンタもやつぱり幻想郷にきてたんだな」

「ええ、城戸さんはオーデインの手紙を読みましたか？」

「ああ、読んだよ」

「それなら話は早い。この幻想郷には何故か契約モンスター以外のモンスターが居ます、奴らを放つて置いたらかなりの被害がでるでしょう。ですから私は幻想郷に居る他のライダー達に協力してモンスター達と戦うように頼むつもりです」

雅史がそう言うと真司は驚いた顔をする。

「先つきは戦っていたからよく考えなかったけど・・・アンタ変わったな」

「そうですね・・・オーデインに少し説教されましたから」

「どんな説教か気になるけど、アンタ・・・じゃなくて須藤さんはもう前みたい悪い事はしないんだよな？」

「先ほどもいいましたが、そんな事もうする気はありません」

「そうか・・・だったら俺も協力するよ！」

「ありがとうございます。城戸さんは他のライダーに会いましたか？」

「いや・・・須藤さん以外には会ってないよ」

「そうですね、私の方は仮面ライダーインペラー・佐野満という人に会いました今は私と同じで人里にいます」

「そうか、佐野の奴は人里に居るのか」

「ええ、ですから私と城戸さん、満君を抜いて後9人のライダーを捜さない」と

雅史と真司が話していると霊夢が声を掛ける。

「ちょっと真司それにえ〜っと・・・」

「あ、自己紹介していませんでしたね。初めまして須藤雅史といいます」

「そう、よろしく雅史さん私はこの博麗神社の巫女・博麗霊夢よ」

「あれ？なんで俺の時は呼び捨てで須藤さんはさんづけなんだ？」

「いや、アンタは呼び捨ての方がしっくりくるから」

「ひどい！俺の方が年上なのに！」

「別に私がアンタをどう呼ぼうがいいでしょう。少し静かにしていなさい」

「ムグ！」

霊夢が真司の口にお札をペッタッと貼る。

「須藤さん長話になるなら家の中で話せば。お茶くらいは出すわよ」

「そうですか。ありがとうございます」

霊夢と雅史は家の中に入っていった。

真司もムームー言いながらも2人の後を追う家の中に入っていった。

.....

魔法の森それは幻想郷の「魔」が集まった森である。  
常に禍々しい妖気で溢れ、化け物茸の胞子が舞っており普通の人間  
はおるか妖怪も中々寄り付かない、もつともある程度の力があるか  
胞子や瘴気に耐えられれば大丈夫だが。

「ヴウウウー！ー！ー！ー！ー！」

そんな魔法の森に断末魔が響く。  
声の主はシアゴーストらしくその体には黒い槍が深々と突き刺さり、  
シアゴーストを絶命させていた。  
やがてシアゴーストの体が蒸発する様に消え生命エネルギーが現れ  
る。

「キイイイイイイッ」

それを巨大な蝙蝠が吸収する。

「・・・・・・・・・・」

その光景を見ている者が居た。  
薄暗い森の中で姿はよく見えないが2つの青い眼だけが光っていた。  
やがて蝙蝠が生命エネルギーを吸収し終わるとその人物は森の中え

と消えていった。



第7話 博麗の巫女と赤き龍騎士（後書き）

やっと龍騎を出せました！この調子でいったら全員出るまでどれくらい掛かるかわかりません（汗）

それでも読んで頂けたら幸いです。

第7・5話 インペラーと大魔法使い（前書き）

この話に雅史は出てきません。

グダグダな話ですが、見て貰えたら幸いです。

## 第7・5話 インペラーと大魔法使い

「はあ~~~~」

人里の道を満が溜息を吐きながら歩いていた。  
彼が溜息を吐くには理由があった。

（あいつらの餌代だけで俺の財布はもうスツカラカンだよ）

彼は自分の契約モンスター達の餌代に頭を悩ましていた。

インペラーの契約モンスター・ギガゼールは四肢から発する電気信号によって、メガゼール、マガゼール、ネガゼール、オメガゼールなど他のレイヨウ型モンスターと意思疎通し、常に複数で行動する習性を持っているその為インペラーは多くのモンスターを従える事が出来る。

しかしその分多く餌を食べさせなくてはいけない。

その為満の今まで貯めたお金は凄腕で減っていた。

（都合よくモンスターが現れないかな~~~~まあこの里に現れたら不味いけど）

満がそんな事を考えていると。

キイイイイン

「え？」

僅かにモンスターの気配を感じた。

（嘘！本当に現れた！）

満は気配のした方向に走り出したが気配は途中で消えてしまった。

（何処に行ったんだ？とりあえずギガゼール達に探させよう）

満はそう思うとギガゼール達を呼び出し指示を出す。

「この里の何処かにモンスターが居る筈だ。見つけ次第知らせろ」

ガゼール達は頷くと人里に散らばっていった。

（ふう、後はあいつらからの連絡を待つだけだな）

「あら、満さんじゃないですか」

満がそう思った時、誰かに話しかけられた。

満が話しかけられた方向を向くと金髪に紫のグラデーションが入ったロングウェーブの髪に白黒のゴスロリ風のドレス姿で同じく黒いマントを羽織った女性が立っていた。

「あー！白蓮さん、あの時はお世話になりました！」

満に話しかけてきた女性は以前里の人達がボルキャンサーやギガゼール達を見て騒いだ時に慧音や妹紅と一緒に騒ぎを鎮めてくれた命蓮寺の人達の1人、聖 白蓮だった。

「いいえ、私は当然の事をしただけですよ。それに彼等は無闇に人を襲わないと分かりましたから」

「でも、お世話になったのは本当ですから。そういえば星さんや他の命蓮寺の人達はどうしたんですか？」

「星やナズーリン、一輪に雲山それに水蜜は用事で里の外に行っています。私は少し確かめたい事が在ったので」

「確かめたい事ですか？」

「はい、この里にボルさんやギガさん達以外のモンスター気配を感じた様な気がしたのでその確認をしていたんです」

「！！・・・モンスターが？」

「はい、私もボルさんやギガさん達以外のモンスターは見ていませんが、もし居たら人や他の生き物を襲わない様に説得しようと思っただけ」

「・・・説得ですか？白蓮さん、ライダーの契約モンスターなら分かるんですけど、野生のモンスターは無理だと思いますよ？」

満は白蓮のモンスターを説得するという考えを無理だと言った。

白蓮の「人も妖怪も神も仏も全て平等」という夢は満も知っている。その夢自体は凄いし偉いと思うがモンスターを説得という考えは流石に無理だろうと思った。

基本的にモンスターはあまり高い知性は持っておらず人間を補食するという原始的な本能に従って行動している。

契約モンスターならそういう事できるだろうが、野生のモンスターは無理だと満は思った。

「たとえ無理だとしても私はモンスターを説得したいと思っています」

白蓮は決意に満ちた顔で言った。

「白蓮さんは凄いですね・・・よし！それなら俺も応援しますよ！」

「ありがとうございます！そういうえば満さんはなにか用事でも？」

「え！？（どうしよう）まさかモンスターを倒すために探していませんかと考えていたんです。あいつら数が多いからこのままだと俺の財布が空っぽになってしまいそうで」

「そうですね・・・そうだ！確か契約モンスターの餌は魔力や妖力でいけるんですよね。それだったら私が提供しますよ」

「え！いいんですか！」

「はい、応援してくれた御礼です。どうやってあげればいいですか？」

「ああ、このカードに力を注いでくれたらいいんです」

満はギガゼールの描かれたカードを渡す。

「このカードに力を注げばいいですね？」

白蓮は受け取ったカードに力を注ぐ。

しばらくしてギガゼール達から満足という連絡が来た。

「白蓮さん、もういいみたいです」

「そうですね、それではこれを返しますね。もしまた餌が必要になったら言って下さいね」

「本当にありがとうございます」

「いえ、それでは私はこれで」

白蓮はそう言うと歩いていった。

(ふう、白蓮さんの御蔭で餌の問題も解決したな。でも白蓮さんは凄いなモンスターを説得なんて普通は考えないのに、それをしようなんてさ。俺じゃまず無理だな)







一斉に投擲された杖はテラバイダーの体に突き刺さっていく。

「グ、グウウウー」

テラバイダーは体に痛々しい程杖が突き刺さりはもはや虫の息だった。

「止めだ」

インペラーは一言そう言うと足を上げガゼルバイザーにカードをセツトする。

<ファイナルベント>

認証音声が鳴るとガゼル達が一斉にテラバイダーに襲い掛かる。

「グアアア」

テラバイダーは最早まともに立ち事すらできずにいた。

そして最後にテラバイダーが見たのは迫るインペラーの膝だった。

インペラーの飛び膝蹴りを食らいテラバイダーは断末魔を上げる事なく爆発四散した。

インペラーのファイナルベント「ドライブディバイダー」

「悪いね、でも俺も今の幸せを守らなくちゃいけないからさ」

インペラーはそう言いとライドシューターに乗り現実世界へと帰って行った。

第7・5話 インペラーと大魔法使い（後書き）

今回もグダグダですね

次回も見て貰えたら幸いです。

**番外編 龍騎と靈夢（前書き）**

今回の話でも雅史は出てきません（汗）

この話は靈夢と真司の出会いを描いた話です。

グダグダですがそれでも見て貰えたら幸いです。



霊夢がそんな事を考えていると穴から人が落ちてきた。

「ふげ!!」

落ちてきた人物は大体20代くらいの茶髪の青年で顔から地面にぶつかり変な声を出した。

「いててて、オーデインのやつ〜! もう少しましな送り方は無かったのかよ!!」

青年こと城戸真司は顔を顔をさすりながら立ち上がる。

「此処が幻想郷という所かな?」

「確かに此処は幻想郷よ」

「うわ〜!〜!〜!」

「きゃあ!〜!」

真司は後ろから霊夢に声を掛けられ驚いて叫ぶ、霊夢もいきなり真司が叫んだため驚いてしまう。

「行き成り叫ばないでよ! びっくりするでしょう!」

「え! あ、ごめん・・・てっ! 誰?」

「人に名前を尋ねる時は自分からって習わなかったの？」

「え？ああ！ごめん、俺は城戸真司、君は？」

「私はこの博麗神社の巫女、博麗霊夢よ。アンタはその格好からして外人だね」

「外人？」

「アンタみたいに何かの拍子に幻想郷に迷い込んだ人間の事をそういうのよ、もつとも迷い込む以外にも誰かさんが連れてくる場合があるけど、アンタは連れてこられたパターンの様ね」

「まあ、確かに俺はオーデインの奴にこの世界に飛ばされたけど・

」

「ふ〜ん（どうやら今回の外人人は紫が連れてきたわけじゃなさそうね）とりあえず詳しい話は家の方で話しましょう。案内するからついてきて」

「分かった」

霊夢の後を真司がついて行こうとした時。

キイイイイイン キイイイイイン

（え！？モンスター！！）

突然モンスターの気配がし、真司が辺りを見回すと境内に置いてある水飲み場から突然、巨大なブーメランが飛び出し、霊夢に向かって飛んでいく。



「危ない!!」

「え? きゃあ!!」

真司が霊夢に飛びつき二人が地面に倒れる。

ブーメランは二人の頭上を飛んでいく。

もし真司が霊夢を庇わなければ今頃、霊夢の首は落ちていただろう。

「大丈夫! 霊夢ちゃん!」

「え、ええ助かったわ。さっきのは一体?」

真司と霊夢がブーメランの飛んできた水飲み場を見ると其処からカミキリ虫型のモンスター・ゼノバイターが現れ、戻ってきたブーメランを掴んだ。

「グウウウウ」

「何・・妖怪・・いや違う、じゃあ一体?」

「やっぱりモンスターか!」

「真司、アンタはコイツの事を知っているの?」

「ああ、よく知っているよ。説明は後にしてまずこのモンスターを倒さないと」

「倒すってアンタ戦えるの? 少なくともコイツ、そこ等の妖怪より強そうよ」

「大丈夫! むしろ俺はこういう奴ら専門だから!」

真司はそう言っているとポケットからデッキを取り出し、前にかざしVバ

ツクルを装着する。  
そして右手を前斜め上に伸ばすポーズを取ると。

「変身！」

Vバックルにデッキをセットする。  
真司に虚像が重なり仮面ライダー龍騎に変身する。

「っしゅあっ！」

「真司？その姿は・・・」

「霊夢ちゃんは下がってて！」

龍騎は霊夢にそう言つとデッキからカードを抜き、ドラグバイザーにセットする。

<ストライクベント>

認証音声が鳴り龍騎のもとにドラグレッダーの頭を模した手甲・ドラグクローが召喚される。

「グウウウ！」

しかしゼノバイダーがブーメランを投げドラグクローを叩き落とす。  
ゼノバイダーはニヤリと笑うが。

<ソードベント>

「グウ!!!」

またも認証音声が響き、龍騎の手にドラグセイバーが装備される。

「悪いな、お前みたいなタイプのモンスターとは戦った事があるからな」

龍騎は以前戦ったゼノダイバー（別個体）との戦闘経験を活かしドラグクローを囿に使い、ドラグセイバーを召喚したのだ。

「はあ!!!」

「グウウ!!!」

龍騎はゼノバイダーに近づきドラグセイバーを振り下ろすがゼノバイダーがブーメランで受け止め、鏖迫り合い状態になるが徐々に龍騎が押され始める。

(くっ！コイツ！前に戦った奴より力が強い！このままじゃ押し切られる！)

龍騎がそう思った時、いきなりゼノバイダーが力をいれ龍騎を押し飛ばした。

「うわあ！」

受身を取れず龍騎はそのまま地面を転がる、ゼノバイダーはその隙を逃さずブーメランを構え龍騎に襲い掛かった。

(不味い！)

龍騎がそう思った時。

霊符「夢想封印」

「グ、グウウウ！？」

突然、大量のお札やカラフルな玉が現れゼノバイダーに当たり体制が大きく崩れそのまま地面に倒れた。







「はあ~~~~財布が空っぽだ。あの子、本当に巫女か？」

真司が博麗神社の居住スペースにある通常よりも大きめ風呂に浸かりながらそんな事を言っていた。

（それよりも幻想郷か・・・オーデインからは簡単な説明しか受けなかったからな。改めて説明されると凄い世界だよな）

真司がそう思っていると。

「お邪魔するわよ」

扉が開きタオル一枚を体に巻いた霊夢が入ってくる。

「・・・ええええー！！！！れ、霊夢ちゃん！なに入ってきてるの！！！」

「何って・・・助けてくれたお礼に、背中を流そうと思ったんだけど」「いや！お礼って！霊夢ちゃんは恥ずかしくないわけ！」

「なに言ってるのよ、恥ずかしいに決まっているでしょう。私だって羞恥心くらいあるわよ、さあさっさと背中を出しなさい。はいタオル」



霊夢は真司にタオルを渡す。

「いや！でも！」

「イ・イ・カ・ラ」

「はい！」

真司は腰にタオルを巻くと湯舟から出て座り、霊夢は膝立ちになり真司の背中を洗い出す。

霊夢に背中を流して貰うなんて羨ましいぞ、しんちゃん！！

「俺は嵐を呼ぶ五歳児じゃない！！」

「・・・なに言ってるのよ、アンタ」

「え！いや、何でも無いよ！！」

霊夢は止めていた手を再び動かす。

（うわゝ緊張する！女の子に背中を流して貰う事なんて今まで無かったからな！それに霊夢ちゃん歳のわりに大人びているから尚更だよ！）

（大きな背中だなゝそういえば、私って霖之助さんや雲山以外に男の知り合いがないわね。まあどうでもいい事だけど・・・）

しばらくして霊夢が真司の背中を洗い終わる。

「はい、お仕舞い」

「あ、ありがとう霊夢ちゃん」

「別にいいわよ、お礼なんだし。じゃあ私は上がるわね」

「いや、俺が上がるから霊夢ちゃんは風呂に浸かりなよ！」

真司が立とうとした時、足を滑らせ倒れる。

「ぐわ！いてて。あれこれは・・・」

真司の手には一枚のタオルが握られていた。

「真司、確かにお礼で背中を流したけどね・・・流石に此処まで許した覚えは無いわよ」

霊夢の恐ろしく冷たい声の後に。

バツコーーーン！！！！

意識を失う瞬間に真司が見たのは片手で胸を隠し（更に大事な所は湯気で見えなかったが）もう片方の腕でパンチを繰り返している霊

夢の姿だった。

番外編 龍騎と靈夢（後書き）

はい、色々とあれですね。

最初に言っておく。これは作者もびっくりだ！

はい、すみません！！思いつきで書いていたら凄い事になっていました！

次回の話でようやく雅史も再登場します。  
そして新たなライダーも。

## 第8話 魔法の森のナイト（前書き）

ようやく雅史が再登場します。

今回もグダグダですが見て貰えたら幸いです。

## 第8話 魔法の森のナイト

魔法の森の中にある西洋風の一軒家『霧雨魔法店』魔法店と名乗っているが、魔法店と呼べるような店ではなく、依頼を受けて店主が動く何でも請け負い屋になっている。

店主曰く、妖怪退治から水道管工事までなんでもござれだそうだ。そんな店の中で柔らかかそうな金髪のロングヘアで片側だけおさげにして前に垂らし黒系の服に白いエプロン姿のいかにも魔法使いという格好をした少女、霧雨魔法店の店主兼家主・霧雨魔理沙が退屈そうにリボンのついた黒い三角帽を手で弄りながら椅子に座っていた。

「あ〜退屈だ、退屈すぎるぜ」

「そんなに暇なら自分の部屋を掃除したらどうだ？」

魔理沙の声に近くで本を読んでいた男が答える。

「あんな蓮、私の部屋はもう十分綺麗だぞ。あれ以上どう綺麗にするって言うんだ？」

「物を端っこに寄せただけの部屋の何処が綺麗なのか疑問だがな」

男・秋山 蓮がそう言う。

「そんな事よりもさ、何か面白い事してくれないか？このままじゃ

「退屈で死にそうだけ」

「はあ、じゃあ、聞くが何をすれば面白いんだ？」

「うん．．．そうだ！お前がダークウイングの背中からバンジージャンプするのはどうだ！」

「するわけ無いだろう、バカか」

「ええ！別にいいだろう、居候なんだから！」

「居候というだけで命を賭けるのは御免だ」

2人がそんな事を言い合っていると。

コンコン

ドアをノックする音が鳴り1人の少女が入ってくる。

「一体何を言い合っているの？外まで聞こえていたわよ？」

青いノースリーブに同じ色のロングスカートを穿き、肩にケープのようなものを羽織り金髪の頭に赤いリボンをヘアバンドの様に巻いた、一見すると人形のように綺麗な容姿の少女・アリス・マーガトロイドが2人向かって尋ねた。

「お、アリスかいや蓮の奴がさー」

少女説明中……

「という訳なんだ」

「はぁ・・・それはあなたが悪いでしょう」

「ええ！なんでだよ！」

「見る方はいいけど、やる方は大変でしょう、下手すれば死ぬわよ？もし蓮が死んだら・・・あなた責任、取れる？」

「う・・・」

アリスの言葉に魔理沙は黙ってしまふ。

それを見ていた蓮は空気を換えようと、アリスの持っていたバスケットを見て尋ねた。

「アリス、そのバスケットは何だ？」

「え？ああ、これね、これはクッキーよ。少し作りすぎちゃってね」

「あれ？昨日も前の日もお菓子を作りすぎたって言って来たよな？」

先ほどまで黙っていた魔理沙がそう言う。

「えーいや、べ、別に偶然よ！」

アリスは慌てながらそう言う。







「あれは?・・・」

「あら、魔理沙にアリスじゃない」

「魔理沙とアリスって霊夢ちゃんの友達?」

「まあ、そんなところね。でももう1人いるけど知らない人ね」

雅史達が話している内に魔理沙達が境内に着地する。

「よお、霊夢!」

「魔理沙にアリス、何かよう?それにその人は誰?」

「おう、ようってのはコイツの事で・・・あれ蓮どうしたんだ?」

「蓮?」

「・・・」

蓮の様子が変わるので魔理沙とアリスが声を掛けるが蓮は驚いた顔をして答えない。

ふと、雅史と真司も驚いた顔をしているのに気づいた霊夢が声を掛ける前に。

「蓮・・・」

「城戸・・・」

真司と蓮が互いの名前を言う。

「・・・あの手紙を見てもしかしたらと思ったが、お前も来ていたんだな」

「まあな・・・でも蓮、お前が此処に来たって事は・・・」

「・・・ああ、お前の思っているとうり俺は恵里が目覚める前に・・・死んだ」

「!?!?・・・そうか」

真司と蓮の雰囲気、霧囿気、魔理沙、アリスの3人は声を掛けられずにいた。

(何?真司の感じがいつもと違う。いつもはバカっぽいのに、アイツってこんなシリアスな雰囲気を出せたわけ?)

(うわ~~~~蓮って、戦いの時やシリアスになるとまた感じが変わるよな)

(え、え、恵里?誰よ、名前からして女性よね。蓮とはどういう関係なわけ?ま、まさか、こ、恋人!いやいや!まだ恋人と決まったわけじゃないわ。落ち着くのを私、そもそも蓮に恋人が居たって私には関係ないじゃない!)

3人がそう思っていると、蓮が雅史の方を向く。

「城戸、色々と話たい事もあるがまず聞きたいのは何故コイツが此処に居る?コイツがどういう奴かお前も知っているだろう?」

「おい、蓮。須藤さんはもう前のような人じゃない」

「どうだかな?また騙されているんじゃないか?」

「確かに以前の私を知っている貴方ならそう思っても仕方が無いです。しかし城戸さんが言ったとおり私は以前のような事をするつもりはありませんよ」

「だからお前を信じると？」

「ええ」

雅史と蓮の雰囲気はドンドン険悪になる。

それも仕方が無いだろう。

蓮からすれば雅史は多くの人間をモンスターの餌にしていた悪人、雅史からすれば分かっているにも蓮は自分の死の原因。

お互いそう簡単に割り切れないのだ。  
しばらくして。

「ならこれで話を付けるか？」

蓮がデッキを取り出す。

「貴方は話が早い。私もそう思っていた所です」

雅史もデッキを取り出す。

互いの腰にバックルが装着される。

蓮は腰を左にひねり、曲げた左手を正面に見せるようなポーズを取り、雅史もポーズを取る。

「お、おい！y」

真司が止める前に。

「変身！」

2人がバツクルにデツキをセツトする。

虚像が重なり雅史は仮面ライダーシザースに蓮は紺色のライダーズ  
ーツに銀色の鎧を着け、蝙蝠の様な仮面を付けた騎士・仮面ライダ  
ーナイトに姿を変える。

シザースとナイトはシザースバイザーとダークバイザーにカードを  
セツトする。

<ストライクベント>

<ソードベント>

シザースはシザースピンチ、ナイトはウイングランサーを装備しぶ  
つかり合う。

ナイトがウイングランサーを繰り出せばシザースがシザースピンチ  
で受け止め、ナイトに向かってシザースバイザーで攻撃をしかける  
がナイトがダークバイザーで受け止める。

ナイトは一旦距離をとるとバイザーにカードを入れる。

<トリックベント>

認証音声が鳴るとトリックベント・シャドールイリユージョンが発動し、ナイトが6人に増える。

「ふ、増えた！」

「初めて見るカードね」

「フランクのスペルカードみたいだぜ」

霊夢、アリス、魔理沙の言葉を余所にシザースはカードをセットする。

<アドベント>

認証音声と共にボルキャンサーが現れシザースと共にナイト達に攻撃を仕掛ける。  
攻撃を受けた分身が次々と碎けていく。

「くっ！（コイツ前より力が上がっている！）」

「（カードの数なら向こうが上ならば他のカードが使われる前に決める！）行きますよ！」

ナイトはカードを取り出す。

「させません！」

シザースがそう言うと、ボルキャンサーが口から大量の泡を吐き出す。

「何！？うわっ！！」

ナイトは泡が当たった衝撃でカードを落とし、後ろに吹き飛ばされる。

シザースはナイトにすぐさま近づくとき、ダークバイザーを踏みつけ、シザースピンチをナイトの首に突きつける。

「私の勝ちです」

「いや・・・まだだ！」

「！？ぐわっ！！」

シザースはナイトに足払いをされ倒れる。

ナイトはダークバイザーを掴むと後転し距離をとりカードを取り出す。

するとナイトの周りに風が吹き始めどんどん強くなる。

「何だ？あのカードは？」

「何？風？」



「何で風が？」

「蓮があのカードを引いた瞬間に風が吹き始めたわ」

シザース、霊夢、魔理沙、アリスがそんな事を言う中、唯一そのカードの正体を知る真司は。

「まさかあのカードを使う気か！！」蓮！

真司が声を出すがナイトの周りの風が激しくなりその声を掻き消す。あまりの風いや、もはや疾風ともいえる風に霊夢達はスカートを押さえ、真司は両腕で顔を庇う様な体勢を取る。

(何だ？何が起こっている？)

シザースがナイトを包み込んだ風の壁を見ていると。

<<サバイブ>>

エコーの掛かった電子音声が響き風が止む。

其処には先ほどとは違う姿のナイトが居た。

黒いライダースーツに青い鎧、背中には一對のマントを付け、左腕に盾を付けた、疾風の騎士・仮面ライダーナイトサバイブが其処に居た。

第8話 魔法の森のナイト（後書き）

すみません今回の話は此処までです（汗）

誠にすみませんが次回まで待つてください！すみません！！ m

— — ( ; ) m

第9話 疾風の騎士（前書き）

シザースVSナイト戦の続きです。

グダグダな話ですが見て貰えたら幸いです。

## 第9話 疾風の騎士

（何だ！あのナイトの姿は！！）

シザースはナイトの突然の変化に戸惑うがナイトサバイブはそんなシザースの心境は関係なしに翼召剣ダークバイザーツバイから片手剣・ダークブレードを引き抜き、シザースに切り掛る。

「くっ！」

シザースもシザースピンチをダークブレードにぶつけるが。

バッキン！！

「なっ！？」

シザースピンチとダークブレードがぶつかり合った瞬間、シザースピンチが粉々に砕け散った。

シザースは後ろに飛んで距離をとる。

（何だ！武器の威力が上がっている！！）





を左腕に装着する。

ガツキン!!

シエルディフェンスがダークブレードの攻撃を防ぐ。

シザースとナイトサバイブは後ろに跳びお互いに距離をとる。

(攻撃では向こうが上か・・・なら防御しつつ接近して隙を突く!)

(何か企んでいるようだが、真正面から叩き潰す!)

シザースとナイトサバイブは互いに走り出そうとした瞬間。

「やめる!!」

龍騎が静止の声を出す。

「城戸! 邪魔をするな!!」

「城戸さん、今は邪魔をしないで貰えますか?」

「.....」

戦いに水を差された2人は龍騎に文句を言うが、龍騎は無言でカードをバイザーに入れる。

<アドベント>

「グオオオオオオーーーーーー!!!」

ドラグレッダーが現れシザースとナイトサバイブにドラグブレスで攻撃する。

「うわああああー!!!」

ドラグブレスがシザースとナイトサバイブの近くの地面に当たり2人が爆風で吹き飛ばす。

龍騎はそんな2人を見て。

「アンタ達・・・何してんだ!!!なんで幻想郷に来てまで戦ってんだよ!!!」

「?!?」

龍騎の悲痛な叫びにシザースやナイトサバイブは先ほどの攻撃の事で文句を言えずに黙る。

「確かに蓮の言うとおり、須藤さんは悪党だったけど今はもう改心



してるんだ！須藤さんも蓮との戦いが原因で死んだけど、此処に来てまで引きずるなよ！ライダー同士で戦って何になるんだよ！もしまだ戦うなら俺が相手だ！！」

龍騎は構えるが、先ほどの龍騎の声にシザースとナイトサバイブの頭が冷え、2人は変身を解除する。  
龍騎もそれを見て変身を解除した。

「城戸さん、貴方の言うとおりですね・・・秋山さん、先ほどは失礼しました。少々頭に血が上りすぎたようです」

「・・・はあくましか城戸に説教されるとはな、いいだろう。まだお前を完全に信用した訳じゃないが、一応信用してやる」

「そうだよ！ライダー同士で戦う必要はもう無いんだから、やっぱりライダーは助け合いでしょ！ほら握手！握手！」

真司の言葉に雅史と蓮はやれやれと言いながらも握手をした。  
その光景を見ていた霊夢達は。

（ふん、真司の奴なかなかカツコイじゃない）

（へへあの真司って奴なかなかいい事を言うな）

（少し頼りない印象だったけど、人は見かけによらないわね）

霊夢達はそう思った後、雅史達の下に向かった。



## 第9話 疾風の騎士（後書き）

今回は真司が主役的な感じになりましたね。

それでは次の話も見えて貰えたら幸いです。

**番外編 ナイトと2人の魔法使い（前書き）**

この話は蓮と魔理沙とアリスの出会いの話です。

今回もグダグダですが見て貰えたら幸いです。

## 番外編 ナイトと2人の魔法使い

「見渡す限り、木、木、木だな。此処は森か？」

秋山蓮は魔法の森の中を彷徨っていた。

オーデインに幻想郷に飛ばされ気がついたら森の中で倒れていた、とりあえず出口を探そうと歩き出したが出口は一向に見つからなかった。

（仕方がない、ダークウイングに上から出口を探させるか）

蓮がダークウイングを呼ぼうとした時。

キイイイイイン キイイイイイン

（モンスターか！）

蓮は素早くデッキを取り出しVバツクルを装着し、ポーズを取ると。

「変身！」



魔理沙は元気よく答える。

アリスは、「はあ」と溜息を吐くと左手の指を動かすと。

「シャンハイ！」

「ホラーイ・・・」

2体の可愛らしい人形・上海人形と蓬莱人形がやって来る。

「お、上海と蓬莱じゃんか」

「私はこの人形を完成させたいから、その子達と遊んでなさい」

「へいへい、分かったよ」

魔理沙がそう言う、顔は笑っていたが。

「ん？・・・なあ、アリス、この家に居るのは私とアリスそれに人形だけだよな？」

しばらく遊んでいると突然、魔理沙がそんな事を言った。

「そうよ、それがどうかしたの？」

「いや・・・何か気配のようなものがしたんだよ」

「気配？」

魔理沙に言われアリスも神経を集中する。  
すると僅かながら何かの気配を感じた。

「確かに何か居るわね・・・少し待ちなさい」

アリスが再び指を動かすと他の人形が動きだし、家の中に散らばっていく。  
しばらくして、人形達が戻ってくる。

「おかしいわ、確かに何か居るのに、この子達の報告では家の中には何も居なかったそうよ」

「じゃあ、さっきからするこの気配は何だ？・・・ん」

魔理沙がふと鏡に目を向けると鏡の向こうで何かが見えた。  
目を凝らして、見ようとした瞬間、鏡から巨大な鋭い爪が飛び出してきた。

「うわ！？」

「魔理沙！？」

爪が魔理沙を引き裂こうとした瞬間、盾を持った8体程の人形がそ



の攻撃から魔理沙を守る。

「アリス！助かった！！」

「礼は後！それより外に出るわよ、ここじゃ戦いづらい！」

アリスの声に魔理沙が頷き2人は家の外に出る。

「何だつたんだ、あの爪？」

「妖怪かしら？でも鏡から気配も殆ど感じさせないで現れる妖怪なんて聞いたことがないわ」

魔理沙はミニ八卦炉を構え、アリスは剣やランスなどの武器で武装した人形を控えさせながらそんな事を言う。

そして家の中から現れるであろう敵に備えるが、一向に現れる気配がない。

「出てこないな」

「・・・そうね」

2人がそう言った時、突然背後から糸が飛んできて魔理沙にアリスに絡みつきバランスを崩して倒れる。

「何だ！？」





「大丈夫か？待っている、今切つてやる」

ナイトはダークバイザーで魔理沙とアリスの体に絡まった糸を切る。

「ありがとう、助かったぜ！（カッコイイ格好だな）」

「礼を言うわ（声からして男かしら？結構好みの声かも・・・）」  
「危ないから、離れている」

ナイトはそう言うとバイザーにカードをセットする。

<ソードベント>

ナイトはウイングランサーを装備しディスプレイパイダーに向かう。

「はっ！」

「シューーー！」

撥ね飛ばされたダメージから立ち直ったディスプレイパイダーは、ナイトに向かって前足を振り下ろすがナイトはウイングランサーで攻撃を凌ぎながら、隙を見つけてはウイングランサーで突き刺したり、斬りつけたりする。

「シューー!!」  
「ふっ!!」

デイスパイダーは前足でナイトを振り払おうとするが、ナイトはデイスパイダーの足を蹴って後方に距離を取るとバイザーにカードをセツトする。

<アドベント>

「キイイイッ!!」

ダークウイングが現れデイスパイダーに体当たりし、デイスパイダーの右前足をへし折る。

「シュ、シューー!!」

怯むデイスパイダーを見てナイトはすぐさまバイザーにカードをセツトする。

<ファイナルベント>

「キイイイッ!!」

「ハッ！」

ダークウイングが背中に合体しその翼をマント状のウイングウォールへと変える、ナイトは空高くジャンプするとウイングランサーを軸に自分の体をウイングウォールで包みドリル状になると、きりもみ回転しながら急降下しデイスパイダーに突っ込んでいく。

「ハアアアアアー！」

「シューーーーーー！？」

デイスパイダーは体を貫かれ爆発四散する。

ナイトのファイナルベント「飛翔斬」

「キイイイッ」

ダークウイングが生体エネルギーを吸収するのを見届けたナイトは変身を解除する。

そして驚いている魔理沙とアリスのもとに向かう。

「大丈夫だったか？」

「おう！どこも怪我してないぜ！（おお、結構カツコイイ顔だな）」

「こちらも怪我はしてないわ（やっぱり男だったわね・・・顔も結構好みかも・・・）」

「そうか、そういうえば自己紹介してないな俺は秋山蓮だ」

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

「私はアリス・マーガトロイドよ」

3人が自己紹介する。

「なあ蓮」

「何だ？」

「そのデツカイコウモリは何だ？」

「コイツか？・・・コイツはダークウイング、俺の・・・相棒みたいなものだ」

「キ、キイイイ！」

ダークウイングは驚いた、自分は秋山蓮の恋人・小川恵里を昏睡状態に追い込み、あまつさえずっと餌として命を狙っていた。そのため蓮からは深く嫌悪されていたが蓮は今、自分の事を相棒と言った、その事が堪らず『嬉しかった』。

「キイイイ」

「うわっ！何だ！こら、じゃれつくな！！」

ダークウイングが蓮にじゃれつく。

「へえ〜仲がいいんだな」

「その様ね。それより蓮、さっき助けてくれたお礼がしないのだけれど。夕飯をご馳走するわ」

「お！それはいい考えだな！」

「いいのか？」「キイイイ」「もういい加減にしるー！ー！」

「ふふふ、いいわよそれくらい。さあ、行きましよう」

3人と1体はアリス邸に入っっていった。

それと余談だが、蓮に住む所が無いと分かった魔理沙とアリスが蓮をどちらの家に置くかで話し合いをした（本人の意見は無視で）結果、じゃんけんで決めることになり魔理沙が勝利し蓮は魔理沙の家で住む事になった。

その時のアリスは。

orz こんななんだった。



番外編 ナイトと2人の魔法使い（後書き）

今更ですが、殆ど思いつきで書いていく此処まで話が続けているか不思議です。

まあ、グダグダですが（苦笑）

次回はあの占い師の人が登場です！といっても誰かは皆さんもう知っているでしょうが（苦笑）

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

## 第10話 霧の湖の氷精（前書き）

すいません！！今回で新たなライダーを出す予定でしたが・無理でした！！

それはまた次回に待ってください！！m（| | ;）m

それでは相変わらずのグダグダな話ですが見て貰えたら幸いです。



「ええ、そうよ其処に別ライダーが居るわ」

雅史達が蓮、魔理沙、アリスを加え再び話し合いを終えた時に霊夢がそう言った。

「あの、根拠は何ですか？」

雅史が尋ねると。

「勘」

「……は？」

「それなら間違いないわね」

「そうだな」

霊夢の答えに、雅史、真司、蓮の声が重なる。

一方、魔理沙とアリスは納得という風に言った。

「え、何で？魔理沙ちゃんもアリスちゃんも納得してるの？」

「そっだ、何で理由が勘というだけでそこまで信用する？」

「確かに根拠が勘というのは……」

真司、蓮、雅史がそう言う。

「いや霊夢の勘は当たるぜ」  
「そうね、それはもう怖いくらいに当たるわ」  
「2人とも何、人の勘を恐ろしい力の様に言うのよ」  
「いや事実だろ？」  
「ほんと、これからは『空を飛ぶ程度の能力』じゃなくて『勘が当たる程度の能力』にしたら？」  
「嫌よ」

霊夢達のやり取りを聞いていた雅史達は。

( )(何か本当に当たりそうな気がしてきた)( )

同じ事を心の中で思った。

- - -  
- - -  
- - -

この様な経緯で雅史達（雅史、真司、霊夢、魔理沙）は紅魔館に向かう事になった。

アリスは人形を完成させたいらしく家に帰り、蓮はモンスターが出た時のための護衛としてアリスについていった。

その時のアリスの表情は非常に嬉しそうで逆に魔理沙は面白くなさそうな表情だったが。

「うわゝ霧であんまり周りが見えないな」

「そうですね、ここまで濃い霧は初めてです」

「此処は昼間は大体こんなんだぜ」

「そうね、此処は何故か昼間だけ霧が出るのよ。それとあと少しで紅魔館よ」

雅史達は今、霧の湖に来ていた。

歩きでは少し時間が掛かるため、霊夢は普通に飛んで、魔理沙は箒に乗って、雅史と真司はドラグレッダーに乗って来た。

妖怪には一度も遭遇しなかったため予定よりも早く来れた（もつとも妖怪に遭遇しなかったのは妖怪達が霊夢と魔理沙それにドラグレッダーを恐れていたためだ）。

「それじゃあ、このまま行きましょうか」

霊夢がそう言い、雅史達が行くこととした時。

「ちょゝゝゝとまった!!」

誰かに呼び止められる。

雅史達が声を掛けられた方向を見ると一人の少女が腕を組んで浮い

ていた。

薄い水色の髪に頭の後ろに大きな青いリボンを付け、青いワンピースに背中に氷の結晶のような羽を6枚つけた少女、氷の妖精・チルノが居た。

「このアタイの許可無く此处を通ろうとはどういう獵犬よ！」

「獵犬？」

「了見の間違えでは？」

「はあ〜コイツはチルノ、ちょっとだけ強い妖精よ」

「あとバカだな」

霊夢と魔理沙の物言いにチルノは。

「ムツキー！この最強にして天才のアタイに向かってそんな事を言うなんて、もう許さないわ。霊夢に魔理沙、ギットンギツタンにしてやるわ、ついでにその他2名にデカアカヘビも一緒にやつつけてやるわー！」

「え！俺達なにも悪いこと言っていないのにー！」

「なんか理不尽ですね」

「コイツにそんな事を言っても無駄よ」

「まあ、チャツチャツとやつつけるか」

魔理沙はそう言うとスペルカードを出し、ミニ八卦炉を構える。

「フツ、魔理沙！アタイを今までのアタイと思わない事ねー！」

「はいはい、どれだけ強くなっただんですか（棒読み）」  
「キ〜〜〜！また馬鹿にして！後悔させてやる！」

氷符「アイシクルフォール」

氷の弾幕がマシンガンの様に撃ちだされる、そして空いていた隙間を埋めるように大型の弾幕も撃ちだされていく。

「へええ、そこそこの難易度だな」

魔理沙は特に慌てず、流れるような動作で弾幕を避ける、そしてチルノに向かって弾幕を放つ。

「すっげ〜〜」

「これがスペルカードルール・・・」

「そう、これがこの幻想郷での戦いよ」

真司と雅史が2人の戦いを見ていると。

「じゃあ、そろそろ決めるぜ！」

魔理沙がミニ八卦炉を構える、そしてスペルカードを宣言する。



恋符「マスタースパーク」

三二八卦炉から極太のレーザーが放たれた。

「なんだ！？あの極太レーザー！！」

「・・・凄いの一言ですね」

「あれくらいのスぺルカードで驚いていたら、これから先大変よ」

「あれより凄いのが在るの！！」

「まあ、いろいろなスぺルカードが在るわね」

雅史達がそんな話を話している内にマスタースパークがチルノに当たるとる。

「うきや~~~~~！！」

マスタースパークが当たった時にでた黒煙でチルノの姿が見えなくなる。

「えっ！？大丈夫なの！あの子！！」

「大丈夫よ、見てなさい」

慌てる真司を霊夢が落ち着ける、しばらくして。

「うっっっまだよ！まだ終わってないわ！！」

黒煙の中から服が少々焦げたチルノが出てくる。

「すごい・・・殆ど怪我をしていない」

「あの攻撃でよく服がちよっと焦げたくらいですみましたね」

「だから、大丈夫って言ったでしょ？」

驚く2人に霊夢が言う。

「まだまだ、行くわよ！！」

「はあ、仕方ないな」

チルノと魔理沙が再び、弾幕を撃とうとした時。

ドラグレッダーがチルノに向かってドラグブレスを吐く。

「くくくくえ？」「くくく」

突然の事に雅史、真司、霊夢、魔理沙、チルノの声が重なる。

ドラグブレスは瞬く間にチルノに直撃し、チルノは一瞬で蒸発した。

「ちよつと~~~~!!何してんの、ドラグレッダー!?!」

「グオオオン!」

「え?このままだと時間が掛かりそうだから?いや!そんな理由で!」

「真司、落ち着きなさい。チルノはまた復活するわよ?」

「えー!?!」

「それは本当ですか?」

「ええ、妖精は死なないの。仮に死んでもまた生き返るわ」

「だから、あんまりドラグレッダーを責めんなよ」

「でも!いくら生き返るからって!」

「はいはい、静・か・に!」

バツシン!!

「ムウーーーー!?!」

霊夢が真司の口にバツテン状にお札を貼る(Xこんな具合に)。

「さあ、行くわよ(まったく真司は優しすぎるわね。まあ、そこもコイツのいい所か)」

「分かったぜ!(やっぱり真司はいい奴みたいだな)」

「ええ(相変わらずのお人よしだな・しかし其処が彼の魅力か)」

こうして雅史達は紅魔館に向かった。

.....

雅史達が去って、しばらくして。

「アタイ！ふつか~~~~つ！！さあ魔理沙！勝負の続きを……あれ？」

チルノが周りを見回すが誰も居なかった。  
チルノはしばらく考えて。

「はっ！さては、アタイに恐れなして逃げ出したわね！」

全然的外れの答えを導き出す。

「ふっふ~~~~ん！やっぱり、アタイは最強ね！！」

なんか色々幸せな妖精だった。

第10話 霧の湖の氷精（後書き）

次回、次回こそは出せると思います・・・（多分

それでは次回も見えて貰えたら、幸いです。

## 第11話 紅魔館の門番（前書き）

今回はまた無理矢理っぽいオリジナル設定が出ます。

相変わらずのグダグダ小説ですが、見て貰えたら幸いです。

## 第11話 紅魔館の門番

紅魔館の一室で1人の少女が居た。

青みがかつた銀髪に血のように紅い瞳。

頭には周囲を紅いリボンで締めたピンク色のナイトキャップを被り、衣服も帽子と同じ色合いで所々に赤い紐が通っていた。

背は小さいが背中に大きな翼を持っておりシルエットは大きかった。紅魔館の主、レミリア・スカーレットが自室で紅茶を飲んでいると。

コンコンと部屋をノックする音が聞こえた。

「入りなさい」

レミリアの声に1人の男が入ってくる。

「あら海之じゃない、どうかしたの？」

レミリアが男、手塚 海之に尋ねる。

「占いで面白い結果がでたからな、それを伝えに来た」

「面白い結果？」

「ああ、此処に俺以外の仮面ライダー達がやって来る」

「・・・へえ〜それは確かに面白いわね・・・ふふ いい事を思い



ついたわ・・・咲夜」

レミリアがそう言うといつの間にか1人の女性が立っていた。ボブカットの銀髪を両方のもみあげ辺りから、みつあみにし頭に力チューシヤを付けた、青と白を基調としたメイド服を来た女性、十六夜咲夜が其処に居た。

「お呼びですか？お嬢様」

「咲夜、美鈴に今から誰も門を通すなと伝えなさい」

「誰もですか？」

「ええ、もし通ろうとするなら撃退するようにと伝えなさい」

咲夜は少し考えると。

「分かりました、美鈴にそう伝えておきます。それでは、お嬢様に海之様また後ほど」

咲夜はレミリアと手塚に一礼すると一瞬で姿が消えた。

「ふふふ」

「何を企んでいるんだ、レミリア？」

「別に、ただ今からやって来るライダー達の力を見たいのよ。そのライダー達は貴方の知り合いかしら？」

「ああ、1人は知り合いだがもう1人は知らないライダーだ」

「知り合いのライダーはどんな人物？」

「そうだな・・・アイツ、城戸はお人よしでバカっぽい所もあるがやる時はやる奴だ」

「ふん・・・随分と褒めるのね、これはますます楽しみだわ」

「あまりやり過ぎるなよ、レミリア？」

「あら？やり過ぎるくらいが面白いじゃない？」

楽しみに言うレミリアを見て海之は「はあ」と溜息を吐いた。

.....

「これは・・・何と言うか赤いですね」

「うわ~~~~派手だな」

「まあ、確かに周りの景色から浮いてるものね」

「私は見慣れているけどな！」

紅魔館に到着した一同（ドラグレッダーはミラーワールドに戻った）、雅史と真司は紅魔館を見て驚いていた。

「それじゃあ・・・行きましようか」

霊夢の声に雅史達が門に近づいた時。

「待ちなさい！」

雅史達が声を掛けられた方向を見ると1人の女性が立っていた。腰まで伸びた赤い髪に緑色を強調した華人服とチャイナドレスを合わせたような服装の女性、紅美鈴が居た。

「何だ、中国じゃない」

「お！中国、今日も元気だな！」

「中国？変わった名前ですね」

「須藤さん・流石に失礼だろ・でも、確かに変わった名前だな」

「ちっがー！ーう！ー！何、人の名前を変えているんですか！私の名前は紅美鈴です！！ほ・ん・め・い・り・ん！」

中国・・・じゃなかった、美鈴がそう叫ぶ。

「冗談よ」

「そうそう、軽いジョークだぜ」

「全然！軽くないですよ！」

「・・・あの、美鈴さん。何か言う事があったんじゃないですか？」

3人の漫才？・・・を聞いていた雅史が美鈴に言う。

「え？・・・はっ！そうでした・・・ゴッホン！・・・お嬢様の命により誰も門を通すなと言われています。ですのでお引取りください」「あのね〜態々此処まで来たのに何で帰らなきゃいけないのよ？」「そうだぜ、折角此処まで来たんだから・・・通らして貰うぜ！」「はあ〜・・・もし無理に通ろうとするなら撃退するようにと命じられています・・・ですから通りたいのなら私を倒してからにしてください！！」

美鈴はそう言つと構える。

「いいわ、久々に私が相手をしてあげる」

霊夢が前に出ようとした時。

「待つて！霊夢ちゃん」

「何よ、真司？」

「此処は俺にやらしてくれないかな？」

「城戸さん、どうかしたんですか？貴方がモンスターの相手以外で自分から戦うのは珍しい・・・」

「いやさ・・・ちょっと試したいことがあってさ・・・」

真司はそう言つと前に出る。

「俺が相手だ。美鈴さん」

「見た所、普通の人間・・・いや妖怪か人間かよく分からないですね・  
しかし良かったんですか？霊夢さんと変わるなら今の内ですよ？」  
「心遣いありがとう・・・でも心配はいらないよ！」

真司はそう言うとデッキを取り出してポーズを取り。

「変身！」

バックルにデッキをセットし龍騎に変身する。

「っじゃあっ！」

「！？その姿は！あなた・・・仮面ライダーですか！！」

「おっ！霊夢ちゃんの勘が見事に的中か！！（やっぱり此処にライダーが居るのか！）」

龍騎はそう言うと美鈴に（力を抑えて）殴り掛かる。

美鈴も直に思考を切り替え対処する。

「ハアッ！」

「なかなか、速いですね・・・でも！！！」

美鈴は龍騎の攻撃を受け流すと腹部に掌底を叩き込む。

「ウワッ！」

衝撃が龍騎を襲う、龍騎は数歩後退るが直に体勢を立て直す。

美鈴は手首を軽く振り。

「まったく・・・硬い鎧ですね・・・殴る方が痛いですよ」

美鈴は龍騎から距離を取るとスペルカードを取り出す。

華符「芳華絢爛」

美鈴から黄、赤の色合いの弾幕が大量に放たれる、龍騎は咄嗟に腕を交差させ防御体勢を取り攻撃を耐える。

(くっ!・・・弾幕は一つ一つはたいした威力じゃないけど・・・さすがにこう数が多いと、ちょっとキツイな・・・)

(ダメージはあんまり無しか・・・やっぱりライダーもモンスター同様にかなり頑丈みたいね)

美鈴は二枚目のカードを取り出す、それを見ていた龍騎もカードを

ドラグバイザーにセットする。

虹符「彩虹の風鈴」

<ガードベント>

美鈴から大量に虹色の弾幕が放たれると同時に龍騎のもとにドラグレッダーの胸を模した盾・ドラグシールドが2つ召喚され龍騎の両腕に装備される。

龍騎は弾幕をドラグシールドで防御しながら美鈴に向かって駆け出した。

それを見ていた美鈴は目を見開いて驚いた。

「嘘！？怯みもしない!!！」

どうやら怯みもせず向かってくる龍騎の姿に驚いたようだ。だが直に落ち着こうとした時。

「おりゃああ!!！」

「え?・・・きゃあっ!!！」

「今だ!!！」

龍騎はドラグシールドの2つを美鈴に投げつけ隙が出来たのを確認するとバイザーにカードをセットする。

<ファイナルベント>

「グオオオオオー！ン！」

龍騎は走りながら両腕だけポーズを取る。  
ドラグレッダーもその後を追う。

「ハッ！」

龍騎はドラグレッダーと共に空高くジャンプし、体を捻らせるとドラグレッダーの吐き出す、ドラグブレスの勢いを受け美鈴に急降下キックを放つ。

「ヤアアアアアー！！！」

「きゃあー！！！」

キックが美鈴に当たり爆発が起こる。

龍騎のファイナルベント「ドラゴンライダーキック（非殺傷&手加減）」



「なっ!? (馬鹿な! 城戸さんがモンスター以外でファイナルベントを使うなんて!!)」

驚く雅史を余所に黒煙が晴れる、そこには倒れて気絶した美鈴と「ふう」と息を吐く龍騎が立っていた。

龍騎は変身を解除する、それを見た雅史は真司に駆け寄ると。

「城戸さん!! なぜ彼女はファイナルベントを受けて平気なんですか!?!」

「お、落ち着いてよ須藤さん。ちゃんと説明するから」

真司は雅史達に説明し始めた。

.....

「つまりはアドベントカードを使っても対象を殺さないで済むという事ですか?」

「そういう事、そういう事」

「つまりは、スペルカードルに近くなった感じということね?」

「まあ、全然、綺麗でも派手でもないけどな」

真司の説明を聞いた雅史、霊夢、魔理沙がそう言う。

「しかし・・・城戸さん、どうして貴方がそんな事を知っているんですか？オーデインの手紙にはそんな事は書いていませんでしたよ？」

「いや・・・俺もついさっき知ったんだよ」

「どういう事？」

「いや、ちょうど霊夢ちゃんに口をお札で塞がれていた時にドラグレッダーから知らされたんだよ」

「私はそのような事は・・・ん？」

雅史がそう言おうとした時、頭の中に何か情報が流れてきた。

それは先ほど真司が説明したものと同じ殺傷、非殺傷の設定の内容だった。

最後に『伝えるのを忘れていました、ごめんなさい』という物だった。

「はあ〜（ボルキヤンサーも早く伝えて欲しいものだ・・・しかし殺傷、非殺傷の設定・・・これも幻想郷に来たことによる変化か？・・・）先ほど私の方にも説明が来ました」

「そう、それじゃ行きましようか」

「え！俺が言えた義理じゃないけど、美鈴さんをこのまま、ほっといていいの！！」

「いいのよ、コイツはそんなに柔じゃないから」

「そうだが、しばらくしたら目を覚ますさ」

「彼女の事を知る霊夢さん達が言うのだから大丈夫じゃないんですか？」





「其処がアイツらしいとも言えるな」

海之は口元を緩めながら言う。

「そう・・・咲夜、悪いのだけれど海之の分も紅茶を用意してくれる？」

「そう、おっしゃられると思い用意しておりますわ」

「ふふふ 流石は我が自慢の従者ね」

「すまないな、咲夜」

「いいえ、お気になさらず、直にお入れします」

咲夜は紅茶をティーカップを入れ、海之の前に置く。

「しかし、次はどうしようかしら・・・」

レミリアがそう考えた時。

「お姉様、さっき凄いい音がしたけど・・・どうかしたの？」

レミリアの部屋に金髪の髪をサイドテールで纏め、頭にはレミリアと似た帽子を被り。

真紅を基調とした、半袖とミニスカート姿で背中には一対の枝のようなものに七色の宝石がぶら下った様な翼を生やした少女。

レミリアの妹、フランドール・スカーレットが入ってきた。

「ああ、フラン・・・!？」

ピッカーン!!

レミリアの頭に閃きが走った(電球が点いて)。

「フラン・・・貴女・・・今暇かしら？」

「え?・・・うん暇だけど、どうかしたの？」

フランの答えにレミリアの口元が裂ける。

それを見た、海之と咲夜は。

( うわ~~~~悪い事を考えてる顔だあ )

と同じ事を考えた。

## 第11話 紅魔館の門番（後書き）

相変わらずの無理矢理っぽいオリ設定です。

非殺傷については、死なないだけで怪我はします。

だからファイナルベントクラスの攻撃なら妖怪であっても大怪我（重症や瀕死状態）は確実です。

今回、美鈴が気絶だけで済んだのは龍騎が手加減したためです（非殺傷&手加減）

これからもこの様なオリ設定が出てくると思います。  
それでも見て貰えたら幸いです。

## 第12話 紅魔館での戦い（前書き）

今回もグダグダ小説です、それでも見て貰えたら幸いです。



## 第12話 紅魔館での戦い

紅魔館、レミリアの自室。

「フラン実は今、魔理沙達が来てるの」  
「え！魔理沙が来てるの！」

レミリアの言葉にフランが笑顔になる。

「ねえ！お姉様、魔理沙と弾幕ごっこをしてもいい！」  
「いいえ・・・今日は我慢しなさい」  
「え~~~~~！どうして~~~~~！」  
「今日は違う遊びをしましょう」  
「違う遊び？」

頭に？マークを浮かべ首を傾げるフランにレミリアは。

「今日は仮面ライダーと遊びなさい」  
「え？・・・仮面ライダーって・・・海之と？」  
「いいえ、別のライダー達とよ」  
「えっ！？海之以外のライダーが来てるの！」  
「ええ、そうよ・・・どうライダーと遊んでみたくない？」



「しかし・・・不思議に思ったのですが？」

「何？雅史さん？」

「いえ・・・なぜか、外観よりも広く感じるのですが？」

「それは、私がこの屋敷の空間を弄っているからですわ」

「「!？」」

聞いたことの無い声に雅史と真司はバツと声のした方向を向く。其処にはいつの間にか紅魔館メイド長、十六夜咲夜が立っていた

「あら、咲夜じゃない」

「相変わらず咲夜はいきなり現れるな」

「別にいきなり現れてもあなた達は驚かないでしょう？」

「まあね」

「もう慣れているからな」

「あ、あの・・・知り合いですか？」

雅史の声を聞いた咲夜は雅史と真司の方を向くと。スカートの手端を摘んでお辞儀をする。

「初めまして、私はこの紅魔館でメイド長をしております、十六夜咲夜といます。以後お見知りおきを」

「こちらこそ初めまして、私は須藤雅史といます」

「俺は城戸真司つていいいます」

「ところで十六夜さん「咲夜で構いません」それでは咲夜さん、さつき言った『空間を弄る』とはどういう意味ですか？」

「はい、私は『時間を操る程度の能力』を持っています。その力の



.....

一同は大きな扉の前に来ていた

「では少し、お待ちください」

咲夜はそう言つと一瞬で姿を消した。

「消えた！」

「恐らくは・・・時間を止めて移動したのでしょうか」

暫くして扉が開き、雅史達は中に入る。

ホールはエントランスホール以上の広さだった。

「すっげ〜〜〜〜！！」

「・・・またも凄いの一言ですね」

「相変わらず無駄に広いわね」

「確かにいつ見ても広いな」

4人がそう言っていると。

「よく来たわね、歓迎するわ」

ホールに声が響く、4人が声のした方を見るとレミリアが椅子に座り、雅史達を見ていた。

レミリアの周りには咲夜、海之、フラン、そして三日月の飾りが付いた帽子を被り、長い紫色の髪の毛の先をリボンで纏め、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服の上から薄紫の服を着た少女、パチュリー・ノーレッジに黒い服に赤い髪そして頭と背中に蝙蝠の様な翼を持った少女、小悪魔（愛称・こあ）が居た。

「レミリア、一体何を企んでいるのかしら？」

「企むという程では無いわ霊夢、ただの暇つぶしよ？」

「あのねえ、その暇つぶしは」  
「あ！！手塚！！！お前此処に居たのかー」  
「え？知り合いでも居たの？」

「ああ！俺の仲間だ！！！」

「お前は相変わらずだな城戸」

海之を見て喜ぶ真司。

それを見ていた雅史は。

（あの手塚と呼ばれる人物がこの紅魔館に居る仮面ライダーか）

そんな事を考えていると、レミリアが。

「ねえ・・・真司に雅史だったかしら貴方達・・・此処に居るフランと海之の2人と戦ってくれないかしら？」

「え？・・・何で？」

「理由を聞かせて貰えますか？」

「理由は簡単・・・貴方達の戦いを見たいからよ」

「うゝん・・・どうする須藤さん？」

「そうですね、お互いの力を見るためにも受けてみますか」

「決まりね・・・それじゃあ霊夢に魔理沙はこっちに来て貰える、戦いの邪魔になるから」

「ちよつと私はまだ」まあまあ、霊夢、面白そうじゃん「はあゝゝ分かったわよ」

霊夢と魔理沙はレミリア達の居る位置に向かう。

そして4人はホール中央に行き雅史はフランと真司は手塚と向き合う。

「よろしくね！雅史！本気で行くね！！」

「ええ、こちらこそお願いします、フランドールさん（この子もあのレミリアという少女も吸血鬼か見た目は幼い少女だが油断は出来ないな）」

「フランでいいよ」

「そうですね？ではフランさん・・・これでいいですか？」

「うん！」

「まさか、手塚と戦う日が来るなんて想像出来なかったなゝゝ」

「まあ、いいじゃないか、今から始める戦いは俺達の世界のように殺しあう戦いじゃないんだからな」

「そうだな・・・じゃあいつちよやるか！」

雅史と真司はバツクルを装着しポーズを取るそして。

「「変身！」」

デッキをセットし、シザースと龍騎に変身する。

それを見た海之もデッキをかざしVバツクルを装着する。

そして右腕の手のひらを前に向け、人差し指以外は曲げると前に突き出すポーズを取り。

「変身！」

Vバツクルにデッキをセットすると海之に虚像が重なり、黒いライダースーツに紅を強調した鎧、そして両肩に大きめプロテクターを着けた、エイの様な仮面を付けた騎士、仮面ライダーライアに変身した。

それを見たレミリアが。

「それでは初めてちょうだい」

その言葉を合図に4人は動き出す。

フランはゆっくりと浮かび上がると懐からスペルカードを取り出す。



禁忌「レーヴァテイン」

フランの手に燃え盛る炎の剣が現れる。

「いつくよ〜〜〜！」

フランはその剣をシザースに振り下ろす。

(レーヴァテイン・神話やゲームまた漫画やテレビなので有名な武器だな、木の枝や杖、剣など様々な形状があるが彼女のは正に剣だな)

シザースはカードをシザースバイザーにセットする。

<ストライクベント>

シザースはシザースピンチを装備するとレーヴァテインにぶつけ、火花を飛び散らせながら互いに鏝競り合い状態になる。

「わあ〜〜〜！凄い！凄い！雅史強いね！！」

「それ程でもありませんよ（やはり見た目以上の力だな・・・これが吸血鬼の力か・・・だが十分に対抗できるな）」

「じゃあ、次、いつくね〜!!」

禁忌「フォーオブアカインド」

突然、フランが4人に増える。

「「「もつと、もつと楽しもうよ!」「」「」

フラン達がレーヴァティンを構え、シザースに向かっていく。

「本当に何でもありませんね・・・この幻想郷・・・は」

<アドベント>

シザースもボルキャンサーを呼び出しフラン達に向かっていった。

<ソードベント>

<スイングベント>

龍騎とライアも互いに武器を装備して戦っていた。





「好きに呼んでくれて結構ですよ・・・ではそろそろ決めますか？」  
「「そうだね、次で最後だよ！」」

フラン達はそう言うとレーヴァティンを構える、シザースもバイザーにカードをセットする。

<ファイナルベント>

ボルキヤンサーの力を借りたシザースが空中前転しながらフラン達に向かっていく、それを見たフラン達もレーヴァティンを構えシザースに突っ込んでいく、そして両者がぶつかり爆発を起こす。  
そして勝利したのは。

「私の勝ちですね」

「きゅ〜〜〜」

シザースだった。

シザースのファイナルベント「シザースアタック（非殺傷&手加減）」

一方、龍騎とライアは。

「はあ、はあ、はあ」

龍騎はライアのエビルウィップとウイングランサー上手く使った攻撃に押され、手に持っていたドラグセイバーも落としてしまっていた。

「城戸、そろそろ決めさせて貰うぞ」

ライアはバイザーにカードをセットする。

<コピーベント>

「え！？なんで！そのカードはもう使った筈だろ！」

「それがいつの間にか増えていたんだ」

「ありが～～～！！そんなの！？」

龍騎の言葉を余所にライアの手一枚のカードが現れ、ライアがそのカードを発動させる。

禁忌「フォーオブアカインド」



ライアのファイナルベント「ハイドベノン（フォーオブアカインド版・非殺傷&手加減）」

「うわ~~~~！真司の奴随分と派手に吹っ飛んだな」

「まあ、アイツの事だから死にはしないでしょ。海之も手加減したみたいだし」

「手加減しても、あの攻撃はキツイと思うけど・・・」

「まあ、いいじゃない・・・でも本当に楽しませて貰ったわ」

「お嬢様、妹様をお部屋にお連れしますね」

「ええ、そうして頂戴」

「では俺は城戸をベットまで運んでいこう」

変身を解除した海之がそう言う。

「そう・・・じゃあお願いするわ、霊夢達もゆっくりしていくといいわ」

「まあ、真司が目を覚ますまでゆっくりさしてもらおうわ」

「では私も少し休ましてもらいます」

「じゃあ、私は図書館で本で「本を盗まないなら、来てもいいわよ」盗むなんて人聞きが悪いぜ、ただ借りるだけだぞ私が死ぬまで」

「それを盗むというのよ」

こうして雅史達はしばらく紅魔館で休む事になったのだった。





ゼノバイターは突然の事に驚くが、その思考が続く事は無かった。  
ゼノバイターは頭から地面に激突しグギという嫌な音を鳴らして絶命した。

そしてその生体エネルギーは見えない何かに吸収される。

「ハツハツハツハツハツハツハツ！」

ゼノバイターの命を奪った者の笑い声が響く。  
やがてその者は軽い足取りで立ち去っていった。

## 第12話 紅魔館での戦い（後書き）

今回の話でライアの使ったコピーベントについてですが。

このカードはその場にいる敵や味方の武器をコピーするだけではなく過去にカードの記憶された武器を引き出す事が可能、そしてスペルカードもコピー出来るまたライアはこのカードを複数所持している（枚数はまだ決まっています）。

今回もグダグダな話でしたね（汗）

次回も見えて貰えたら幸いです。

**番外編 運命を変えた騎士と紅魔館（前書き）**

今回は結構長い話になりました、まあグダグダですが（苦笑）  
それでも見て貰えたら幸いです。

番外編 運命を変えた騎士と紅魔館

「ふう〜掃除も終了ね」

掃除を終えた咲夜が肩に手を置き首を回しながら言う。

この紅魔館は咲夜の能力で空間拡張しているのだが空間を無駄に拡張しすぎたために掃除が大変だった、咲夜曰く、時間でも止めないとやっついてられないそうだ。

大勢の妖精メイドが働いているが咲夜曰く、ほとんど役に立たないらしい（それは咲夜の手際が良すぎるからだろうが）。

そのため掃除やその他の業務は咲夜が時間を止めて行っていた。

「さて、後は・・・ん？」

次の仕事に取り掛かろうとしていた咲夜だったが突然、屋敷の中に何者かの気配を感じる。

（侵入者かしら？・・・まったく美鈴は何をしていたのかしら・・・まあいいわ、今は侵入者の対処が先ね）

咲夜はそう思うと侵入者の対処に向かった。



ナイフは宙に浮きその全てが急所を狙っていた。

「いきなり屋敷に気配も無く現れて侵入者じゃない・・・なんて言い訳、通用するとも思っているんですか？」

咲夜の静かに言う。

「貴方に残された道は2つ・・・素直に此処に侵入した目的を言うか・・・此処で死ぬかです」  
「待ってくれ！本当に此処に侵入しようとしたわけじゃない！」

海之の言葉に咲夜は目を瞑ると。

「そうですね・・・あくまで言わないと言うのですか・・・なら死んでいただきます。貴方の体はお嬢様方のお食事にさせていただきますね」

咲夜がナイフを動かそうとした瞬間。

ザッバアアアン！！

「!?!」

いきなり海之の近くからエビルダイバーが現れ周囲のナイフを尻尾のエビルウィップや両端のヒレ・エビルフィンで壊し、咲夜に襲い掛かる。

「くっっ!!」

咲夜は後ろに跳び、エビルダイバーの攻撃を避ける。

(何!・・・この妖怪は気配もなにも感じなかった!!)

エビルダイバーは再び咲夜を殺そうと襲い掛かるが、その動きは咲夜が時間を止めた事で止まる。

(ふう・・・何なのかしらこの妖怪・・・まあ・・・いいわ、この男と一緒に始末すればいいだけの事だし)

咲夜がそう思った時、エビルダイバーの目が光ったと思った瞬間、止めた筈の時間が再び動き出した。

「え?」



咲夜はいきなりの事に唾然とする、自分の意思とは関係なしに再び時間が動き出した事に。  
その隙をエビルダイバーが見逃す筈も無く、咲夜に襲い掛かる。

(しまった！)

咲夜がその事に気がついた時にはエビルダイバーは直そこまで近づいていた。  
咲夜は時間を止めようとするが能力は発動しなかった。

(！？時間を操れない！！)

咲夜がそう思った瞬間、エビルダイバーが回避出来ない距離まで来ていた。  
咲夜の頭に今までの事が走馬灯の様に流れ、最後に紅魔館の住人達の顔、そしてレミリアの顔が浮かび上がった。

(申し訳ございません・・・お嬢様・・・)

咲夜が死を覚悟した時。

「やめる！！エビルダイバー！！」

海之の音が響く。

「!？」

海之の声にエビルダイバーは体を思い切り反らせて、咲夜を避けるが大分加速していた為、止まることが出来ず。

バツコオオオン!!

廊下の壁に激突し、壁を突き破っていった。

エビルダイバーには怪我一つないが壁に大きく穴が空いてしまった。

「大丈夫か！すまない、アイツを止めるのが遅くなってしまって・・・  
怪我は無いか？」

海之は心配そうな顔で言う、その事に咲夜は驚く。  
何故・・・この男は自分を殺そうとした相手の心配をするのか分からなかった。

「どうして・・・貴方は私の心配をするんですか？私は貴方を殺そうとしたんですよ？」

「確かに君はあの時、本気で俺を殺そうとしたんだろう」

「では・・・何故、心配を？」

「・・・君が悪い人間に思えなかったからかな」

「・・・え？」

「あの時の君からは殺気以外にこの紅魔館を守ろうとする思いの様な物が感じられたからな。それに本当に悪い人間はどんなものか知っているつもりだ」

海之は微笑みながら言う。

(不思議な人ね・・・でも悪い人間じゃないよね)

咲夜はそう思うと手塚に頭を下げる。

「先ほどは大変な失礼を致しました。私はこの紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜といたします」

「手塚 海之だ」

「それでは海之様、先ほどのお詫びも兼ねて、お嬢様に」

ドッゴオオオオーン!!

「「!?!?」」

突然、大きな音が響いた。  
2人が何事かと思っっていると。

「咲夜さーん！！」

1人の妖精メイドが慌てて走ってくる。

「一体何が在ったの！」

「妖怪の襲撃です！」

「数は？どんな妖怪？」

「数は2体で見たことも無い妖怪でした！」

「被害と状況は？」

「メイドが数人・食べられました・現在は美鈴さん、パチュリ様、こあさん、それにお嬢様と妹様がエントランスホールで迎撃していますが苦戦しています！！」

「（たつた2体の妖怪にお嬢様達が苦戦！？そんな事がありえるの！！）分かったわ、私も直に向かうわ」

「私は他のメイド達にも応援要請をします！」

「お願い・海之様、申し訳ありません。少々ここで待っていてください」

「おい咲y」

海之が声を掛ける前に咲夜の姿が消える、表情は落ち着いていたが、かなり急いでいるようだった。

(消えた!・・・いや、それよりも、さつきモンスターの気配がしたな・・・気配は2つ、あのメイドも妖怪が2体と言っていたしな、もしモンスターなら早く倒さなければ)

海之はデッキを取り出し、バックルを装着する。

「変身!」

そしてデッキをセットし仮面ライダーライアに変身すると気配のするホールに向かった。

.....

ホールではレミリア達がイノシシ型のモンスター、ワイルドボーダーとシールドボーダーの2体を相手に戦っていた。

「ハッ!」

「グウウウ!」

美鈴がシールドボーダーに蹴りを放つが片腕で防がれてしまう。  
そしてシールドボーダーが美鈴を攻撃しようとするが。

「グウウ!?」

レミリアが放った弾幕によりその動きが止まる、その隙に美鈴は後ろに跳び距離を取る。

「ありがとうございます、お嬢様！」

「気にすることはないわ、それより来るわよ！」

「グウウウウウー!!」

ワイルドボーダーがレミリアと美鈴目掛けて突進してくるが2人が避けた事で柱にぶつかる、ぶつかった柱は粉々に壊れるがワイルドボーダーは無傷で再びレミリア達に突進してくる。

「まったく・・・驚くほどに頑丈ねこの2体は・・・どうするレミィ？」

「こんな知性も無い様な妖怪に我が紅魔館が此処までされたのよ？  
当然、生かしておかないわ」

「なら、あなたの能力か妹様の能力でなんとかすればいいじゃない？」



「恐らくそうでしょうね」

レミア達がそんな事を言っている間にもワイルドボーダーとシールドボーダーは攻撃を仕掛けてくるが。

奇術「ミスディレクション」

突然大量のナイフが現れ、ワイルドボーダーとシールドボーダーを攻撃する。

「グウウ！」

ワイルドボーダーとシールドボーダーを倒すには至らなかったが動きを止めることはできた。

「大丈夫ですか、お嬢様？」

「ええ、あちがとう、咲夜」

「それにしても・あの2体、あれだけの攻撃を受けてもあまりダメージを受けていないわね」

パチュリーの言うとうり、2体はたいしてダメージを受けていなかった、シールドボーダーに至ってはほとんどダメージを受けていない様だ。



(ダメージは殆ど受けていない様ね・・・とりあえず時間を止めて対処を・・・)

そう思った咲夜だったが能力は発動しなかった。

「!?(また能力が使えない!どういう事!さっきは使えたのに!!)」

「咲夜・・・あなた、能力が使えないの?」

「どうしてそれを!・・・もしかしてお嬢様も?」

「ええ、フランも能力が使えないわ」

「レミイ、妹様、咲夜の能力が使えないとなると状況は不味いわね」

「みなさん!敵が来ます!!!」

小悪魔の声に全員が2体を見るとこちらに突進して来た、全員が構える・・・が。

<アドベント>

認証音声が鳴りエビルダイバーが現れるとワイルドボーダーとシルドボーダーの背後から体当たりする。

「グウウウウ!?!」

2体は突進の勢いも在って、勢いよくうつぶせに倒れた。

「あの妖怪は！」

「君達、大丈夫か！」

ライアがレミア達のもとに走り寄って来る

「貴方、誰？」

「その声は・・・もしかして海之様ですか？」

「話は後だ、それよりも来るぞ！」

ライアの視線先を見るとワイルドボーダーとシールドボーダーが立ち上がり始めていた。

ライアはカードをエビルバイザーにセットする。

<スイングベント>

ライアはエビルウィップを装備するとエビルダイバーと共にモンスターに向かって駆け出す。

「ハアッ！」

「グウウ！」  
「グウウウ！」

ライアはエビルウィップでワイルドボーダーをエビルダイバーは尻尾のエビルウィップでシールドボーダーを攻撃しダメージを与えるが、ワイルドボーダーもシールドボーダー負けじと反撃する。

「グウウウー！」

「クツ・・うわっ!?!」

ワイルドボーダーは腕に付いた盾でエビルウィップを受け止めると胸から気孔弾を発射してライアを吹き飛ばす。

「グウウー!!」

「!?!」

シールドボーダーも体の前面にある盾を取り外してエビルダイバーの攻撃を防ぐとそのまま盾でエビルダイバーを殴り飛ばす。

「うっうっ、まだ動けるな」

ライアはよろつきながらも立ち上がる。

「グウウウウウー!!」

ワイルドボーダーとシールドボーダーはまだよろついているライアに突進するが。

「私達の事を忘れてないかしら?」

その声と共に色とりどりの大量の弾幕がワイルドボーダーとシールドボーダーに当たり倒れる。  
ライアが弾幕の飛んできた方向を見るとレミリア達が居た。

「大丈夫かしら?」

「ありがとう、助かった」

「別に気にする事はないわ・・・私達が1体を相手するから、貴方はもう1体の相手しなさい」

「だめだ、危険すぎる・・・モンスターの事を甘く見ない方がいい」

「貴方・・・あいつらの事を知っている様ね。確かにあいつら強いわ・・・でもね、あんな奴らにこの紅魔館を此処までいいようにされて黙ってられる程、私は優しくくないの?」

「!?!?」

その外見からは想像できない迫力にライアは驚くが直にその決意を感じて。

「分かった・・・だが無理はするなよ?」  
「貴方もね?」

そう言うとライアはワイルドボーダーにレミリア達はシールドボーダーに向かっていく。

<ファイナルベント>

「悪いが一気に決めさしてもらっぞ、俺もそろそろ休みたいからな?」

「グウウウウウウ!!」

ライアの言い方にワイルドボーダーが怒ったのか、高速で突っ込んでくる。

それと同時にエビルダイバーがやって来るとライアはエビルダイバーに乗りワイルドボーダーに向かっていくそして両者が激しくぶつかる。

「グアアアア!?!」

結果はワイルドボーダーが押し負け爆発四散した。

ライアのファイナルベント「ハイドベノン」

一方レミリア達は。

「ところでレミィ、何か策はあるのかしら？」

「ええ、もちろんあるわよ。アイツを倒せる策が」

「ねえ、ねえ、どんな策なの、お姉様？」

「簡単な事よ、ここに居る全員のスペルカードをぶつけるのよ、能力は使えないけどスペルカードは使えるみたいだし」

「スペルカードをですか？でも弾幕が効かない相手に効くんでしょうか？」

「弾幕も効果が薄いだけでちゃんと効いているわ」

「しかし私のスペルカードは殆ど効いていませんでしたか？」

「一枚で効かないなら数を増やしていけば効くわよ、絶対にね」

「その根拠が何処から来ているか知りたいけど・・・他に方法が無い以上それに賭けるしか無さそうね」

「決まりね・・・じゃあ行くわよ、あの愚か者にこの紅魔館を襲った事を後悔させてやるわ」

レミリア達の作戦が決まると同時に。

「あの！みなさ～ん！！もう限界なんですけど！作戦は決まりましたか！！」

囿でシールドボーダーを惹きつけていた子悪魔が必死の形相で声を

出した。

「もう十分よ、こあ！離れなさい！」

「はい〜〜！！！」

小悪魔が離れたためシールドボーダーはレミリア達を新たな標的にして、盾を構えて突進する。

「グウウウウ！！！」

「いくわよ！！！」

レミリアの声に全員がスペルカードを発動させる

神槍「スピア・ザ・グングニル」

禁忌「レーヴァテイン」

幻符「殺人ドール」

火水木金土符「賢者の石」

虹符「彩虹の風鈴」

現れた弾幕を見てシールドボーダーは盾で防御しようとするが。

「グウウウウ！？」

ぶつけられる弾幕に盾の耐久限界を超え盾が壊れる・・・そして。

「ゲアアアア!？」

シールドボーダーの体に次々と弾幕が当たりその体にダメージを与え、最終的にシールドボーダーの体が爆発四散した。

「終わったわね・・・」

「ゴツホ!ゴツホ!まったく、これで喘息が酷くなったらどうしてくれるのよ?ゴツホ!ゴツホ!」

「ああ、パチユリー様!大丈夫ですか?」

「でも随分とお屋敷が壊れたね」

「大丈夫ですよ!妹様!みんなで直せば、元どおりになりますから!」

「フッフ、じゃあ、あなたには頑張つて貰わないとね、美鈴?」

「はいっ!任して下さい!!」

「ゴツホ!はあ、そういえばレミィ、能力の方はどう?」

「ええ、あの妖怪・・・いえモンスターを倒したら能力が使えるようになったわ」

「私も使えるみたい!ホラッ!」

フランが手をギュツと握ると、瓦礫が木っ端微塵に壊れた。

「私も使えるようになっていきます」



「やはり、あのモンスターが関係してるみたいね」

レミリアがそう言った時、変身を解いた海之が走ってきた。

「君達、大丈夫だったか？」

「その声・・・貴方がさっきの騎士かしら？」

「ああ、俺の名前は手塚海之だ」

「私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ（中々いい顔付きね）」

「私の名前はフランドール・スカーレットだよ長いからフランでいいよ（優しそうな人だな〜）」

「先程も紹介しましたが紅魔館のメイド長、十六夜咲夜です（やはり不思議な感じのする人ね）」

「パチユリー・ノーレツジよ（へえ、誠実そうな男ね）」

「小悪魔です、みなさんからは、こあと呼ばれています（あわ〜カツコイイです）」

「紅魔館門番の紅美鈴です（男の人の知り合いはあんまりいないから、少し緊張するな〜）」

「ところで海之、あのモンスターについて知っている事を教えて貰える？」

「あいつらはミラーモンスターだ」

「ミラーモンスター？」

「ああ、このエビルダイバーもミラーモンスターだ」

海之が横でふよふよと浮いていた、エビルダイバーを撫でながら言う。

「へえ、同じモンスターでも随分と大人しそうね、じゃあ詳しい事は部屋で説明して貰える？」

「分かった」

「咲夜、悪いけどお茶の準備をしてくれるかしら？」

「分かりましたわ」

こうして海之は紅魔館の面々に色々と説明することになったのだ。た。

## 番外編 運命を変えた騎士と紅魔館（後書き）

今回のオリ設定ですが。

契約モンスターや野生のモンスターの能力で程度の能力でいえば『程度の能力を封じる程度の能力』です。

これは自身が選んだ相手の程度の能力を封じる事が出来てしまう（複数も可）ただし同じモンスターやライダーの能力を封じることは出来ない。

また相手が自身にとって危険な能力を持っていたり、使おうとすれば自動で発動する。

しかし封じるのはあくまで程度の能力であり、スペルカードやその他の能力は封じることが出来ない、また程度の能力でも例外はある模様（たとえば妹紅の老いる事も死ぬ事も無い程度の能力など、しかしこれはモンスターからすればあまり脅威ではないこういう相手はミラーワールドに引きずり込めば問題はないからだ。）

このオリ設定はこの小説を書き始めたくらいに思いついたものです。なぜこんな設定を入れたかというと、いくらモンスターが強いといつても東方キャラが本気で能力を使えば簡単に勝負がつきそうだからです（例えば死を操ったり、境界を操ったりなど）。だからこの様な設定を入れました。

しかし東方キャラも決して無力ではなくスペルカードや使える能力を使えばモンスター相手でも勝てます（それでも苦労しそうですが）、今回の話でレミリア達が使った同時スペルカード発動などです。まあ、あれは少しオーバークイルでしたが。

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

### 第13話 幻惑の策士 前編（前書き）

今回は新たな龍騎ライダー登場です。

それと今回は予想より長くなったので前編と後編に分けました、グダグダですが見て貰えたら幸いです。



「手塚さんの占いってよく当たるの？」

「ああ、霊夢ちゃんの勘と同じくらい」

「おお！それは信用出来そうだな！」

「そうそう、手塚曰く『俺の占いは当たる』だからな！」

「まあ・・・俺は運命は変わらないものじゃなく、変えるものだと思うがな」

「ふふふ やつぱり海之は面白いわね」

「ふくん、じゃあ次は妖怪の山でいいわね。ちょっと気になる事もあるし・・・」

「なんだよ・・・霊夢、気になる事って？」

魔理沙が質問する。

「幻想郷で色々騒ぎが起こっているのに、何で天狗達の新聞が出ないのか気になったのよ」

「そう言われればそうだな、いくらモンスターが気配も無く現れるっていつても、情報くらい直に手に入りそうでもないな？」

「じゃあ、次の目的地は妖怪の山で決まりですね」

.....

以上の経緯があり一同は妖怪の山に向かっていた。

しばらく進んでいると、もやもやとした霧の様な物が飛んできた。

「何だ？あれ？」

「霧でしようか？」

「あれは・・・」

「なあ、霊夢あれって」

「ええ、あれは萃香ね。お〜い！萃香！」

霊夢の声に霧が此方にやってくると人の形になり1人の少女が現れた。

白のノースリーブに紫のロングスカート。

薄い茶色のロングヘアを先っぽのほうで一つにまとめ、頭に2本の長くねじれた角を生やした少女、伊吹 萃香が立っていた。

「あれ〜？霊夢、何してんの？」

「まったく・・・あんたの方こそ今まで何処ほつき歩いていたのよ？」

「いや〜、気の向くままフラフラとね。それより霊夢、その2人は誰？」

萃香が雅史と真司の顔を見ながら言う。

「初めまして、外来人の須藤雅史と言います」

「俺は城戸真司、外人だ」

「ああ！外人かそれなら知らない筈だ。私は鬼の伊吹 萃香って

いうんだ」

「鬼ってあの鬼ですか？」

「うん」

「あの御伽噺によく出てくる？」

「そうそう」

2人は萃香を見て。

( (小さいな) )

と思った。

「それより霊夢達は何処に向かっているの？」

「ちよつと妖怪の山にね・・・」

「ふ〜ん・・・ねえ！私もついって行っついていいかな？」

「別にいいけど、何で？」

「最近、妙な妖怪が出るようになったからさ、私もついって行っ  
た方がいいかなと思ったからさ」

「妙な妖怪？」

「うん、気配も無く現れて、いきなり襲ってくるんだよ。言葉は通  
じないわ、弾幕はあまり効かないわ、能力が使えないわで、倒すの  
に苦労したよ」

「それはモンスターね・・・え？・・・萃香あんたモンスターを倒し  
たの？」

「あの妖怪、モンスターって言うんだ・・・うん、倒したけどデッカ  
イ蜘蛛みたいな奴」





「俺、此処まで大きい山は富士山以外に見たことがないな〜」

雅史達は山の麓に立っていた。

「じゃあ行きましようか」

霊夢の声に一同が山に入る、そして暫く進んでいると。

「止まりなさい！余所者が何の用ですか！直に引き返しなさい！！」

狼のような白い耳と尻尾を持ち白髪の上に山伏風の帽子を乗せ、手には大剣と紅葉が描かれた盾を持った少女、犬走 桜が雅史達に警告する。

「またアンタか・・・そこを通してくれない？」

「貴女は博麗巫女の霊夢さん！また山を荒らしに来たんですか！！」

「私が何時山を荒らしたのよ？」

「惚けないでください！以前この山で散々暴れたでしょう！」

「あ〜あの事ね、アンタ達を通してくれたら手荒な真似はしなかつたわよ」

「なあ、魔理沙ちゃん、霊夢ちゃんがこの山で何かしたわけ？」

「まあ、異変解決でちよつとな」

魔理沙が真司達に妖怪の山で起きた異変を説明していると。

「どうでもいいから通してくれない？」

「だから、駄目だと言っているでしょう？力ずくでも帰ってもらいますよ！」

「へへへ・・・ならこっちも力ずくで通ろうかしら？」

何時のまにか霊夢と椛が戦いそうな雰囲気になっていた。

それを見た雅史達が止めようとするが、それよりも早く萃香が止めに入る。

「まあまあ、2人とも落ち着きなあって」

「何よ？萃香？」

「あ、貴女はっ!？」

萃香を見た椛は背筋をピンと伸ばす。

「私達はこの先に行きたいんだけど駄目かな？」

「いいえ！滅相ありません！どうぞお通りください！あっ！ついでご案内します!!！」

「お、悪いねえ、私や霊夢、魔理沙はこの山の事は知っているけど、雅史と真司は始めてだから助かるよ」

「いえ！いえ！では何処に行きますか？」

「霊夢、何処に行く？」

「そうね・・・まずは守矢神社に行ってみましょう」

「早苗達の所か？」

「守矢神社って幻想郷の外から来た神社だっけ？」

「そうよ」

「なぜ、其処から行くんですか？」

「其処にライダーが居そうな気がするのよ」

「霊夢の勘なら間違いなさそうだね、なら守矢神社に案内してくれる？」

「はい！では付いてきて下さい」

椀を先頭に一同は守矢神社に向かう。

「でも追い返されそうになったと思っただら道案内してくれるなんて不思議だな」

「まあ、妖怪の山に住んでいる奴らは仲間意識が高いけどその分余所者に対する風当たりは強いからな」

「では何故、萃香さんが出てきた途端に椀さんの対応が変わったんですか？」

「それは、昔鬼が妖怪の山を支配していたからよ、だから山の妖怪は今でも萃香に対しては頭が上がらないの」

「ああ！萃香ちゃんが言っていた顔が利くってというのはこういう意味だったのか」

「そういう事よ・・あ、忘れるところだった。ちょっと椀！」

霊夢が先頭を歩く椀に声を掛ける。

「何ですか？」



「此処が守矢神社です・・・では私は哨戒任務に戻ります」  
「うん、ありがとう」

萃香の声に椋が一礼するとその場を去った。

「此処が守矢神社か・・・博麗神社とはまた雰囲気が違うな」  
「どう違うんですか？」  
「いや、こっちの方が裕福そうな・・・ゴツハツ!!!」

真司の顔に霊夢の拳が叩き込まれ真司が倒れる。

「悪かったわね！貧乏で！それでも最近は参拝客が来る様になったわよ!!」  
「霊夢ちゃん！ごめん！悪い意味で言っただけじゃないんだ!!」  
「悪い意味にしか聞こえなかったわよ！」

雅史達が必死に霊夢に謝る真司の姿を見ていると一人の少女が走ってくる。

「何の騒ぎですか!?!」  
「おっ！早苗か」  
「やつほ〜早苗元気？」  
「魔理沙さんに萃香さんそれと霊夢さんに知らない人達が居ますがどうしたんですか？」

「まったく・・・あ！早苗この2人は外来人で雅史さんとバカ真司よ」  
「須藤雅史です」

「バカつてちよつと酷いんだけど・・・俺の名前は城戸真司って言ってるんだ。決してバカ真司じゃないからね」

「雅史さんに真司さんですね、私は守矢神社の風祝で八坂神奈子様の巫女をしています、東風谷 早苗といいます」

胸の位置ほどまである緑のロングヘアに蛙と白蛇の髪飾りを付け、霊夢の巫女装束に似た青と白の袖のない巫女装束を着た少女、東風谷早苗が自己紹介をする。

「それで皆さんはどういったご用件でこちらに？」

「早苗・・・単刀直入に言うわ。此処にいる仮面ライダーに会わせて欲しいの？」

「え！何で霊夢さんが仮面ライダーの事を？」

「それは私達もライダーだからです」

雅史と真司が蟹と龍の紋章が付いたデツキを見せる。

「貴方達もライダーだったんですか！」

「それで早苗、此処に居るライダーに会わせてくれる？」

「あつ！はい分かりました、付いて来てください」

早苗の後を追い雅史達は守矢神社の住居スペースに入ってしまった。

「神奈子様、諏訪子様、逸郎さんは居ますか？」

「逸郎がどうかしたの、早苗？」

「逸郎ならその辺で寝てるんじゃないの？」

紫の髪に赤を基調とした服の胸に鏡を付け腰に小さな注連縄を締め  
ている女性、八坂 神奈子と金髪のショートボブに青と白を基調と  
した壺装束に白のニーソックス、そして頭に目玉が二つ付いた奇妙  
な帽子を被った少女、洩矢 諏訪子がそれぞれ答える。

「そういえば早苗、霊夢達の後ろに居る2人の男は誰なの？」

「この2人は外来人の雅史さんと真司さんです」

「初めまして。須藤雅史です」

「城戸真司です」

「自己紹介ありがとう、私は八坂神奈子、早苗が祀っている神よ。

まあ現在は山の神としても祀られているけどね」

「私は洩矢諏訪子、神奈子と同じく神様様だよ〜」

神奈子と諏訪子が自己紹介をし終わると障子が開いて30代後半ぐ  
らいの男が入ってくる。

「随分と賑やかだな・・・ん？」

男が雅史と真司を見ると。



「なんで此処に刑事とバカがいるんだ？」  
「おい！？何だよ！いきなり人の事をバカ呼ばわりしやがって！！」  
「貴方とは初対面の筈ですが・・・なぜ前の私の職業を？」  
「あつ？お前ら俺の事を・・・いや・・・そついう事か・・・」  
「おい！何1人で納得しているんだよ！」

真司の声に男は真司達を見ると。

「大声を出すな・・・今からバカにも分かる様に説明してやる」

怒る真司を余所に男が説明を始める。

「まず俺の名前は高見沢 逸郎だ」  
「えっ！？高見沢 逸郎ってあの巨大企業の高見沢グループの総帥を務める実業家の！！」  
「なるほど何処かで見たとある顔だと思いましたが、そついう事だったんですか・・・」  
「次に俺はお前等を知っているのにお前等は俺を知らない、恐らくそれは俺とお前等が違う世界かそれと似た世界からやって来たからだろう？」  
「いわゆる並行世界やパラレルワールドという事ですか？」  
「あくまで推測の話だが・・・オーデインなら知ってるかもしれないがな」  
「この幻想郷にモンスターが現れた事は知っていますでしょうか？ですからモンスター達を倒すのに互いに協力したほうがいいと思います」



「なにその額！早苗！アンタ達そんなに払ってんの！！」  
「いえ！いえ！そんなに払ってませんよ！私達の場合は一体につき  
10万ですよ！！」  
「何じゃそりやー！？高いには高いけど！なんで俺達が払う額  
とこんなに違うんだよ！！」  
「あゝそれはこの守矢神社での衣食住の保障と妖怪の山で自由に  
動ける特権があるからだ」  
「流石にそれだけの額は・・・」  
「払えないのなら、とっとと帰れ」  
「待ってください！何か他の方法は有りませんか！！」

雅史が頭を下げながら言う、逸郎は何か考えると。

「そうだなゝゝ俺に勝てたら協力してやるよ」  
「本当ですか！」  
「ああ・・・ただし俺が勝ったら俺の部下になってもらう」  
「部下ですか？」  
「そうだ、どんな命令にも従ってもらおう」  
「なんだよ！その条件は！」  
「嫌なら帰れ」  
「分かりました」  
「決まりだな、じゃあ外に出るぞ」

逸郎はそう言う外に向かった。



逸郎はパツチンと親指を立てた状態から右腕を左に振るポーズを取るとVバックルにデッキをセットする、高見沢に虚像が重なり、黒いライダースーツに黄緑色を強調した鎧にカメレオンの様な仮面を付けた騎士、仮面ライダーベルデに変身した。

「付いて来な!!」

ベルデはそう言うと山林に向かって走り出す。

「待ちなさい!」

シザースも後を追う。

「雅史さん大丈夫かな?」

「大丈夫だつて! 霊夢ちゃん! 須藤さんは強いからさ!」

「確かに雅史さんは強そうですが・・・」

「なんだよ? 早苗、雅史が負けるって言うのか?」

「早苗が言おうとしたのはそういう意味じゃないよ」

「どう意味よ諏訪子?」

「逸郎は結構狡猾な所が有るからね」



驚くシザースだが背後に強い衝撃を受ける、シザースバイザーを後ろに振るうが虚しく空気を切るだけだった、そしている間にも攻撃を受けるシザースは防御体勢で耐える。

「ぐう！（姿が見えないだけじゃない、気配も音もしないこれじゃあどつやって戦えばいいんだ！）」

「流石、蟹だけあって硬いねえ〜」

ベルデの声が聞こえるが声は反響して何処から聞こえるか分からなかった。

（如何すれば！）

シザースがそう思っている中、姿を現したベルデは木の陰からシザースを見ていた。

（ちっ本当に硬い奴だな・・・でもまあそろそろ決めるか・・・）

ベルデはそう考えると気が付かれぬようにバイザーにカードをセツトする。

<トピーズント>

音声が鳴るとベルデの姿が真司の姿に変わった。  
ベルデ真司はシザースに走り寄る。

「須藤さん！」

「城戸さん！何故此処に？」

「心配になって来たんだよ、それより高見沢の奴が向こうの大樹の上に隠れて居たんだよ！」

「それは本当ですか？」

「ああ！」

「分かりました、向かってみます。城戸さんは危ないので此処に居てください」

「分かった」

シザースがベルデ真司の指差した方向に向かう、その光景を見たベルデ真司はニヤリと笑うと手にウィングランサーが現れる。  
そして。

「須藤さん」

「何ですか？・・・ぐっ！？」

グサリ！！

振り向いたシザースの腹にウィングランサーが深々と突き刺さる。  
驚愕するシザースを見て笑うベルデ真司の姿がベルデに変わる。



「貴方は!?!」

「簡単に騙されて馬鹿だね〜」

ベルデがウイングランサーを引き抜くとシザースは腹を押さえフラフラと後退る。

「非殺傷でも結構効くだろう?」

「くっ!」

「まあ・・俺達の体は大分強化されているからな、ダメージなんて直なくなるだろう・・だから決めさして貰うぞ!」

ベルデはウイングランサーを捨てるとバイザーにカードをセットする。

<ファイナルベント>

認証音声と共にベルデの契約モンスター、カメレオン型のモンスター・バイオグリーザが現れると同時にベルデは逆立ちになると腕の力で空中に跳ぶ、バイオグリーザも舌を伸ばし、空中で逆さまになったベルデの両足を縛ると振り子の要領で相手に突撃させるとベルデがふらつくシザースを捕らえる。

そしてバイオグリーザが舌を戻した後、ベルデはシザースを掴んだまま空中回転する。

「うわあああ——!?!?」

「落ちろおおお——!?!?」

パイルドライバーの要領でシザースの頭を下に地面に向かっていった。

### 第13話 幻惑の策士 前編（後書き）

今回の話でベルデが使ったコピーベントについてですが。

このカードはライアの物より高性能なため武器だけではなく姿もコピーできる、もちろん過去にカードの記憶された武器や姿を引き出す事が可能（今回の話で見せた真司の姿でナイトの武器を取り出した様に）。

コピー対象はライダーだけに止まらずモンスターや東方キャラもコピーできる。

またバイオグリーザが視認するだけでその相手の姿がカードに記憶される、コピーした対象の声や雰囲気、気配、スペルカードといった所有品までもコピーする、ハツキリ言ってワームの擬態能力の様なもの（ただし記憶や程度の能力はコピーできない）。

またこのカードはベルデ自身だけではなく他の相手にも使用可能（他のライダーやモンスター、東方キャラなど）。

ただし強いダメージを受けるとコピーが解ける。

性能が性能だけにベルデはこのカードを一枚だけしか所持していない。

ちなみにライアは三枚所持。

次にクリアーベントについて。

このカードも性能がパワーアップしており、姿を消すだけではなく、気配、音、匂い、熱などといった（他にもあるが）ものも遮断してしまう。

ベルデが喋っても声が反響して何処から話しかけられているか分からない。

またバイオグリーザも同じ能力を持っている。

クリアイベントを使ったベルデを見つけるには周囲を手当たり次第に攻撃するか、直感や勘などで見つけるしかない。

ベルデはこのカードを二枚所持している

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

第14話 幻惑の策士 後編(前書き)

前編の続きです、前編と比べるとかなり短いです。

グダグダですが見て貰えたら幸いです。

第14話 幻惑の策士 後編

「（不味い！このままでは！！）うおおお！！」

ベルデの足で動かせない腕に力を入れる。

「！？（コイツ、思った以上に力がありやがる！だがどう足掻こうと俺の勝ちだ！！）」

予想よりも強いシザースの力に驚くベルデだがシザースは身動きがとれないでいた、そしてシザースの頭が地面に激突しそうになった瞬間。

ガシ！

「何だと！？」

「ボルキャンサー！」

いきなり出現した鏡からボルキャンサーが現れシザースをキャッチする、そしてシザースとベルデを再び空中に放り投げる。その時の衝撃でベルデはシザースから手を放してしまう。







「おっ！戻ってきたぜ！」

魔理沙の声に境内に居た全員の視線が雅史と逸郎に向けられる。

「須藤さん！勝負は？」

真司の問いに雅史は。

「私の勝ちです」

「おおおお！雅史の勝ちか！」

「なっ！俺の言ったとおりだろ、霊夢ちゃん！」

「そうね」

「おめでとつございます。雅史さん」

「逸郎は結構狡猾だったでしょう」

喜ぶ真司達を逸郎が不機嫌そうに見ていた。

(チツ・・・まさか、この俺があんな奴に負けるとは・・・だがア  
イツ・・・俺の知っている須藤とは感じが違うな)

逸郎がそう思っていると。



『天界』それは妖怪の山のさらに上の上空に存在し、天人や天女と  
いった者達が住む世界だ。

そんな場所でクモ型のモンスター・ソロスパイダーと西洋甲冑のよ  
うな外観の騎士が戦っていた。

「シューーー!!」

ソロスパイダーが腕の先端部に付いた鉤爪で攻撃するが。

「おっと」

騎士は外見に似合わぬ軽快な動きで攻撃を避け、右腕に装備したド  
リル状の角が付いたサイの頭のような武器でソロスパイダーを攻撃す  
る。

「シューーー!?!」

攻撃を受けたソロスパイダーがうつ伏せに倒れる、ソロスパイダー  
が立ち上がるうとするが。

「シュ、シューー!?!」

騎士に背中を踏まれ立ち上がれなかった。

「弱いな〜お前もう死んでいいよ？」

ドッス！！

「シユ！？」

ソロスパイダーの頭に騎士の武器が突き立てられる、ソロスパイダーは体を数回程痙攣させ絶命した。

「つまらないな〜こんな雑魚ばかりじゃ全然面白くないよ」

騎士がそう言っている内にソロスパイダーの体が蒸発し生命エネルギーが現れる。

「ブオオオオオ！！」

二足歩行のサイが現れ生命エネルギーを吸収した。

「退屈だしました天子でもからかおうかな」  
「ブオオオ！」

騎士はそう言つとサイと共にその場を去つた。

## 第14話 幻惑の策士 後編（後書き）

この話に出てくるベルデはTVSP版のベルデです。

少しネタバレですがこの話に出てくるライダー達は全員が同じ世界から来ていません、TVSP版や劇場版から来たライダーもいます。

この話ではアビスは出ません。

しかしまだちゃんと決まったわけではありませんが、オルタナティブ・ゼロは出そうかなと考えている最中です。

それでは次回も読んで貰えたら幸いです。

番外編 ベルデと妖怪の山（前書き）

今回はベルデが妖怪の山に来た時の話です。

番外編 ベルデと妖怪の山

「たつく！何処だよ此処は？山の中か？オーディンの奴、もっとマシな所に送れねえのか！」

高見沢逸郎は妖怪の山の中を歩きながら悪態をつく。

(はぁ、とりあえず人間を探した方がいいか)

逸郎はそう考えると歩く速度を速めた。

.....

「俺達・・・印刷しかしていないな・・・」

「確かに言われればそうだな」

「いや、それが俺達の仕事だろ？」

「俺達は与えられた仕事をするだけだろうが」

妖怪の山にある天狗達の印刷所で今日の印刷当番の4人の山伏天狗



達が新聞を印刷をしながら話していた。

「だってよ〜なんか最近面白い事がないじゃね〜か」

「面白い事ってなんだよ？」

「う〜ん・・異変とか？」

「そう毎日、異変が起きるわけないだろうが」

「でもまあ、確かに異変が起きれば鴉天狗達の新聞が面白そうだけ  
どな特に文々。新聞とかな、まあ〜色々と信用性は無いがな」

「違うない」

「「「「あははははは！」「」「」」

山伏天狗達が笑うその笑い声に混じって。

「フフフフフ」

というどこか不気味な笑い声が聞こえた。

「おい・・なんか変な声が聞こえなかったか？」

「お前もか？」

「俺も聞こえたぞ」

「俺もだ・・ん？」

1人の山伏天狗が僅かだが何かの気配を感じた気がした、その事を  
仲間に伝えようとするが。



「そうだな」

「まあ、この山に攻め込もうとする妖怪はいないさ」

「ちよつと〜気が緩みすぎじゃない？」

「確かにそのとおりだな」

「貴女もそう思わない椀？」

「そうですね、確かに気が緩んでいると思います」

「たつく・・・お前らは真面目だな」

「それは、あなたが不真面目なだけでしょう？」

「言えてるな」

「「「「ははははは！」「」「」「」

その一言に他の白狼達が笑った。

「なんだよ！俺一人笑い者にしてよ！」

「まあ、そう怒るなよ・・・！」

「「「「「！？」」「」「」

突然、漂ってきた濃い血の匂い白狼天狗達が黙る。

「なに・・・この濃い血の匂いは？」

「匂いする方角には確か新聞の印刷所がありませんでしたか！」

「何かあったかもしれない！行ってみよう！！」

椀を含めた6人の白狼天狗達は印刷所に向かった。



椛も吐き気を必死に我慢する。

「とりあえず！この事を他の仲間にしらせないと！！」

1人の白狼天狗がそう言った瞬間。

ダン！

そんな銃声と共に白狼天狗の頭部が吹き飛ぶ、血が噴水のように吹き出し頭部を無くした体がフラフラと揺れバタリと倒れる。

「う、うわあああああ！！」

その声が合図となり白狼天狗達がパニックに陥る、それがいけなかった。

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

続けざまに銃声が響き白狼天狗達の頭を吹き飛ばしていく。

「逃げるぞ！！」

「立って！椀！逃げるわよ！！」  
「は、はい！！」

椀と2人の白狼天狗がその場を逃げようとする・・・だが。

「フッフ、フッフ！」

木の上から影が飛び出し椀達に襲い掛かる。

「何！？」

「危ない！！」

白狼天狗の1人が椀を突き飛ばす。

「きゃあ！！！」

尻餅をつく椀そしてその直後にピチャと椀の顔に生暖かい液体が付く。

「え？」

椛が顔を上げると上半身が無く血を噴き出している2人の白狼天狗の体があった。

「い、いやあああ——！！！！」

その光景に叫ぶ椛だが。

「フフフフ、フフフフ」

「!?!」

椛が声のする方向を見るとサル型のモンスター、デッドリマーが立っていた。

「フフフ」

「ひい！」

不気味な笑い声を出しながら椛に近づくデッドリマー、椛は恐怖の余り動けずじまっていた。  
そしてデッドリマーが腕を振り上げた瞬間。

風符「風神一扇」

弾幕が現れデッドリマーに向かっていくがデッドリマーは素早い動きで弾幕を避ける。

「やれやれ、何事かと思つて来てみれば・・・随分と悲惨な状況ですな?」

椈の視線先には背中に黒のセミロングの頭に赤い山伏風の帽子を被り、黒いフリルの付いたミニスカートと白いフォーマルな半そでシヤツ姿の少女、射命丸 文が居た。

「文さん!!」

「どうやら無事みたいですね椈」

「どうして此処に?」

「カラス達が大変な事が起きていると言っていたから来たんですよ。しかし・・・」

文は白狼天狗達の死体を見て険しい顔つきになる。

「改めてみるとかなり酷い状況ですね・・・守矢神社の方々が起こした異変でも・・・いえ他の異変でも此処まで酷い事にはなりませんでしたよ・・・貴方はどうしてこの様なことをしたんですか?」

「フフフ!」

文はデッドリマーに尋ねるがデッドリマーは答えずに文に飛び掛る。



「どつやら知性はあまり高くないようですね・・・それなら遠慮しませんよ！」

文は翼を広げ飛び立ち攻撃を避けるとデッドリマーに弾幕を放つがデッドリマーは素早い動きで弾幕を避けると尻尾を取り外し文に向かって高周波弾を放つ。

「まさか飛び道具を持っていたとは驚きですね？」さてどう対処しましょうか・・・」

文がデッドリマーに対する対策を思考していると。

「フフフフ」

デッドリマーが文に背を向けると木に飛び移りを移動していく。

「（追うべきでしょうか？深追いは危険ですが放っておく訳のもしきませんし・・・）椀、私はあの妖怪を追います、じきに他の白狼天狗の方達がやってくると思いますので貴方は彼等に事情を説明しておいてください」

「え！文さん！・・・」



早苗が守矢神社の境内を掃除しながら言っているといきなり木々からデッドリマーが飛び出してきた。

「フフフフ!!」

「え!? な、なに!!」

「避けてください早苗さん!!」

その声に早苗は咄嗟に空に飛び上がるとデッドリマーに文の弾幕が当たる。

「ウワー!!」

デッドリマーは境内を転がるが直に立ち上がり文と早苗から距離を取りながら銃を撃つ。

「うわっ!!」

「おっと危ない!!」

高周波弾を避ける2人。

「気をつけてください早苗さん、この妖怪は本気でこちらを殺しに掛かってきますよ」

「確かにあれは弾幕じゃないですよね・・・(し、死ぬかと思った)

」

「なんの騒ぎー!」

「早苗どうかしたのー!」

騒ぎを聞きつけ神奈子と諏訪子が飛び出してくる、そしてデッドリマーを見ると。

「何?この妖怪は?」

「見た事の無い妖怪だね」

「ええ私も長く生きていますが見た事の無い妖怪です」

「じゃあ一体・・・」

「早苗さん、話は後にした方が良さそうですよ?」

「フフフフ!」

文の声を合図にしたかの様にデッドリマーが銃を向け、全員が身構えるが。

バッシン!

「ウワ!?!」

突然デッドリマーの体に衝撃と痛みが走る、デッドリマーが辺りを見渡すが早苗達以外は何も居なかった、そしてまた体に痛みが走る。

「ウウウウー!!」

デッドリマーが銃を我武者羅に撃つが当たらずそうしている間にも何かの攻撃を受けていく。

「あの妖怪、何かに攻撃されているのか？」

「でも何も見えませんよ？」

「姿を消せる奴なんて居たっけ？」

「一応、心当たりはありますが、あの妖精じゃあ、あの妖怪相手に戦うのは無理でしょうね。」

「呑気に話し合いとは随分と余裕だな？」

「……!?」「……」

突然声を掛けられ早苗達が振り向くと逸郎が立っていた。

「だ、誰ですか貴方は!」

「まあ自己紹介は後だ、先にあのモンスターを片付けてやる」

逸郎はそう言うとデッキを取り出しバックルを装着しポーズを取り。

「変身!」

デッキをセットし、仮面ライダーベルデに変身する。  
それを見た早苗達は。

「何ですか？その姿は？」

「カメレオンみたいな顔ね」

「確かに似てるね」

「これは・・・写真いいですか？」

「お前等・・・緊張感が無いのか？」

ベルデはあきれた風に言うとバイオバイザーにカードをセットする。

<ホールドベント>

認証音声と共にベルデの手にバイオグリーザの目を模したヨーヨー型の武器・バイオウィンダーが召喚される。

「バイオグリーザ、離れる」

ベルデの声に今までデッドリマーを攻撃していたバイオグリーザが姿を現しデッドリマーから離れる、そしてベルデがバイオウィンダーでデッドリマーを攻撃する。

「ウワ!？」

バイオグリーザの攻撃で弱ったデッドリマーの体にバイオウィンダーが当たる、ベルデはそのまま何度もバイオウィンダーで攻撃を繰り返す。

「ウウウウ・・・」

ベルデとバイオグリーザの攻撃で満身創意になったデッドリマーは僅かな抵抗といわんかの様に銃を撃つ、ベルデは強化された動体視力を活かして顔を傾げる事で高周波弾を避けるが。

「文さん!危ない!!」

「何!!」

ベルデの避けた高周波弾が此方をカメラで撮っていた文に向かっていく。

(今誰かに死なれたら不味い!)

ベルデはバイオウィンダーを伸ばし文の体に巻きつける。

「な、なんですか!？」

慌てる文を無視しそのままバイオウィンダーを思いっきり引っ張る事で高周波弾を避ける事が出来たが。

「あやややや!！」

バイオウィンダーを巻き戻す勢いが強かったせいか文の体が凄いいで回転しながら地面ぶつかるとそのままドリルの様に地面に埋まっていつてしまう、僅かに見える足がピクピクと動いているから死んではいないだろう・・・多分。

「あ、文さん!！」

「あれは痛そうだね〜」

「いや諏訪子、呑気に言っている場合じゃないでしょう」

「御二人ともそんな事より早く文さんを助けましょうよ!！」

三人の会話を無視しベルデはカードをバイザーに読み込ませる。

<ファイナルベント>

認証音声が鳴るとバイオグリーザが再び現れる。

それを見たベルデがバク転すると同時にバイオグリーザが下を伸ば



しベルデの足に巻きつけ、ベルデがそのままデッドリマーを捕まえる。

「ウワワワワ!?」

デッドリマーは抵抗するが意味は無く頭から地面に激突し絶命した。

ベルデのファイナルベント「デスバニッシュ」

文を助け出してその光景を見ていた早苗達は。

「き、キン肉ドライバー!!!」

「おっ、懐かしいね、キン肉マン」

「あれはアニメも漫画も面白かったよね〜特に『へのつっぱりはいらんですよ!』は名言だよね〜」

「お前等・・・何盛り上がったんだ?」

変身を解いた逸郎が3人に話しかける。

「あつ! すいません、無視してしまつて私は東風谷早苗といいます」

「高見沢逸郎だ」

「私は八坂神奈子よ」

「私は洩矢諏訪子だよ」

「ところで逸郎」

「なんだ？（いきなり呼び捨てか）」

「貴方は外人ね、あの妖怪の事を何か知っているみたいだけど、良かったら教えてくれないかしら？」

神奈子の質問に逸郎は暫く考えてから。

「おい、此処は山か？」

「ええ、そうよ此処は妖怪の山にある守矢神社よ」

「（妖怪か・まっ妖怪ぐらいで今更驚かないが）この山を治めている奴は誰だ？」

「この山を治めているのは主に天狗と河童で天狗達の長の天魔が山の代表をしているわ」

「会えるか？」

「会ってどうするのかしら？」

神奈子の質問に逸郎は軽く笑うと。

「なぐに、少々ビジネスの話だね」

この後、天魔や神奈子達そして逸郎を加えた話し合いの結果、逸郎を妖怪の山で雇う事が決まった。

番外編 ヘルデと妖怪の山（後書き）

今回もグダグダですが、少しでも見て貰えたら幸いです。

**第15話 天界の遊び人（前書き）**

今回、新たな龍騎ライダーが出ます。

少しでも読んで貰えたら幸いです。

## 第15話 天界の遊び人

「次は何処に行きましようか？」

守矢神社で一通り話しを済ませた雅史が次の目的地を真司達に聞く。

「そうだな〜じゃあ天界に行ってみるか？此処からだに近いし」

「天界って何処にあるんだ？」

「天界という名前ですから空の上にあるのでは？」

「ええ、そのとおりよ。天界は幻想郷の空の上に存在するわ」

「じゃあ次の目的地は天界ですね」

雅史がそう言った時、真司が何かを見つけ声を出す

「なあ、誰かがこっちに近づいてきているんだけど？」

霊夢達が真司の指差した方向を見ると確かに何者かが此方に近づいてきていた。

「お！あれは蓮とアリスじゃんか」

魔理沙に言われ目を凝らすと確かにダークウイングの足にぶら下が

つた蓮とアリスがこちらに向かって来ていた。  
そして雅史達の近くに着地する。

「蓮、一体どうしたんだ？」

「アリスの用事が一通り終わったから来たんだが、どうだライダーは見つかったか？」

「はい、とりあえず2人見つかりました」

「そうか・・・で誰が見つかったんだ？」

「仮面ライダーライア、手塚海之さんと仮面ライダーベルデ、高見沢逸郎さんの2人です」

「そうか・・・手塚も来ているんだな」

蓮はどこか嬉しそうに言う。

「それで、あなた達はこれから何処に行くの？」

「天界に行こうと思っています」

アリスの問いに雅史が答える。

「そう、私達も付いて行くけど構わないかしら？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「決まった？それじゃあ行きましようか」

霊夢の声に雅史達は天界に向かう。







一方雅史達も天界に到着していた。

「此処が天界ですか」

「スゲー、本当に雲の上にあつたよ」

「実際に来てみると凄いな」

「まあ、外来人にとっては驚く事でしょうね」

「私も始めて来た時はちよつと驚いたけどな」

「あなたは驚いていたんじゃないかと楽しそうにしてたでしょう?」

「いやいや、あの時は本当に驚いていたぜ?」

「どうだか」

「そんな事よりもさあ、どこら辺から捜すの?」

「そうですね、我々は天界は初めてですから、霊夢さん達に御任せします」

「そうですね・・・」

霊夢が考えていると。

「なあ、あれつて、天子達じゃないか?」

魔理沙の言葉に全員がその方向を見ると天子、衣玖、淳の3人がこちらに向かって来ていた。

「確かに天子と衣玖ね、もう1人は知らないけど」

「蓮、アイツは・・・」

「ああ、芝浦だな」

「知り合い？」

アリスが尋ねるが蓮が答える前に天子達が到着する。

「天界に近づいている連中ってアンタ達だったの」

「ええ、そうよ。それよりも天子、後ろの男は誰？」

「ああコイツは……ってどうしたのよ淳？」

「いや、ただバカにあつたからちよつと驚いただけだよ？」

淳が真司を指差しながら言う。

「誰がバカだ！！」

「アンタ以外にいないだろう？」

「くくく！お前って本当に嫌な奴だな！！」

「それほどでもないよ」

「褒めてない！！」

2人は真司が怒り淳が挑発するといった感じで言い争う。

「なあ蓮、あの2人なんであつて直に言い争っているんだ？」

「はあくまあアイツとは前の世界で色々あつたからな」

「という事は彼も」

「ああ、芝浦も仮面ライダーだ」

「え！何で淳が仮面ライダーって知ってるの？」

驚く天子の質問に霊夢が答える。

「それは蓮、雅史さん、真司もライダーだからよ」

「え！そうなの？」

「まさか淳さん以外のライダーに会うとは思いませんでした」

「そうですか、ああ、自己紹介してませんでしたね、須藤雅史です」

「秋山蓮だそれと向こうで言い争っているのが城戸真司だ」

「比那名居天子よ」

「初めまして永江衣玖といます」

雅史達が自己紹介を終えた時。

「だー！お前の根性叩き直してやる！！」

「やれるものならやってみなよ？」

いつの間にか真司と淳がデッキを取り出していた。

「どうしたんですか！城戸さん！」

「止めないでくれ！須藤さん！コイツ、OREジャーナルのみんなの事をバカにしたんだ！！」

「本当の事だろう？せつかく面白い事になりそうだったのに、あの二流メガネのせいで、全部台無しになったんだからさ」

「ーっ！？もう頭に来た！？」

真司はバックルを装着しポーズを取る。

「変身!!」

バックルにデッキをセットし、龍騎に変身する。

「ずっと相手がモンスターばかりで退屈してたんだよね」

淳は笑いながら言うとバックルを装着する、右腕が真上方向に向くように、力強く右腕を曲げるようなポーズを取ると。

「変身!!」

バックルにデッキをセットすると黒いライダースーツに銀色の鎧に左肩アーマーにだけ赤い角が付いたサイの様な仮面を付けた騎士、仮面ライダーガイに変身する。

「絶対に! OREジャーナルのみんなをバカにしたことを謝らすからな——!!」

「暑苦しいな——そういうのさ——ウザイよ」

龍騎とガイは互いにカードを引き抜くと龍騎はドラグバイザーにカードをセットし読み込ませ、ガイも左肩アーマー前部に取り付けられている突召機鎧メタルバイザーにカードを投げ入れ読み込ませる。

<ソードベント>

<ストライクベント>

龍騎はドラグセイバーをガイはメタルホーンを装備すると互いに走り出し、お互いの武器をぶつける。

「ハア！」

「おりゃああああ！」

両者はそのまま激しい攻防を繰り返すが、龍騎の激しい剣捌きにガイが徐々に押され始める。

「城戸の奴・・・かなり怒っているな」

「確かに戦い方が結構荒いですね」

「正に荒ぶる龍といったところだね」

「おっ～真司のあんな戦い方なんて初めてみたぜ」

「それだけ怒っているということかしら」

「真司が本気で怒っている所なんて始めて見たかも（それだけOREジャーナルの人達をバカにされたのが許せなかったのかな）」

「たく、淳の奴なに押されているの・・・」

「あの真司という人は強いですね」

雅史達が話している間にも両者の戦いが続いているが。

「やあ！」

「ぐっ！」

龍騎のドラグセイバーがガイを斬りつけ火花が飛び散る。

「痛いな〜！」

ガイはカードを抜きバイザーに投げ入れる。

<コンファインメント>

認証音声になると龍騎の持つドラグセイバーが突然消える。

「くっ」

龍騎はカードを抜き、バイザーにセットするが。

<ストライクベント>  
<コンファインベント>

召喚されたドラゴンクローが消える

「カードは一枚とは限らないんだよね」

そう言うとガイがメタルホーンを構え龍騎に襲い掛かる。

「やばー!」

龍騎が再びカードをセットするも。

<ガードベント>  
<コンファインベント>

龍騎の手に現れたドラグシールドがコンファインベントの効果で消えたため龍騎の胸にメタルホーンの一撃が入り、龍騎が吹き飛ばす。

「うわあああ!」

龍騎は地面を転がり、ガイがゆっくり近づいていく。

「勝負ありかな？」

「ハア、ハア、それはどうかな？」

「え？」

龍騎は体に力をいれ立ち上がりデッキからカードを引いた瞬間、烈火の如く燃え盛る炎が立ち上がり龍騎の体を包み込む。

「何だよ？あれ？」

突然の事にガイが驚く中、炎の壁の向こうから。

<<サバイブ>>

エコーの掛かった電子音声が続くと同時に炎が消え、先ほどとは姿の変わった龍騎が居た。

黒いライダースーツに赤い鎧、手には龍の頭部を模した拳銃を持った烈火の騎士・仮面ライダー龍騎サバイブが立っていた。



## 第15話 天界の遊び人（後書き）

今回の話は此処までです。

今回のガイが使ったコンファインメントについてですが。

このカードは相手ライダーのカードの効果を無効化するだけではなくスペルカードや相手の持つ能力を無効化することが出来る。

ガイはこのカードを4枚所持している。

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

第16話 烈火の騎士(前書き)

前回の続きです。





「ハア、ハア、コイツ!」

「素直に謝るならこれで終わりにしてやるぞ?」

龍騎サバイブがよろつくガイに言う。

「ハアツ! アンタバカ! パワーアップしたからって調子に乗るなよ  
! ! ! ! !」

大声で叫ぶとガイはカードをバイザーに投げ入れ読み込ませる。

<ファイナルベント>

「ブオオオオオ!!!」

認証音声と共にガイの契約モンスター、サイ型のモンスター・メタルガラスが現れガイの背後に移動する。

「お前もう消えろよ!!!」

そう言うとガイはメタルホーンを構えるとメタルガラスの肩に乗り、龍騎サバイブに向かって高速で突進していく。

「……………」

龍騎サバイブは無言でカードをバイザーに入れる。

<<ガードベント>>

「グオオオオオーン!!」

龍騎サバイブがガードベント、ファイヤーウォールを発動させるとドラグレッダーが現れ同時にその姿を烈火龍ドラグランザーへと変える。

ドラグランザーは龍騎サバイブの近くに行くとその尻尾でガイとメタルゲラスを弾き飛ばす。

「うわあ!?!」

「ブオオ!?!」

ガイとメタルゲラスは地面を転がる。

龍騎サバイブは新たなカードをバイザーに入れる。

<<シュートベント>>

龍騎サバイブはドラグバイザーツバイを両手で持つとバイザーをガイとメタルゲラスに向ける。

「グオオオオーン!!」

ドラグランザーも龍騎サバイブの後ろで力を溜め込む、そして龍騎サバイブがバイザーの引き金を引いた瞬間、ドラグバイザーツバイからはビームがドラグランザーからは火炎弾が同時に発射される技メテオバレットがガイとメタルゲラスに当たる。

「うわあああー!?!」

「ブ、ブオオオ!?!」

威力は抑えられていたがそれでもガイとメタルゲラスにダメージを与えるには十分だった、ガイの変身が解除されると龍騎サバイブも変身を解除する。

「俺の勝ちだな、じゃあOREジャーナルのみんなをバカにしたことを謝って貰おうか?」

「・・・そんな事、約束した覚えはないね・・・」

「アンタ負けたんだから謝ったら?」

「・・・」

真司に謝ろうとしない淳に霊夢が言っが淳は黙ったまま謝ろうとしなかった。

「謝らないなら、俺にも考えがあるぞ?」

「へ〜〜どんな事かな?」

「ついて来れば分かる!」

真司はそう言い淳の首根っこを掴んで引きずっていく。

「何すんだよ!? 放せよ!」

「黙って付いて来い!」

「ちょ、ちよっと! 真司どうしたのよ?」

「城戸さん、どうしたんですか? 貴方にしては随分と乱暴ですが?」

「付いて来ればわかるよ」

真司のいつもと違う感じに霊夢達は内心驚いている、蓮もまた同様だった。

( どうしたんだ、城戸の奴は? )

蓮がそう思っていると真司から離れようと淳がもがいているが真司の手は離れないため、淳が叫ぶ。



「放せよ！おいメタルガラス！助ける！！」  
「ブオオオオオ！！」

先ほどの攻撃で倒れていたメタルガラスが主人の声を聞いて飛び起きると、淳を連れて行こうとする真司に向かって突進するが。

「グオオオオオーン！！」  
「ブ、ブオオ！！」

メタルガラスは元の姿に戻ったドラグレッダーに横から体当たりされ倒れ、真司はその隙に淳を掴んだままドラグレッダーに飛び乗る。

「うわー！？」  
「行け！ドラグレッダー！」  
「グオオオオーン！」

ドラグレッダーは咆哮すると空高く飛び立つ。

「ちょっと！城戸さん！何処に行くんですか！！」  
「須藤、城戸の奴が言っていたろう、付いて来れば分かると」  
「方向からして人里に向かっているようね、とりあえず私達も真司の後を追いましょう」  
「真司の奴が何をするか気になるしな」  
「確かに私も興味があるわ」



様な物を持っていたかは気にしないで貰いたい」。

「オイ！！何で俺がこんな格好をしないといけないんだよ！！」

「お前が謝ろつとしないからだろ！」

「それとこんな格好をしないといけないのと、どう関係してるんだよ！」

「まあまあ、落ち着いてください淳君・・・ぷっ」

「フツ・・・そうだぞ、芝浦、中々似合っているじゃないか？」

「そうよ、面白そうじゃない？・・・フフフ」

「アハハハ！霊夢の言つとつりだな」

「そうね・・・うふふ」

「うんうん、似合ってる似合ってる」

「中々さまになってるわよ？淳？アハハハハ！」

「そうですよ、淳さん・・・フフ」

「お前等・・・！！」

「おい、怒る前に寺小屋の子供達の相手をしろよな？」

「この格好もそうだけど、なんで俺が子供の相手をしないといけないんだよ！」

淳が広間に居る寺小屋の生徒や慧音を見ながら言う。

「真司、嫌がってるなら別に無理強いさせる必要はないんだぞ？」

真司達のやり取りを見ていた慧音が言う。

そもそもなぜこんな事になったかと言うと、真司が淳に着ぐるみを着せて寺小屋に連れて来たのだ。

最初は慧音も生徒達も突然の事に驚いていたが後から追いついた雅史が事情を説明し、その後に真司や蓮それに淳の事も紹介した、無論3人がライダーである事も知らせた。

その時に霊夢が真司になぜ淳を寺小屋に連れて来たのか訪ねると。

『芝浦に子供達の遊び相手をして貰おうと思ったんだよ、それで一応は許してやる。まあ完全に許したわけじゃあないけど』

と答えた。

「いえ、淳が嫌でもやって貰いますよ」

「おい！俺は嫌だからな！！」

「じゃあ、誰か代わりにやってくれる人を探してみるんだな。いな  
いと思うけど」

真司に言われ淳が雅史達の居る方向を見ると全員が淳から距離を取っており、その目が『絶対に嫌』と言っていた。

「（どうする！そつだ！！）メタルガラス！」

淳が呼ぶとミラーワールドからメタルガラスが現れる。

「お前、これを着ろ」





騎士はそう言つと歩き出し、太陽の畑近く建っている家に向かい、  
ブラもその後を追った。

第16話 烈火の騎士（後書き）

今回もグダグダでしたが少しでも楽しんで貰えたら幸いです。



番外編 天人くずれと竜宮の使いとガイ（前書き）

なんかサブタイがオーズぽくなった様な気がしますね（苦笑）

今回もちよつとでも読んで貰えたら幸いです。

番外編 天人くずれと竜宮の使いとガイ

「まったく・・・衣玖は勉強、勉強、つてうるさいわね。ちょっと休んでるだけじゃない？」

「その言葉はもう何回も聞きましたよ？」

天子は自分の部屋のベットで寝転がりながら言うが衣玖がそれを注意する、といつても毎回同じやり取りをしているが。

「ねえ、衣玖、何か面白い事はない？」

「退屈ならお勉強を「勉強以外で」はあ〜〜そうですね〜」

衣玖は顎に指を置き考えていると部屋の天井辺りに黒い穴が現れ其処から青年が落ちてくる。

ドスッン！！

「え！？何！！」

「人が落ちてきましたね」

「イタタタ・・・オーデインの奴いきなり飛ばすかな〜普通」

青年、芝浦 淳は立ち上がると辺りを見回しこちらを見ている天子と衣玖を見つけると。

「いきなりでちょっと悪いけど、此処は幻想郷？」

「は、え、何？」

「はい、確かに此処は幻想郷ですが」

「ふ〜ん、じゃあ此処の事を教えてくれない？」

淳は天子を無視し衣玖に話しかける。

「ちょっと！なんでこの私を無視して衣玖に話しかけてるのよ！」

「アンタがボーっとしてるから」

「アンタがいきなり現れるからちょっと驚いていただけよ！」

「ふ〜ん、その割には随分とマヌケ顔だったけど？」

「ふ、ふふふ・・・人間の癖に随分な言い様ね？」

険悪な雰囲気になる2人を見た衣玖が話しかける。

「御二人共、自己紹介もしてないのに喧嘩をするのはどうかと思いませんが？」

「「う・・・」」

衣玖の言葉に淳と天子は。

「・・・比那名居 天子よ」

「・・・芝浦 淳だ」

「御二人共良く出来ましたね、私は永江 衣玖といいます。それで先ほどの淳さん質問に答えますね」

「じゃあ、俺の事も説明するよ」

.....

「ーーという事です」

「ふ〜ん、随分面白そうな世界だね」

「・・・普通の外来人は幻想郷の説明を聞くと驚かれるんですが・・・」

「まあ俺は不思議な事に慣れているからね？」

「それは淳さんの話に出てきた仮面ライダーの事ですか？」

「まあね」

「その仮面ライダーって強いのか？」

今まで黙っていた天子が淳に尋ねる。

「他のライダーはそこそこ強いかな？」

「じゃあ、アンタは？」

「強いに決まってるじゃん」

「ふ〜ん」

天子が淳の事をどこか疑っている様な目で見える。

「なんだよその顔は？疑ってるの？」

「だって強いなら幻想郷に来てるのはおかしいでしょ？」

「うっ！」

天子の言うとうり強いなら幻想郷に来ていない、幻想郷に来ているという事は前の世界で死んだという事だからだ。  
この時淳は流石に自分の事を全部説明するんじゃないやなかったと後悔した。

「アンタ、実はそんなに強くないんじゃないの？」

天子の言い方に淳は。

「弱いと思うなら戦ってみる？」

「ふっ、いいわ受けて立ってあげる」

「後悔しても知らないよ？」

「その言葉そのまま返すわ、格の違いを教えてあげる」

「へえ〜〜言うじゃん」

そのまま淳と天子は表に出る。



デッキをセットし、仮面ライダーガイに変身する。

「へえ、それが仮面ライダー・・・見た目は強そうね？」

「見た目だけじゃないよ」

ガイはそう言いながらメタルバイザーにカードを投げ入れる。

<ストライクベント>

認証音声と共にメタルホーンがガイの腕に装備される。

「じゃあ、どれくらい強いか見せて貰おうかしら」

天子はそう言うのと緋想の剣を取り出し構える。

衣玖は相互に視線を送ると。

「それでは始めてください！」

合図と共にガイが天子に向かって走り出し、天子はガイに向けて弾幕を放つがガイはメタルホーンを盾にして弾幕を防ぎつつ天子に接近しメタルホーンで天子を攻撃する。

「ハア！」

「フツ！」

天子は緋想の剣で防御し、メタルホーンと緋想の剣が火花を飛び散らす。

「中々やるじゃん！」

「当然でしょう！私を誰だと思っているのかしら！」

「じゃあ、もうちょっと本気を出そうか・・な！」

ガイは腕に力を入れるとそのまま天子を押し飛ばす。

「うわ！」

押し飛ばされた天子はすぐに体勢を立て直すがガイがすぐそばまで近づいてきた。

「この！」

天子は周りに注連縄つきの岩、要石を出現させるとそれをガイに向けて放つがガイはメタルホーンや拳で要石を壊しながら天子に近づ



きメタルホーンを突き出す。天子は空に飛び上がることでこれを回避する。

「へえ〜本当に飛べたんだ」

「あら、信じていなかったの？」

「別に信じてなかったわけじゃないけどさ〜改めて見ると本当の事なんだな〜と思ったただだよ」

「ふ〜ん、まあいいわ」

天子は地面に降りるとスペルカードを取り出し宣言する。

剣技「気炎万丈の剣」

天子は急速にガイに接近すると緋想の剣でガイを滅多切りにする。

「うわっ！いったいな〜！！」

「アンタ、かなり頑丈ね」

天子はそう言いつつ二枚目のスペルカードを取り出し宣言する。

地符「不讓土壤の剣」

それを見たガイもバイザーにカードを読み込ませる。

<コンファインメント>

コンファインの効果で天子のスペルカードが無効化される。

「え!?!」

「こっとうカードも在るんだよ・・ね!?!」

ガイの拳が天子の腹に入り、天子が吹っ飛ばされる。

「きゃあぁー!?!?!」

天子の体はその辺あった岩にぶつかり天子が咳き込む。

「ゴツホ!ゴツホ!」

「アンタも結構頑丈じゃん(ちょっと強く殴っちゃったかな?)。どう降参する?」

「だ、誰が!?!」

天子がそう言い立とうとした時。

キイイイイン キイイイイン

突然天子の近くに鏡が現れ其処からソロスパイダーが現れ天子に襲い掛かる。

「えっ!？」

「総領娘様!！」

ソロスパイダーの鉤爪が天子を引き裂こうとした時。

<アドベント>

「ブオオオオオ!！」

「シュ、シュ!！」

メタルガラスが現れ、ソロスパイダーの鉤爪を受け止めると指先の爪・メタルネイルでソロスパイダーを攻撃し更に頭のメタルホーンで突き飛ばす。

「シューー!！」

突き飛ばされたソロスパイダーが地面を転がる。

「この戦いに乱入は禁止だよ。だからさっさと退場してよ」

ガイはそう言うとバイザーにカードを投げ入れる。

<ファイナルベント>

「ブオオオオ!!!」

メタルゲラスがガイの背後に行くのを確認するとガイはメタルゲラスの肩に乗り、ソロスパイダー目掛けて高速で突進する。

「シューー!!!」

突進を受けたソロスパイダーの体は粉々に粉碎され爆発する。

ガイのファイナルベント「ヘビープレッシャー」

メタルゲラスが生命エネルギーを吸収するのを確認したガイが天子達に近づく。

「大丈夫？」

「アンタ何で？」

「何で助けたかって？それはアンタが死んだら後々面倒そうだからかな？」

「その・・・助けてくれて・・・ありがとう」

「・・・え、アンタお礼なんて言えたの？」

「な、何よ？私がお礼を言ったら悪いの！！」

「別に悪いとは言っていないだろう？」

「あらあら、すっかり仲良くなってますね」

衣玖が天子とガイを見ながらニコニコとした表情で言う。

「つて！衣玖！アンタ何時から其処に！！！」

「最初から居たじゃないですか？もう忘れたんですか？それにしても・・・」

衣玖は天子の顔をジッと見る。

「な、何よ？」

「いえ、先程のお礼を言う総領様のお顔はとっても可愛かったですよ」

「／／／・・・う、うるさいわね！！」

「そんなに顔を真っ赤にして恥ずかしがるなんて、総領様も女の子ですね」

「／／／& a m p ; % \$ # # & a m p ; ; ( · % ! ? / / / い、衣  
玖—————!!」

天子と衣玖の漫才を見ていたガイは腰に手を当てもう片方の手で頭  
の後ろ辺りを搔くと。

「結局勝負はどうなるわけ？」

ガイの言葉に隣に居たメタルガラスが『さあ~~~~』という風に肩  
を竦めるのであった。

この後、勝負は中止になり淳&メタルガラスは天子を助けた功績と  
ミラーモンスター対策のため比那名居の屋敷で住む事になるのだっ  
た。

番外編 天人くずれと竜宮の使いとガイ（後書き）

今回も少しでも楽しんで貰えたのなら幸いです。

第17話 太陽の畑の凶悪犯（前書き）

いよいよあの人の登場です！





淳が雅史、真司、蓮、満を見ながら言う。

ちなみに満は偶然通りかかったので真司が声を掛けた、その時満は。

『あつ！お久しぶりですね！先輩！！』

と明るく答えた。

ちなみに満にも今までに出会ったライダーの情報も伝えておいた。

「ライダーは多い方が色々と対抗策が練れるからですよ」

「ふ〜ん、でも俺天人達に天界を守るように頼まれてるんだよね？」

「本当なの衣玖？」

「はい・・モンスターは非常に手強いうえにミラーワールドに逃げてしまうと手が出せません。ですから天界の方々は淳さんにモンスター退治を頼んだんです」

「そういう事」

淳の言葉に雅史は暫く考えると。

「それでは淳君の気が向いた時でも構いませんので、その時は手伝って貰えますか？」

「まあ、それだったらいいけど（いつ気が向くか分からないけどね）

」

「じゃあ、それでお願いします」  
「話は終わった？」

天子が話しかけてくる。

「ええ、終わりましたよ。天子さん、どうかしたんですか？」  
「久しぶりに人里に来たから、見て回ろうと思ったのよ」  
「でもこの人里ってなんか見た感じ古臭い感じだよね、ゲーセンもないじゃん」  
『ゲーセン？』

雅史達ライダー以外の全員が首を傾げる。

「ゲームセンターの略称ですよ」  
「ゲームセンターってどんな所なの？」  
「ゲーム機械を並べた遊技場の事です」  
「ゲーム機械・・・そういえば香霖堂でそれと似たような奴が在ったなた、事が確かファミコンっていう名前だったけ？」  
「ファミコン・・・随分懐かしい名前ですね」  
「俺やった事あるな〜蓮は？」  
「まあ、俺もあるな」  
「あのレトロな感じがまたいいんですね」  
「へえ〜分かってるじゃん」

雅史達が盛り上がっている所に霊夢が声を掛ける。

「雅史さん、盛り上がったる所悪いんだけど。少しいいかしら？」  
「おっと！すいません。どうかしたんですか？」  
「大分ライダー達にも会えたし一旦此処で解散しない？」  
「どうかしたの霊夢ちゃん？」  
「ちよつと神社に戻ろうと思って、なんだかんだでほったらかしだったから掃除とかしないといけないし」  
「そうですね・・それなら休息も兼ねて此処で一旦解散しましょう」  
「決まりね、それと真司と萃香には掃除を手伝って貰うわよ？」  
「私は別にいいよ」  
「俺も問題ないよ、居候の身として当然の事だし」  
「そう、じゃあ行きましようか」  
「うん」  
「じゃあ、みんなまた会おうな！」

霊夢、萃香、真司はそのまま博麗神社の方角に歩いてった。

「俺はどうするか・・・」  
「ねえ蓮、暇なら買い物に付き合ってくれない？」  
「ん？何か買う物でもあるのか？アリス」  
「ええ、人形の服に使う布地が少なくなってきたから、買おうと思つて」  
「やる事もないし別にいいぞ」  
「ありがとう。それじゃあ行きましようか」  
「なあ私も付いて行っていいか？」  
「別にいいわよ」  
「決まりだな！じゃあ行こうぜ！」

魔理沙を先頭にアリス、蓮が歩いていった。

「私達も行きましょう」

「どこか面白い所でもあるの？」

「この前来た時に美味しい茶屋があったから其処に行きましょう」

「確かにあそこのお茶は美味しいですね」

「ふうん、じゃあ行ってみようかな」

「決まりね、それじゃあ行きましょう」

天子はそう言うと言いつと歩き出し淳と衣玖がその後を付いて行った。

「では私も明日の寺小屋の準備をしないといけないからここで失礼する」

「俺もそろそろ帰りますね」

「ええ、それでは慧音さん、満君また今度」

慧音と満がそれぞれ違う道を歩いていった。

「ふうん・・私も戻るか」

全員を見送った雅史が上月家に向かって歩き出す。

(ん？あれは・・・)

雅史が歩いていると道の向こうから2人組みの男が話しながら歩いてくる、見た目は大柄な男だが雅史は気配から妖怪という事が分かった。

(妖怪か・・・まあこの里では人間を襲つてはいけない決まりだから大丈夫だろう、それに妖怪全部が人を襲うわけじゃないしな)

雅史がそう思い男達の横を通つた時。

「なあ、知ってるか？」

「あ、何がだ」

「最近妖怪達の間で広がってる噂だよ」

「それっていきなり現れて人間も妖怪も無差別に襲う怪物の事が俺は見た事は無いけど」

「いやそれじゃない」

「じゃあ何だよ、その噂って」

「噂つてのは『妖怪を食べる人間がいる』っていう噂だ」

「・・・それ作り話じゃないのか？普通は逆だろ」

「まあ噂だからな・・・でも見たって奴もいるらしいぞ？」

「どんな人間なんだ？」

「何か目つきの悪い男で名前は確か・・・『浅倉 威』っていう名前だっただけ」

「!？」



癖のある緑のショートボブの髪、白のカッターシャツとチエツクが入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチエツク柄のベストを羽織っている女性、風見 幽香が日傘をさし咲き誇った向日葵達を眺めながら歩いていった。

(今日もみんな元気ね・ん?)

ふと幽香が前を見ると一人の男が座り込んで火を焚き何かを焼いていた。

「・・・・・・・・・・」

幽香は日傘を無言で畳むと持ち替え先端を男の頭に向けると。

「っ!!」

男に向かって日傘を投擲する。

放たれた日傘は凄まじいスピードで男の頭に向かっていく、こんな速度で日傘が当たれば男の頭は木っ端微塵になるだろう。しかし男は頭を逸らし日傘を避ける。

バツコーン!!



標的を失った日傘が地面を砕きながら突き刺さる。  
男は地面に刺さった日傘を見た後。

「何のつもりだ？幽香？」

男、浅倉 威が振り返りながら言う。

「それはこつちの台詞よ威、なに此处で焚き火しているのよ？」  
「腹が減ったからこれを焼いていただけだ」

威は木の串に刺したトカゲを見せる。  
因みに焚き火の周りには他にも小鳥、ネズミが焼かれていた。  
顔を少し顰める幽香に威は。

「食つか？まあ、食わんだろうな」  
「あたりまえでしょう？なに食べさせようとしているのよ。それよりも、それも食べるの？」

幽香が焚き火の近くに置かれたある物に指を指しながら尋ねる。

「そつだが？問題でもあるのか？」  
「別に問題はないわよ、でも貴方、本当によく妖怪を食べるわね」



雅史はポケットに閉まったカードデッキを握り締めながらそう考え  
ると威に近づく。

「失礼ですが浅倉 威さんですね？」

「知り合い威？」

「いや知らん・・・誰だお前？」

「私は須藤雅史といます。そして」

雅史が威にカードデッキを見せる。

「貴方と同じ仮面ライダーです」

「ほう・・・」

「へえ、貴方もライダーなのね」

「早速ですがお話g「面白い」「

雅史の言葉を遮って威が立ち上がるとカードデッキを取り出す。

「話し合う気は無いようですね」

「御託はいい、ライダーなら戦えよ」

「・・・いいでしょう」

両者は互いにデッキを構えVバツクルを装着する。

威は上方向に曲げた右手を前に突き出し、即座に左方向に曲げるよ

うなポーズを取り、雅史も変身ポーズを取ると。

「変身！」

バツクルにデツキをセットする。

互いの体に虚像が重なり雅史は仮面ライダーシザースに変身し。威は黒いライダースーツに紫色の鎧そしてコブラの様な仮面を着けた騎士、仮面ライダー王蛇に変身する。

「あ~~~~」

王蛇は首を捻るとコブラを模した小型の杖型召喚機、牙召杖ベノバイザーを取り出すと頭部分をスライドさせてカードをセットする。シザースもまたシザースバイザーにカードを読み込ませえる。

<ソードベント>

<ストライクベント>

認証音声が鳴り王蛇の手には黄金の突撃剣、ベノサーベルがシザースにはシザースピンチが装備される、そして互いに武器を構えたと  
き。

パンパンパン

「はいはい、此処では戦わない」

幽香が手を叩きながら王蛇とシザースの間に割ってはいる。

「邪魔をするのか？幽香」

「邪魔しないわ。でもね貴方達が此処で戦ったら向日葵達が危ないでしょう？だから違う所で戦ってほしいの？」

「・・・チツ、おい場所を移すぞ？」

「別に構いませんよ。被害が出ない所ならミラーワールドで戦いますか？」

「ああ」

王蛇とシザースは戦う場所をミラーワールドに移すためライドシューターを呼び出して乗り込むとミラーワールドに突入していった。

「やれやれ」

幽香はそう言つと地面に深々と突き刺さった日傘をあっさり引っこ抜くと再び日傘をさす。

「同じライダー同士の戦い・・・どちらが勝つのかしら？・・・アナタ達はどつ思つ？」

幽香は向日葵達に微笑みながら問いかけるのであった。

**第17話 太陽の畑の凶悪犯（後書き）**

王蛇VSシザースの本格的な戦いは次回です。

次回も見てください幸いです。

## 第18話 敗北（前書き）

シザースVS王蛇の続きです。

今回は結構短いですが見て貰えたら幸いです。



## 第18話 敗北

ミラーワールドの太陽の畑に到着した王蛇とシザースはライドシューターから降り向き合う。

「さあ、始めるかー!!」

「そうです・・ね!!」

王蛇とシザースは駆け出し、お互いの武器をぶつける。ベノサーベルとシザースピンチが火花を飛び散らす。

「オラッ!!」

「グッ!!」

王蛇がシザースの腹に前蹴りを入れ後退るシザースにベノサーベルを振り下ろす、しかしシザースはシザースバイザーで受け止めると先程のお返しの様に王蛇の腹に前蹴りを食らわす。

「ウオッ!!」

倒れた王蛇に追撃を仕掛けるシザースはシザースピンチを振り下ろすが王蛇はベノサーベルで受け止めると両足でシザースを蹴飛ばす。

「ぐわっ！」

蹴飛ばされたシザースをよそに王蛇は飛び起きると。

「やっぱり最高だな。戦いつてのわ？」

「まったく、まさに戦闘狂ですね？」

「ハハハ！悪いか？」

王蛇はそう言うのとベノサーベルを地面に突き刺すとベノバイザーを取り出しにカードを読み込ませる。

<ストライクベント>

認証音声が鳴ると王蛇の左腕にコブラの頭部を模した手甲、ベノクローが装備される。

「さあ！もっと俺を楽しませろー！！！」

王蛇はそう言うのと右腕でベノサーベルを引き抜きシザースに襲い掛かる。

(噂以上に凶暴な奴だな！)

シザースは内心そう思いながら王蛇を迎え撃つ。

「はははははは！！」

「ぐう！」

王蛇がベノクローとベノサーベルで攻撃しシザースがシザースバイザーとシザースピンチで攻撃を防ぐ形で戦闘が続くが王蛇の猛攻にシザースが押されていく。

「くっ！(不味い！押し切られる！)」

シザースがそう思った時。

「ハアッ！」

「しまっグハ！？」

シザースピンチがベノサーベルの攻撃で弾き飛ばされ、シザースの胸にベノクローの一撃が入る。

鎧越しに強い衝撃を受け、よろつくシザースに王蛇は逆手に持ったベノサーベルを叩きつけ更にベノクローの側面に付いた刃・ベノハ―ジユで斬りつける。

「がっはー!!」

「どうした!これで終わりじゃないだろう!」

そう言うと王蛇はベノサーベルの柄の部分でシザースの頭を殴る。

「ぐっ!」

視界が一瞬暗くなり倒れるシザースの顔面に王蛇は膝蹴りを食らわす。

「うわー!!」

シザースは膝蹴りをまともに食らって吹っ飛び、地面に倒れる。

「何だあゝもう終わりか?」

「う、うう・・・うう」

「詰まらんな」

王蛇は酷く詰まらなさそうに言うと、ベノクローとベノサーベルを放り捨てバイザーを取り出すとカードをセットし読み込ませる。







金の鎧を身に纏った不死鳥の騎士・仮面ライダーオーデインだ。

(浅倉威・随分と手加減が無いな。まあ、アイツに手加減などさ  
いそく無理な話か)

オーデインはそう思うと一枚のカードを取り出し見つめた後にシザ  
ースを見る。

「誰一人ライダーに死んでもらわれたら困るのだ、私にとっても幻  
想郷にとってもそしてお前達ライダーにとってもな」

そう言うとオーデインの姿が一瞬で消え、辺りには金色の羽だけが  
残っていた。



## 第18話 敗北（後書き）

今回、王蛇が使ったオリジナルカードの設定です。

ストライクベント（ベノクロー）「3000AP」

ベノスネーカーの頭部を模した手甲。

使い方はほぼ龍騎のドラグクローと一緒にですが側面に付いた刃・ベノハージュによる攻撃そして盾としても使えるため攻守共に優れた武器です。

いよいよあのカードが出ます。

次回も短いと思いますがそれでも読んでもらえたら幸いです。

## 第19話 激流の騎士（前書き）

ようやくあのカードが出ます。

それとボルキヤンサー強化態の名前を変更しました。

## 第19話 激流の騎士

地面に倒れ伏したシザースに王蛇が迫る。

「くうう！（不味い！早く立たなければ！）」

シザースは何とか立とうとするが先程のダメージが大きく立てないでいた。

そうしている間にも王蛇が距離を縮めてくる。

（一体どうすれば！）

シザースがそう思った時。

<タイムベント>

無機質な電子音声が鳴ったかと思った瞬間、王蛇の動きが止まる。

「え？」

シザースの口から気の抜けた声が出る。

(浅倉の動きが止まった?)

シザースが何とか立ち上がり周りを見渡すと動きが止まっているのは王蛇だけではなくシザース以外の全てのものがその動きを止めていた。

「これは・・・一体?」

「それは私が時を止めたからだ」

「!?!」

突然声を掛けられシザースが声のした方向を見ると其処にはオーディンが腕を組んで立っていた。

「オーディン!」

「久しぶりだな、須藤雅史」

「貴方も幻想郷に来ていたんですか?」

「ああ」

「そうですね・・・オーディン貴方には色々聞きたい事があります」

「何だ?」

「なぜ契約モンスター以外のミラーモンスターが幻想郷にいるんですか?」

「・・・」

「答えてください!」

「今はまだそれを語るべきではない。私はこれをお前に渡しに来た

だけだ」

オーデインはそう言うとシザースにカードを投げ渡し、シザースが受け取る

「これは？」

「それはサバイブ・激流だ」

「サバイブ！それは確か三枚しかないのでは？」

雅史が驚くのも無理は無い、雅史が聞いた話ではサバイブは「烈火」「疾風」「無限」の三枚しか存在しないからだ。

「それは私が新たに作り出した物だ」

「作り出したって・貴方は本当に何でもありませんね」

「それがご都合主義というものだ。ではそろそろ私は行くぞ」

オーデインはそう言うとシザースに背を向ける。

「待ってください！まだ話が！」

「言った筈だ私はそれを渡しに来ただけだと」

有無も言わずオーデインの姿は一瞬で消えてしまった。

「行ってしまった・・・」

シザースは渡されたサバイブのカードを見つめる。

「サバイブ・・・何故オーデインはこれを私に」「あ？お前いつの間に立った？」「！？」

シザースが振り向くと王蛇が少し首を傾げながら立っていた。

(時間が動き出したのか・・・)

「まあいい、立ったなら続きをするか」

王蛇はそう言つと再び歩き出す。

(ダメージが回復していない今の状態で勝つのは難しい・・・使ってみるかサバイブを)

シザースはサバイブのカードをかざした瞬間、地面から激流の如く水が噴き出しシザースを包み込む。

「うお!？」

シザースに近づいていた王蛇が激流の様に流れる水に吹き飛ばされるが直に体勢を立て直す。

一方シザースは自分を包み込む水の壁を眺めていると左腕に装備されたシザースバイザーが剣状のバイザーに変形する。

「これは・・・このバイザーにサバイブのカードを入れるのか」

シザースは剣型の召喚機、甲召剣シザースバイザーツバイにカードを入れる。

<<サバイブ>>

エコーの掛かった電子音声で鳴るとシザースの姿もシザースサバイブへと変わり水の壁が弾ける様に消える。

「ほゞお前もそのカードを持っていたのか、これは楽しみだ」

王蛇がシザースサバイブを見ながら言う。

「それは良かったですね（早く方を付けないと不味いな・・・）」

シザースサバイブはデッキからカードを引く。

（何だこのカードはストレンジ？直訳すると奇妙なかとりあえず使ってみるか）

カードをバイザーに入れる。

<<ストレンジイベント>>

認証音声が鳴るが何も起きない。

（どういう事だ・・・ん？カードの絵柄が変わっている？）

シザースサバイブはもう一度カードを読み込ませる。

<<アクセルイベント>>

（アクセル・・・加速という事は）



シザースサバイブはバイザーを構えると一瞬で王蛇との距離を詰め、バイザーで王蛇を斬りつける。

「ハッ！」

「ぐわっ!?!」

斬りつけられた王蛇は斬られた所を押さえながら数歩下がる。

「ハハハハハ！やっぱり戦いは最高だな？」

「そうですね？しかしそろそろ終わりにさして貰います」

シザースサバイブは新たにカードを引くとバイザーに読み込ませる。

<<アドベント>>

認証音声が鳴りボルキャンサーが現れるとその姿をボルクレイザーへと変える。

そして王蛇を巨大化したハサミで捕らえる。

「うおっ!?!」



『冥界』それは閻魔から転生や成仏を命じられた幽霊が駐留する場所  
所で其処には『白玉楼』と呼ばれる広大な日本屋敷が存在している。  
そして白玉楼に通じる長い階段、白玉楼階段を登っているモンスター  
ーがいた。

巨大な蜘蛛の下半身を持つ半人半獣の姿したモンスター、デイスパ  
イダー・リボン。

このモンスターは伊吹萃香に倒された個体だが完全には倒しきられ  
ておらず強化再生して蘇ったのだ、そして道中妖怪や他の動物など  
を捕食しながら来たため萃香と戦った時よりも力を増し白玉楼を目  
指していた。

「シユ?」

後もう少しで白玉楼に到着しようとした時、突然空間に切れ目が出  
来き両端がリボンで縛られ多数の目が見える不気味な穴『スキマ』  
が現れる。

「シユー!」

デイスパイダー・リボンはスキマに対してはあまり脅威を感じて  
いないがその中に居る者に対しては脅威を感じていた。  
そして胸にあいた穴から毒針を撃とうとした時。

<フリーズベント>

電子音声が鳴った瞬間ディスプレイ・リボンが凍りついた様にその動きを止める、そしてスキマから飛び出した騎士の持つ斧によつて頭から一刀両断され更にスキマと白玉楼から飛んできた弾幕によつてその体を爆発四散させる。

「ガオオオオン!!!」

浮かび上がった生命エネルギーが二足歩行の白虎に吸収される様子を騎士は静かに見ているのだった。

## 第19話 激流の騎士（後書き）

今回登場したシザースサバイブについての設定はまた書くつもりです。

それとシザースサバイブになったときのボルキャンサー強化態の名前はボルクレイザーです。

最初はボルランペーという名前でしたがセンスはちょっとあれなので感想の方でカッコイイ名前が書かれたので変更しました。

今回の話でオーデインが使用したタイムベントについてですが。

龍騎本編では時間を巻き戻すだけだったが、この話では時間そのものを操作し時間を戻したり、進めたり、止めたりすることが出来るうえ過去、現在、未来に行き来することすら出来るカードになっている。

ただし時間の行き来に関してはまだ自由には使えないため、主に時間を止めるときに使われる。

またオーデインは全ての特殊系カードを所持している。

それでは次回も見て貰えたら幸いです。

## シザースサバイブ 設定資料(前書き)

シザースサバイブの設定です。  
グダグダな設定ですが(汗)

それと感想の方でいい名前があったのでボルキャンサー強化態の名前をボルランペーからボルクレイザーに変更さして貰いました。

## シザースサバイブ 設定資料

仮面ライダーシザースサバイブ

ジャンプ力/ひととび40m

身長/193cm

体重/97kg

パンチ力/350AP

キック力/400AP

走力/100mを6秒

最高視力/約15km 最高聴力/約15km

仮面ライダーシザースが仮面ライダーオーデインから渡された『サイブ・激流』により強化変身した姿でそのボディの防御力は全ライダー中最高だが反面機動力は若干落ちている。

しかしデッキが再構成されたためカードの数が増えている。  
ちなみに姿は `pixiv` に投稿されているシザースサバイブのイラストを元にしています。

シザースサバイブの召喚機、甲召剣シザースバイザーツバイ

シザースバイザーが変形した剣型の召喚機でカード装填口が2箇所あり、上部の装填口にサバイブのカードを装填し、下部の装填口にアドベントカードを装填する。  
当然武器としても使用出来る。

シザースサバイブの契約モンスター、ボルクレイザー

攻撃力 / 7000AP

身長 / 5m50cm

体重 / 330kg

シザースがシザースサバイブに強化変身したことでボルキャンサーが強化態に進化したもので姿も人間型から非人間型つまりは本当に蟹の様な姿に変わっている。  
防御力も相当のものであり並の攻撃では傷一つ付かない。



その巨体と硬さを利用した体当たり攻撃や大型化した鉄による攻撃そして口から高圧水流や物凄い量の泡を吐ける、その他にも自身の体高を超える高さまで垂直に跳びあがってプレス攻撃なども行う。また見掛けによらず動きが素早い特に横走りなどが、また足を折りたたんで飛行すらも出来るためシザースサバイブを上に乗せて空を飛ぶことも可能である。

ファイナルベント発動時にはバイク型のマシンモードへと変形する。

シザースサバイブの所有カード

アドベント（ボルクレイザー）「7000AP」

ボルクレイザーを呼び出すのに使用する。

シュートベント（クレイザーアロー）「3000AP」

シザースバイザーツバイの刃の部分が中央から左右に開きボウガンモードに変形する。

ソードベント（クレイザーソード）「3000AP」

シザースバイザーツバイをボウガンモードからソードモードに戻す際に使用する。

ブラストベント（クレイザーブラスト）「4000AP」

ボルクレイザーが敵に向かって高圧水流を放つ攻撃で龍騎サバイブのメテオバレットと同等の威力がある。

ガードベント（クレイザーディフェンス）「5000GP」

ボルクレイザーが直接シザースサバイブを守る、全ライダー中最高の防御力を誇る。

ストレンジベント

状況に合わせて変化するカードでアドベントカードの他にスペルカードにも変化する時があるまたシザースサバイブはこのカードを2枚所持している、龍騎サバイブも同様。

ファイナルベント（クレイザーアタック）「9000AP」

シザースサバイブを乗せたボルクレイザー（マシンモード）が敵に猛スピードで敵に突っ込んでいく技。

無論ただ突っ込んでいくだけではなく敵が逃げようとすれば高圧水

流が噴き出して敵の逃げ道を塞ぐため命中率はかなり高い。

## シザースサバイブ 設定資料(後書き)

グダグダな設定ですね(汗)

こういう設定しか思いつけない自分がorzです

第19・5話 一方その頃四人は（前書き）

変なサブタイですね（汗）

このサブタイの意味はシザースと王蛇が戦っている時に真司、蓮、淳、満が何をしてたかという意味です。

今回もグダグダですが見て貰えたら幸いです。

## 第19・5話 一方その頃四人は

「よしっ！風呂掃除終わり！！」

博麗神社で風呂掃除を終えた真司が立ち上がり背伸びをする。

「う〜ん！さてドラグレッダーの方は「グオオオオン！」おっ！薪割り終わったか！」

ドラグレッダーの声に真司が風呂場の窓から外を見るとドラグレッダーの側に大量の薪が山積みになっていた。博麗神社に戻ってきた真司は霊夢から風呂掃除と薪割りを頼まれたため真司は風呂掃除をし、薪割りはドラグレッダーに任せた。ちなみにその時ドラグレッダーは『何で俺が』というふうな顔をしていたが（薪割りはドラグレッダーの手では斧を持ってないので尻尾のドラグセイバーで行った）。

「真司、お風呂掃除と薪割りは終わった？」

「あつ、霊夢ちゃん。ドラグレッダーに薪割りの方を任せたから、風呂掃除も早く終わったよ」

「そう・でもドラグレッダーって薪割りも出来たのね」

「前の世界じゃあこんな事させたことなかったけど風呂焚きに荷物運びそして薪割り本当に色々便利だよな〜」

「そうね、火を熾すのも一瞬だものね」

この幻想郷に来てからドラグレッダーは家事などを手伝っていた（主に火お越しなど。無論火力は下げているが）。

「それで霊夢ちゃん、なにか用？」

「ええ、お茶を入れたから休憩にしましょう」

「おっ！それは嬉しいな！お〜〜い！ドラグレッダー休憩だぞ〜」

「グオオン！」

「じゃあ行きましょうか、萃香は先に行って休憩しているわ」

霊夢、真司、ドラグレッダーの2人と1体は萃香の待つ居間に向かった。

.....

蓮、魔理沙、アリスの3人は人里の道を歩いていた。

「蓮、買い物に付き合ってくれてありがとう」

「気にするな、俺もすることが無かったからな」

「おいおい、アリス私の事を忘れているぞ」

「ふふ、そうだったわね。ごめんなさい魔理沙」

「まあ、いいけどさ。それにしてもあの喫茶店のケーキと紅茶は美味しいな」

「そうだな、コーヒーも結構いけるしな」

「気に入って貰えてよかったわ」

魔理沙達は買い物途中に寄った喫茶店の事で話していると。

「そうだなあアリス、今日は家で夕飯を食べないか？」

「別に構わないわよ」

「決まりだな！じゃあ材料を買って帰ろうぜ・・・ああそれとアリス、夕飯よろしくな！」

「ええ、わかっ・・・って！私が作るの！」

「アリスの料理は美味いからな！なあ蓮？」

「ん？確かにアリスの料理は美味いな」

「そうだろ！なあいいだろうアリス？」

「ま、まあ其処まで言うんなら別にいいけど（蓮が私の料理を美味しいって言ってくれた・・・ふふふ　なんだか嬉しいわね）」

「じゃあ、早速材料を買いに行こうぜ！」

「そうだな」

「はいはい、分かったわよ」

魔理沙達は夕飯の材料を買いに向かう。

.....



「へえ〜本当に美味しいね、このお茶」  
「そうでしょう？この羊羹も美味しいわよ」  
「どれどれ・モグモグ・うん！お茶とよく合う」

淳が笑顔で羊羹を食べ他の茶菓子にも手をつけていく。

「どうやら淳さんはこの茶屋のお茶と茶菓子が気に入ったようですね」

「前の世界で食べた老舗の数量限定の高級茶菓子と比べると味は落ちるけどさ、中々美味しいよ」

「名前からして高そうですね？」

「そう？まあ、羊羹の詰め合わせで10万円はいくけどさ」

「じゅ!？」

「ふ〜ん、結構安いわね？」

「そうですか！十分高いと思いますが！」

「そう？」

「まあ、確かにちょっと高いかなとは思っけどさ」

「そ、そうですか（10万円がちょっと高いとか安いとかって・・まあ・仕方がないですね・総領嬢様もそうですけど淳さんも裕福な家庭で育ったようですよ。まあ、そのせいで2人とも自分勝手に我侷な所が有りますが（汗））」

衣玖は天子と淳を見ながらそう思うのだった。



満がそう言った時。

「ナズーリン！先に行き過ぎ！」

ウェーブのかかった黒のショートヘアの頭に小さめの船長帽のせ。セーラー服とキュロットスカートといった服装の少女、村紗 水蜜が片手に買い物袋を持って走り寄ってくる。

「何で先に行くのよ！」

「別に置いていくつもりは無かったよ、ただ君が少し遅かったからちょっと先に進んだだけさ」

「それを置いていくというの！」

「そうだったかな？それはすまなかったね」

ナズーリンは特に反省した様子も無く言う。

「まったく・・・あっ！満さん、こんな所でどうしたんですか？」

「偶然ナズーリンちゃんと出会ったから軽く話していただけだよ」

「そうなんですか・・・あっ！それとこの間は命蓮寺の屋根の修理を手伝ってくださってありがとうございます」

「いいよ、別に殆どギガゼール達に任して俺は見てただけだし」

「確かにギガゼール達がせつせと働いているのに君だけは呑気に茶を啜っていたね」

「うっ！・・・まあ、別にいいじゃない！過ぎた事だし」

「まあ、確かにそのとおりだけどね。さてそろそろ私達も帰るとするかな」

「そうだね。それじゃあ満さん、また会いましょう」

「うん、水蜜ちゃんもナズーリンちゃんも帰り道に気をつけてね」

「満の方こそ気をつけなよ」

「分かっているって」

満はそう言い、2人と別れた。

「さて、帰りしにアイツ等に煎餅でも買って帰るか」

満はそう言うとギガゼール達のために煎餅を買いに行くのであった。

第19・5話 一方その頃四人は（後書き）

今回も見ていただきありがとうございます。

次回も見て貰えたらさいわいです。

**番外編 妖怪達の悲劇（前書き）**

今回は王蛇が幻想郷に来た時の話ですが。

この話では幽香はまだ出てきません（汗）

それでも見てくれたら幸いです。

## 番外編 妖怪達の悲劇

幻想郷の森の中を5人ほどの妖怪が歩いていった。

「あゝあ、最近人間食ってないな」

「確かに外から餌（人間）が来ても怪物のせいで中々ありつけないしよ」  
ミラーモンスター

「人里は人を襲えないうえに其処に住む人間にもあんまり手を出しちゃいけないしな」

「まったく食料係は何してんだか」

「せめて近くに人間でも・・・ん？」

妖怪の1人が何かを見つける。

「おい・・・あれって人間じゃないか？」

「何？何処だ？」

「ほら、あそこ」

妖怪の1人が指を指し他の妖怪達もその方向を見ると1人の男が手に何かを持って立っていた。

「本当だ！人間だ！」

「正に噂をすれば影だな」

「早速アイツを食おうぜ！」





威が妖怪達を見ながら言う。

「その反応からしてお前外来人だな」

「これは運がいいな（外来人なら食ってもなんの問題も無い）」

「外来人？なんだそれは？」

威が妖怪の1人に尋ねるが。

「知っても意味は無いぜ・・・だってお前は俺達に食われるんだからな！」

妖怪はそう言うと太い腕を威に振り下ろすが。

バツシ！

威は妖怪の腕を片手で受け止める

「なっ!?!」

「『何だと!?!』」

全力でないとはいえ普通なら人間の力では受け止められない一撃を受け止められ、その事に腕を受け止められた妖怪それに他の妖怪達



「ギヤアアアアアア！！！！」

凄まじい力で妖怪を締め付けると妖怪が悲鳴を上げる、それを聞いたベノスネーカーが更に締め付ける力を上げると。

「……………っ！？」

バキ！バキ！バキ！

骨が砕けるような音と共に締め付けている隙間から大量の血が流れ出す。

「シャアアア！」

ベノスネーカーが締め付けていた妖怪を解放するが、その姿はかろうじて原型が分かった状態だった。

「テメー……………！！！！！」

「よくも……………！」

仲間を殺された2人の妖怪が激怒しベノスネーカーに襲い掛かるが。









威はそう言い、『太陽の畑』に向かったのだった。



番外編 妖怪達の悲劇（後書き）

なんか浅倉というかベノスネーカーがやり過ぎた感が（汗）  
書いていてちよっとうわ〜〜と書いてしまいました（苦笑）

次回の話で幽香を登場させられると思います。

では次回も見えて貰えたら幸いです。

番外編 王蛇VS幽香（前書き）

サブタイ通りの話ですハイ（苦笑）。

安心のグダグダ話ですが見て貰えたら幸いです。

番外編 王蛇VS幽香

(ふう、いい風ね)

幽香が向日葵を眺めながら風に当たっていると。

(ん？何かしら？)

誰かが此方に近づいてくる気配を感じた。

(誰かしら？)

幽香が気配のした方向を見ると1人の男が此方に歩いてきていた。

(人間かしら？格好からして外来人ね)

幽香がそんな事を考えていると。

「おい」



「ん？」

モンスターの気配を感じ、気配のした方を見ると。

「ヴウウウ」

現れた鏡からシアゴーストが姿を現す

「はあく・・・またこの妖怪」

シアゴーストを見た幽香が溜息を出しながら言う、それというのも此処の所、幽香はよくシアゴーストの襲撃を受けていた（まあ、その度に倒したり撃退しているが）。

幽香の呟きに威は。

「また？お前モンスターに襲われて無事だったのか？」

「無事も何もあの程度の妖怪にこの私が負けるわけないでしょう？それより貴方あの妖怪の事を知っているの？」

「まあな・・・それよりモンスターに勝つなんてお前人間か？」

「私は人間じゃないわ妖怪よ」

「妖怪・・・まさかそんなもんまで居るとはな・・・それならさつきの変な格好の連中の事も説明がつかない。それより・・・この女・・・モンスターを倒すという事はそれなりに強いという事か・・・面白い」

そう思った威が鉄パイプを投げ捨て懐からデッキを取り出すと幽香の前に出る。

「ちょっと貴方・・死ぬ気？人間が勝てる相手じゃあないわよ？」

「死ぬつもりはない、黙って其処で見てろ」

そう言いバツクルを装着し変身ポーズを取り。

「変身！」

デッキをセットし威は仮面ライダー王蛇に変身する。

「あ~~~~」

王蛇は首を捻るとベノバイザーにカードを読み込ませる。

<ソードベント>

認証音声が鳴りベノサーベルを装備した王蛇がシアゴーストに襲い掛かり。

「お前はとっとと消えろ」

グサ！

「ヴッ！？」

シアゴーストの頭にベノサーベルを突き立てシアゴーストを殺す。

「まさか瞬殺とわね（私でもちよっと手こずったのに・・・それにあの姿は・・・）」  
「さて」

王蛇は消えていくシアゴーストに目もくれずに幽香に近づくとベノサーベルを突きつける。

「何のつもりかしら？」

「モンスターを倒すという事はお前強いんだよな？なら俺と戦えよ」

王蛇の言葉に幽香は少し考えると。





ジュウウウウー

先程まで幽香が居た地面が毒液によって溶けていく。

「どうやら、この攻撃は防げないみたいだな？」

「まったく・その蛇、随分と危ない攻撃をしてくれるわね？（避けて正解だったわね）」

「じゃあ、どんどん行くぞ！」

「シャアアアアー！！！」

王蛇とベノスネーカーが共に幽香に襲い掛かる。

王蛇がベノサーベルで攻撃しベノスネーカーがベノハー Judiciaryや尻尾で攻撃する、対する幽香は時に傘で防いだり、弾幕で牽制したり、空を飛んで回避したりと攻防を繰り返していた。

「お前！予想以上に強いな！いいぞもつと！俺を楽しませろ！！！」

「貴方って良く戦闘狂って言われたい？（まさか私が人間相手に結構押されるなんてね、霊夢や魔理沙以来かしら？）」

「さあな？」

「そう私も、もうちょっと楽しみたいけど・・・これ以上戦つと向日葵達が危ないからそろそろ決めるは」

パッチン！

幽香が指を鳴らすと地面から植物の蔦が突き出してきて王蛇とベノスネーカーを拘束する。

「何!？」

「シャアア!？」

突然の事に王蛇とベノスネーカーが驚く、その隙に幽香が距離を取ると閉じた日傘の先端を王蛇とベノスネーカーに向けるとスペルカードを発動させる。

「終わりよ」

起源「マスタースパーク」

幽香の傘から放たれた巨大な光線が王蛇とベノスネーカーに迫る、普通なら避けようとするか何も出来ずにただ当たるだけしか選択肢が無いが。

「ハハハハハハハハ! ! 本当に最高だな戦いは! ! まさかこんな攻撃が有るとはな! !」

蔦を引き千切り拘束から解放された王蛇がバイザーにカードを読み

込ませる。

<ファイナルベント>

王蛇がその場でベノスネーカーを背にジャンプし毒液の勢いに乗るとそのままマスタースパークに向かっていく。そして王蛇とマスタースパークがぶつかり合う。

「ウオオオオオオオオオ!!!」

王蛇は足に凄まじい衝撃を感じる、いや足だけではなく体中にも衝撃が響くが王蛇はそれを打ち砕くかの様に足に力を入れマスタースパークを蹴っていく。

非常識な幻想郷でもそうそうお目にかかれない光景に幽香は。

「私のマスタースパークを蹴ってる!?! なんなのあの人間! それにどんだん此方が押され始めている!?!」

幽香の言ったとおりマスタースパークが王蛇の連続蹴りによって押され始めていたのだ。そして。

「もつとだ!!! ベノスネーカー!!!!!!!」

「シャアアアアアアアアア！！！！」

王蛇の声にベノスネーカーが吠えると王蛇に再び毒液を吐きかけ王蛇の勢いが増しその結果、王蛇の蹴りが幽香のマスタースパークを打ち破る。

そして幽香の体に王蛇の連続蹴りが入ると、そのまま王蛇は幽香を蹴る、蹴る、蹴る、蹴り続ける。

「ハアアアアアアア！！」

「くうう……！！ガツハ！ちよ、調子に乗るなー！！」

蹴られ続ける幽香は渾身の力を込め手放さなかった傘で王蛇の頭を殴る。

「ぐわっ！？」

王蛇は頭部に走る強い衝撃と痛みによってバランスを崩し地面を転がり、幽香もそのまま吹っ飛び地面を転がっていった。

王蛇のファイナルベント「ベノクラッシュ（非殺傷）」

「シャアアアアアアアアア！！！！」

ファイナルベント（何故非殺傷になったかは分からないが）によってかなりのダメージを負って倒れた幽香にベノスネーカーが口を大きく開き襲い掛かる。

（もう体を動かす余力も無いわね・・・これで終わりかしら？食べられて死ぬなんて何だか癪だけど・・・）

迫るベノスネーカーを見て幽香は静かにそんな事を考えていた、そしてベノスネーカーが牙を幽香に突き立てようとした時。

「やめろ！ベノスネーカー！！」

「シャ、シャアア!？」

変身を解いた威の静止の声にベノスネーカーが幽香を襲うのをやめる。

「貴方、何のつもりかしら・・・情けでも掛けてるつもり？」

「別に情けを掛けたわけじゃない、お前は面白いからな此処で殺すのは惜しいと思っただけだ」

「そんな余裕を見せていいのかしら？隙を見て貴方を殺すかもしれないわよ？」

「そうしたいならそうしろ、だがお前はそんな事はしないだろう？」

「何を根拠に言っているのかしら？」

「お前も俺と同じ戦いを楽しむタイプだろう？まあ全部が一緒とい

「うわけじゃないと思うがな？」

威の言葉に幽香は。

「……ふふふふ、貴方面面白いわね。ただの危ない戦闘狂かと思っただけ？」

「否定はしない、実際自分でもそう思っている」

「そう……ますます貴方に興味が沸いたわ」

「それは良かったな」

幽香は日傘を杖代わりに立ち上がると。

「風見 幽香よ、貴方は？」

「浅倉 威だ」

「そう……ところで威、住む所はあるのかしら？」

「いや、来たばかりで無いな」

「それなら、私の家に来る？」

「俺は野宿でもいいが……何故だ？」

「あの妖怪……いやモンスターの事や貴方の事を教えて欲しいのよ、それに一応は命を助けられたしねそのお礼を兼ねてどうかしら」

「まあ、別に構わないぞ」

「そう、なら行きましょうか？」

こうして威は幽香の家に住まわせて貰う事になったのだった。

ちなみにそれから暫くして『妖怪を食べる人間』という噂が広まり

だした、もっとも嘘ではなく実際に威は妖怪を食べたりしているが。

番外編 王蛇VS幽香（後書き）

今回はガチの龍騎キャラと東方キャラのバトルでした。

次回も見て貰えたら幸いです。



第20話 悩み事の一つ解決（前書き）

今回は新しい龍騎ライダーが出ます。

## 第20話 悩み事の一つ解決

「ん・・此処は？」

ベットに寝かせられていた雅史が目を覚ます。

「そうだ、私は浅倉と戦って、目を覚ましたようね」「

雅史が声のした方を向くと幽香がイスに腰掛けて此方を見ていた。

「幽香さん・・でしたね？」

「ええそうよ、気分はどうかしら？」

「ええ、まだあっちこっち痛みますが動けない程ではありません」

「貴方って丈夫ね、まあそれを言うなら威もそうだけど」

「あの・・浅倉さんは今は？」

「威なら外に居るわよ」

「そうですね、ありがとうございます」

雅史はそう言うのとベットから出ると外に出ると威が地面に座り向日葵畑を眺めていた。

「浅倉さん」

「・・お前か、なんの用だ？」

「少しお話が有ります」

.....

「……という事ですから協力して欲しいんです」

雅史は威にミラーモンスター達と戦うのに協力してくれるように頼んだ。

(協力してくれない可能性が高いが……どう出る)

雅史がそんな事を考えていると。

「気が向いたら協力してやる」

「そうですか……はい?…今何と?」

「聞こえなかったのか、気が向いたら協力してやると言ったんだ」

「ほ、本当に協力してくれるんですか?」

「お前……そんなに俺をイライラさせたいのか……なんなら此処で潰してやるうか?」

「す、すいません!まさか協力して貰えるとは思ってなかったの」

「ふん、話はそれだけか？」

「ええ、協力感謝します」

「気が向いたらな」

「お話は終わってたかしら？」

2人が振り向くと幽香が立っていた。

「幽香さん話は今終わりました。ですから一旦人里に戻ろうと思  
います」

「そう、まあ気をつけて帰りなさい」

「ええ、それでは浅倉さん、幽香さんまた会いましょう」

雅史はそう言うとそのまま歩いていった。  
それを見ていた幽香は。

「でも外ね」

「何がだ？」

「貴方が彼に協力するなんてね、てっきり断ると思ったわ」

「気が向いたらの話だがな、まあアイツに協力すれば何か面白い事  
が有りそうな気がするからな」

威はそう言つと雅史の歩いていった方向を見ながらそう言つ。

(そう・・・それこそ幻想郷全てを巻き込んだ派手な事が・・・な)



いた。

「満さん、何故此処に？」

「ちよつと薬草を探りに来てたんですよ、ほら今はモンスターが出て危ないですから」

満はそう言うと背負った竹籠の薬草を見せる。

「そうですか」

「雅史さんこそ何故此処に？」

「ちよつとある人に会いにいったんですよ」

「ある人？」

「ライダーですよ」

「え！誰に会ったんですか！」

満が笑顔で尋ねるが。

「浅倉威です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その名前を聞いた瞬間、満の顔が笑顔のまま固まる。

「満さん？どうしたんですか？」

心配した雅史が話しかけるが満は笑顔のまま固まっている。

「満さん！」

「え！・・・あ、雅史さん」

「笑顔のまま固まっていますけど、どうしたんですか？」

「いや・・・浅倉の名前を聞いた瞬間、驚きのあまり頭が真っ白になっちゃって」

「まあ・・・その気持ちは分かりますね、私も浅倉さんの名前を聞いた時は驚きましたから」

「それにしても浅倉と会ってよく無事でしたね？」

「まあ色々とあって結局戦う事になりました、何とか勝てましたけど」

「浅倉相手に勝つって凄いですよ」

「まあかなり危なかったですけどね。でもその御蔭で浅倉さんの協力を得られました」

「それは凄いですね！でもあの浅倉が素直に協力なんて・・・」

「まあ気が向いたらと言っていましたけど」

「そうなんですか、とりあえず里に戻りません。いま薬草採りも終わりましたから」

「そうですね」

雅史と満は一緒に里に向かった。

-----





ト姿の少女、魂魄　妖夢が自身の半身である半霊を辺りに漂わせて立っていた。

「あら妖夢どうしたの？」

「お食事の用意が出来たから呼びに来たんですよ」

「あら今日は随分と早いわね？」

「藍さんが手伝ってくれたんですよ」

「ああ、なるほどね」

幽々子は昨日白玉楼に泊まりに来た3人の事を思い出し納得といった表情をする。

「それで幽々子様は悟さん、さっき私がどうこうと言っていましたか？」

「別に貴女の悪口を言っていた訳ではないわ、悟がね貴女が手入れをしている枯山水は何回見ても飽きがないんですよ」

「え！そうなんですか悟さん？」

「うん、本当だよ。でも妖夢ちゃんも偉いね、こんな大きな枯山水を手入れするなんて」

「い、いえ！もう習慣の様なものですから褒められる事では・・・」

「十分凄い事だと思っけどな」

「そうね、これでもうちよっと色々成長してくれたらいいんだけど」

「色々ってなんですか！これでも日々精進しています！」

「そうですよ幽々子さん、妖夢ちゃんも頑張っていますよ」

「悟さん・・・」

「あらあら妖夢、顔が真っ赤よ？」

「~~~~~っ！幽々子様！！」

「ふふふ 冗談よ。さあ早くご飯を食べに行きましょうっ。もうお腹がペコペコよ」

「……はあ、そうですね。紫様達も待っているので早く行きましょうっ」

「そっだね」

幽々子と妖夢の後ろをついて行く悟はふと立ち止まると人魂が飛ぶ空を見つめる。

（本当に幽々子さんも妖夢ちゃんもいい人だな、それに紫さんに藍さん、橙ちゃんも良くしてくれるし前の世界よりも毎日が楽しいよ）

「悟さん、どうかしたんですか？」

「何でも無いよ」

悟はそう言つと再び歩き出し幽々子達の後を付いて行った。

第20話 悩み事の一つ解決（後書き）

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

第21話 再会の二人（前書き）

今回も見て貰えたら幸いです！

## 第21話 再会の二人

「そういえば幽々子様、今日は食材を買いに里に行こうと思うのですが」

朝食を終え、後片付けを終えた妖夢が幽々子に言う。

「あら、食材はこの間買ってきたばかりじゃあなかったかしら？」

「昨日の夕食で食材を殆ど使ってしまったから」

「確かに昨日は幽々子が何時にも増して沢山食べてたわね」

金髪のロングヘアの頭にリボンの巻かれた帽子を被り、八卦の萃と太極図を描いた中華風の服を着た女性、八雲紫が幽々子を見ながら言う。

「むくく！だって仕方がないじゃない紫、昨日はご飯が美味しくて特に箸が進んだんだから！」

子供のような仕草で頬を膨らませた幽々子が言う、それを見ていた悟は。

「幽々子さんの食べっぷりは見てる方もご飯が美味しくなるよ、それに昨日妖夢ちゃんと藍さんが作ってくれた料理が美味しかったの

は本当の事だし」

「ふふ、そう言っただけで貰えるとする方も嬉しいな妖夢？」

「そうですね藍さん」

金のショートボブに二本の尖がりを持つ帽子を被っており紫同様中華風の服を着ている（もともと此方は古代道教の法師が着ているような服だが）。

腰からは金色の狐の尾が九つ、扇状に伸びている女性、八雲 藍の言葉に妖夢が同意する。

「ねえ妖夢ちゃん、人里に行くんなら僕も行っただけいいかな？」

「私は構いませんが、どうかしたんですか悟さん？」

「まだ人里に行った事が無いからさ・ちょっと興味が」

「そういうことでしたら一緒に行きましょうか。構いませんか幽々子様？」

「別に構わないわよ」

「ありがとうございます幽々子様。それでは悟さん行きましょうか」  
「うん」

妖夢と悟が外に向かおうとした時。

「妖夢に悟、それなら私も食材の買出しがあるから一緒に行こうか」

「藍さま！私も行っていいですか！」

茶のショートボブの猫耳の付いた頭に緑の帽子、白いシャツの上に

赤いベストにスカートそして腰から2本の猫の尻が伸びている少女、  
橙が藍に自分もついて行っていいか尋ねる。

「ああ別に構わないよ橙」

「ありがとうございます！藍さま！」

「良かったね橙ちゃん」

「はい！あつ！悟さん、里に着いたら美味しいお魚屋さんを教えませぬ」

「お魚屋さん？川魚とかを扱ってるの？」

「いえ海の魚も有りますよ」

「え？（幻想郷に海は無い筈じゃあ）」

海が無い幻想郷で海の魚を扱っていると聞いて悟は首を傾げる、すると藍が。

「海が無いのに何故海の魚が有るのか？と思っているな？」

「え、ええ（何で分かったんだ？）」

「何・・長く生きていると相手が何を考えているか何となく分かるようになるのでな（もっとも何を考えているかまったく分からない方もいるが）」

「凄いですね・・・」

「それで先程の答えだが、紫様が定期的外から海の魚を調達してきているんだ。魚以外にも塩や幻想郷では取れない物を調達してもらえる」

「えっー！？」

「ちよつと！何でそんなに驚くのよー！」

「いや・・紫さんって・・その〜何時も寝ているかぐうたらして

いるイメージが・・・」

「・・・ちよつとそれは酷いわよ、私ってあなたの頭の中ではそんなイメージなわけ」

「まあ、何時もという訳ではありませんが寝ているとぐうつたらしっているは合っていますね」

「ちよつと！藍！其処は私の式としてフォローする所でしょう！」

「ははは、すみません紫様」

「も～～～～」

「まあいいじゃない紫」

「む～～とりあえず悟、私だって色々としているのよ」

「すみません、ちよつと失礼でしたね」

「分かればいいのよ（もつとも殆どの仕事は藍に任せているなんて言えないけど（汗））」

紫が内心そんな事を考えていると。

「それでは話が終わった所で悟さん、藍さん、橙さん行きましょつか？」

「うん」

「ああ」

「はい！」

4人は玄関に向かって歩き出していった。

「気をつけてね～～」



幽々子が団子（食後のデザート）を持った手で4人に手を振り見送る。

そして先程とは別人の様に真剣な顔になると（それでも団子は持ったままだが・・・）。

「紫」

「何かしら？」

「今回の異変について貴女は何処まで知っているのかしら？」

「……………」

「貴女の事だから色々調べているんじゃないかしら？」

紫は扇子で口元を隠しながら幽々子を見ると。

「勿論色々調べているわ」

「それで何か分かったの？」

幽々子の問いに紫は扇子を閉じる。

「私も詳しい事はまだあんまり分かっていないわ・・・」

「紫でも詳しい事が分からないの？」

「悔しい事だけどね・・・」

紫はそう言つと後ろを見ると



「シュシュシュ！」  
「フツ！」

バクラーケンが腕の触手を伸ばすがシザースのバイザーによって切り裂かれる。

「シュシュュー！？」

「まだだ！」

シザースは怯むバクラーケンに近づきバクラーケンの顔面を殴る。

「シュシュシュ！？」

顔面を殴られ吹っ飛び地面を転がるバクラーケンにシザースが追撃を掛ける。

一方インペラーは。

「ウフフフフ」

「待てゴラァ！！」

何やらデッドリマーが森の中で素敵な？追いかけてっこをしていた。

(すばしっこい奴だなー！雅史さんとも大分離れちゃったしな〜ま  
ああの人が負けるわけ無いけど)

インペラーがそう思っていると。

「ゲエエエエエ！？」

「ウワァァァァ！？」

突然木々の間からイモリ型モンスター、ゲルニユート飛び出してと  
いうか吹っ飛んで来てデッドリマーと激しくぶつかって両者が地面  
に倒れる、その光景を見ていたインペラーは

「何であのモンスター吹っ飛んで来たんだ？」

そう言い首を傾げていると。

ガサ

「ん？」

茂みから音がしインペラーがそちらを向くと茂みから一人の騎士が

現れる。

「!?!」

その姿を見たインペラーが声を無くす。

黒いライダースーツに白く光り輝く銀と青の鎧そして虎の様な仮面を付けた騎士、仮面ライダータイガが其処にいた。

「東條・・・」

「佐野君・・・」

かつて元の世界で裏切られた男と裏切った男が幻想郷で再会したのだった。

第21話 再会の二人（後書き）

中途半端な所で終わっちゃいましたね（汗）  
すいません！！ m（| | ;） m

次回も見て貰えたら幸いです！

第22話 タイガとインペラー（前書き）

今回も読んで貰えたら幸いです。

## 第22話 タイガとインペラー

インペラーとタイガが出会う少し前。

キイイイイイン キイイイイイン

「ん？」

藍、妖夢、橙、悟の4人が人里に向かう途中、モンスターの気配を感じ悟が立ち止まる。

「どうしたんですか？悟さん？」

「いや、さっきモンスターの気配がしたんだ・・・」

「え！本当ですか？」

「うん」

悟が頷いた瞬間。

「ゲエゲエゲエ」

ミラーワールドからゲルニユートが姿を表しす。妖夢達が構えるが。



「みんな、ここは僕に任して」

悟はそう言いデッキを取り出しバックルを装着する。

そして両手を胸の前でクロスさせ腰の位置まで持っていき右手を左腰の方へ、左手を右斜め上へ動かしたあと左手首を返し。

「変身！」

デッキをバックルをセットし悟に虚像が重なり仮面ライダータイガに変身する。

「ゲゲエ！」

その姿を見たゲルニユート自分が不利なのをさとりとはすぐさまミラーワールドに引き返していく。

「「「「えっ!?!」「」「」

その行動に4人の声が重なる。





「・・・やっぱりお前も幻想郷に来てたんだな」

インペラーがタイガに話しかける（因みにデッドリマーとゲルニユートはぶつかったダメージでまだ立てないでいた）。

「・・・うん・・・佐野君」

「何だ？」

「その・・・『あの時』は・・・ごめん・・・」

「・・・」

インペラーはその言葉に『あの時』の事を思い出していた『あの時』というのは前の世界で龍騎と戦うインペラーを裏切り負傷させた事だ、その時は龍騎がタイガを押さえ込み逃がしてくれたが逃走中に運悪く王蛇に出会い彼のファイナルベント・ベノクラッシュを受けデッキを破壊された結果現実世界に戻れなくなり、泣き喚きながらミラーワールドの中で消滅していったその時の記憶は鮮明に思い出せる。

インペラーは無言でタイガに近づくと。

ドカ！

「グッ!？」

タイガの顔を殴る、そして。

「これであの時の事はチャラだ」

「え？」

「確かにお前のした事は許せないけどさ・俺だってお前の事を利用しようとしてたんだから、これでチャラだ！」

インペラーの言葉にタイガは啞然とし。

「許して・・・くれるの？」

「チャラって言ったろ？それよりアイツらを倒す方が先じゃないか？」

インペラーがある方向を見ながら言うタイガも同じ方向を見るとデットリマーとゲルニユートが立ち上がり始めていた。

「うん・・・そうだね」

タイガはどこか嬉しそうな声でそう言うと斧型の召喚機、白召斧デストバイザーを構え、それを見たインペラーも足を上げガゼルバイザーにカードを読み込ませる。

<スピント>

「行くぞ！」

「うん！」

ガゼルスタップを装備したインペラーの声にタイガが答えデッドリマーとゲルニユートにそれぞれ立ち向かっていく。

「ゲエゲエエー!!」

「フフフフ!!」

一方デッドリマーはインペラーにゲルニユートはタイガに攻撃を仕掛ける。

「フフフ!!」

「危なっ!？」

デッドリマーが尻尾を取り外しインペラーに向けて高周波弾を放つがインペラーはガゼルスタップで防ぎつつデッドリマーに近づき腹部に前蹴りを叩き込む。

「ハッ！」



『ハアアアアア！』『グルアアアア！』

大量のガゼール達が現れ一斉にデッドリマーに攻撃していく。

「ウワーーーーー！！！！」

その攻撃に倒れそうになるデッドリマーだったがインペラーに両手で頭を掴まれ強烈な膝蹴りを受けたため倒れる前に爆発四散したのだった。

インペラーのファイナルイベント「ドライブダイバスター」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

一方、タイガもゲルニユートとの戦いを繰り広げていた。

「ゲエゲエゲエ！」

「フッ！」



タイガはバイザーで攻撃するがゲルニユートの背中に隠し持った巨大な十字型手裏剣で受け止めてしまう。

「ハア！」

「ゲエエー！」

それでもタイガはバイザーで攻撃するが同じ事の繰り返しだった。

（このモンスター・・・結構やるな・・・でも、これならどうだ！）

タイガがカードを引き抜きバイザーに読み込ませる。

<アドベント>

「ガオオオオオン！！」

「ゲゲ！？」

音声と共にタイガの契約モンスター、白虎型のモンスター・デストワイルダーがゲルニユートの背後に突然現れると驚くゲルニユートに飛び掛り捕らえると、うつ伏せの状態で地面に押し付けると、そのまま引きずっていき木にぶつける。

「ゲ、ゲゲ・ゲエ・」

おもいつきり頭から木にぶつけられ脳震盪を起こすゲルニユートの耳に。

<ファイナルベント>

無慈悲な認証音声が届く。

「ガオオオオン!!」

「ゲエエー……!!」

再びデストワイルダーに捕らえられると今度は仰向けの状態で地面を引きずられていく、そしてゲルニユートの引きずられていく方向には。

「ハアアアアアアア!」

手甲と爪が一体となった様な巨大な鉤爪、デストワイルダーの腕を模した武器・デストクロウを両腕に装備したタイガが待ち構えていた、そしてゲルニユートの背中にデストクロウが突き立てられるとタイガがゲルニユートの体を持ち上げる。

「ゲ・・・ゲエ・・・」

「ごめんね」

タイガの声と同時にゲルニユートの体が爆発四散した。

タイガのファイナルベント「クリスタルブレイク」

「そつちも終わったみたいだな？」

デストワイルダーが生命エネルギーを吸収し終えたのと同時にインペラーが歩いてくる。

「佐野君の方も終わったの？」

「ああ」

「じゃあさ、一旦戻らない？話したい事もあるし」

「ちょっと待ってもらえるか雅史さんが来てからでもいいか？」

「雅史さんって誰？」

「俺達と同じ仮面ライダーだ、とってもいい人だぞ」

「そうなんだ、なら僕も一度会ってみたいな」

2人が雅史の事で話す中、当の本人は。





そしてモンスターはシアゴーストのようで鈍い動きで攻撃するが簡単に避けられ騎士の持つサーベルによるカウンターで逆にダメージを受けていく。

「ヴ、ヴウウ！」

「これで終わりだよ！」

騎士はそう言うところつくシアゴーストに向かって駆け出し、手に持ったサーベルでシアゴーストの頭を貫く、シアゴーストは体をピクピクと痙攣させるが騎士がサーベルを引き抜くと同時にバツタンと倒れ体が粒子化し生命エネルギーが現れる。

「クエエエエエエエエ」

すると何処からとも無く巨大な白鳥が現れ、生命エネルギーを吸収していく。

「ふう・・・終わった、終わった、さあ！帰ってゆっくり休もつと！」

騎士はそう言うのと近くに停めていたライドシューターに乗り込むと現実世界に帰っていった。

第22話 タイガとインペラー（後書き）

それではご感想お待ちしております。

番外編 妖怪の賢者は白虎の騎士と出会う（前書き）

まず一言・・・更新遅れてすいませんでしたー！ー！ー！

最近仕事が物凄く忙しく全然小説書けませんでした！なんとか時間を見つけてチヨクチヨクと書いてようやく投稿できました！

というかマジで仕事がつくなりました・・・朝の七時から夕方の六時から七時・・・場合によっては更に遅くなるってどんなだよ！って思いました（苦笑）

今回はタイガが幻想郷に来た時の話ですがタイガはあまり出てきません（苦笑）

それでは見て貰えたら幸いです。



## 番外編 妖怪の賢者は白虎の騎士と出会う

幻想郷の何処かに存在する八雲邸の縁側で紫が座っていると。

「紫さま〜!!」

廊下の向こうから橙が走ってき藍がその後が続いて歩いてくる。

「どうかしたの？橙、藍」

「はい先程妙な気配を白玉楼の方から感じました。恐らく奴等です」

藍の報告を聞いた紫は「はああ」と溜息を吐く。

「まったく・・・あの妙な怪物達が現れてから全然休めてないわ・・・  
これじゃあその内過労で倒れそうよ」

「そ、そうですね（そう言いながらも一日10時間以上は寝ている  
ですが・・・）」

「それで気配の数は？」

「大体6体程です」

「そう・・・6体ぐらいなら幽々子や妖夢で十分対処出来るでしょう  
けど心配ね」

「そうですね奴等は厄介な能力を持っていますから」

「そうですね・藍、橙今から白玉楼に向かうわよ」

「了解です」



「いまだ！」

それを見た妖夢がスペルカードを取り出し発動させる。

人符「現世斬」

妖夢はシアゴーストに向かって踏み込むと同時にシアゴーストを斬りつける。

「ヴウウ!？」

斬られたシアゴーストは体から火花が飛び散らせ爆発四散する。

「まず一体！」

妖夢はそう言うつと残りのモンスターに向けて刀を構える。

「あと5体ね、そんなに強くないけど油断は禁物よ?」

モンスターに弾幕を撃ちながら幽々子が言う。

「分かっています！幽々子様！それと先程は援護して頂いてありがとうございます」

「気にしないでいいわ。それより来るわよ」

幽々子が言うのと同時にモンスター達が飛び掛ってくるが。

「くくくくグウウウ!?」「くくく」

突然現れたスキマの中から飛んでくる弾幕によってモンスター達の体勢が崩れ地面に倒れた。

「大丈夫かしら幽々子、妖夢？」

スキマの中から現れた紫が幽々子と妖夢に尋ねる。

「紫様！」

「あら、紫来てくれたの？」

「どうやら大丈夫そうね。それじゃあさっさと終わらせましょうか  
藍、橙行くわよ」

「分かりました」

「はい！」

「妖夢、私達も行くわよ？」  
「はい！幽々子様！」

紫達は一斉にスペルカードを取り出し、スペルカードを発動させる。

結界「光と闇の網目」

式神「前鬼後鬼の守護」

鬼符「青鬼赤鬼」

亡舞「生者必滅の理 眩惑」

餓王剣「餓鬼十王の報い」

様々な形の弾幕が一斉にモンスター達に殺到する、その密度は凄まじく避ける隙間も無かった。  
結果。

「「「「「ヴウウウー！！！！」」」」」

シアゴースト達は避ける事も出来ないまま弾幕の直撃をモロに受け爆発四散する。

「紫様」

「ええ、一体仕留め損なつたわね」

藍の言葉に紫が空を見上げながら言い幽々子達も空を見上げるとレイドラグーンが紫達を見下ろしていた。どうやらレイドラグーンは咄嗟に空に逃げる事で弾幕を避けたようだ、しかし完全に避けきれたわけではなくその体には無数の傷が付いていた。

「ヴウウウ!!」

レイドラグーンの両腕から鉤爪が飛び出すとレイドラグーンは紫達に向かって急降下しながら突っ込んでいく。

「あらあら、随分と頭に来てるようね」

紫は口元を扇子で隠しながら言う、しかしそうしてる間にもレイドラグーンは紫に近づき腕を振り上げ、その爪で紫を引き裂こうとしていた。

「でも、これで終わり」

境符「四重結界」

紫の手元に複数の結界を重ねたバリアが形成されるとレイドラグーンの攻撃を防ぐ。

「ヴウウ!?!」

レイドラグーンは驚くがバリアは攻撃を防ぐだけではなく、レイドラグーンにダメージを与えていく。そして。

「さようなら」

「ヴウウウウー!?!?!」

至近距離から弾幕が放たれレイドラグーンの体が爆発を引き起こすがバリアの御蔭で紫には傷一つ無かった。

478

「終わったわね」

「そのようですね、もう気配はしませんし」

紫の言葉に藍が答え幽々子、妖夢、橙が近寄って来る。しかし次の瞬間。

「ヴウウウ!?!」

「え?」

いきなり橙の背後から長槍を持ったレイドラグーンが現れる。

「橙!?!」

「伏兵!?!」

「危ない!?!」

「くっ!?!」

紫達はすぐさまレイドラグーンを攻撃しようとするが、それよりも早く長槍を突き出す。

「ちええええええん!!」

藍が叫ぶが槍は無情にも橙の体を。

<ファイナルベント>

貫く事は無かった。

「ガオオオオン!」

「ヴウウ!?!」

何処からともなく白虎型のモンスター・デストワイルダーが現れる



とレイドラグーンを捕らえ地面に押し倒し、そのまま引きずっていく。

「大丈夫か！橙！」

「は、はい、藍さま・・・」

「良かった・・・」

藍は橙を抱きしめながら言う。紫達もその光景にホットする。

「それにしても・・・あの白虎は一体何かしら？気配はあの怪物と同じだったけど？」

「みなさん！あれを見てください！」

妖夢の指差しながら言い。紫達がその方向を見るとレイドラグーンの引きずられて行く方向に一人の騎士・仮面ライダータイガが巨大な手甲・デストクローを構えていた。そして引きずられてきたレイドラグーンの背中にデストクローの爪を突き立て持ち上げる。

「ヴウウウウウー！！」

レイドラグーンは断末魔の叫びを上げると爆発四散した。

タイガのファイナルベント「クリスタルブレイク」

「あの仮面の騎士は一体何者かしら？」

紫がそう言うのと同時にタイガが紫達の方を見ると近づいてくる、紫達は身構えるがタイガは腰の辺りに付いた長方形の物体を取り外すと姿を青年に変える。

「すみません、此処って幻想郷ですか？」

青年こと東條 悟が驚く紫達を余所にそう尋ねるのだった。

番外編 妖怪の賢者は白虎の騎士と出会う（後書き）

次の話で悟が幻想郷に来た時の話を書きます、本当にすみません（汗）

それとまた仕事の関係で更新が遅れると思います・・・それでもまた見て貰えたら幸いです。

**番外編 タイガの悩み（前書き）**

今回はタイガが幻想郷に来た話です。  
それでは今回も読んで貰えたら幸いです。

## 番外編 タイガの悩み

紫達と悟が出会う少し前。

「何だか随分と長い階段だな」

悟が白玉楼階段を見ながら言う。

「でも・・・オーデインももう少し送る場所を考えて欲しいな」

悟がたんこぶの出来た頭を擦りながらそう言う、なぜ彼の頭にたんこぶが出来ているのかといえばオーデインに幻想郷に送られた時に白玉楼階段に出してしまい頭を階段にぶつけてしまったのだ、それも階段の角に。

「まあ・・・いいか、それよりも誰か人を捜そう。とりあえずこの階段を登ってみよう」

悟はそう言い階段を登りだした瞬間。

キイイイイン キイイイイン

(これは・・・モンスターの気配？何でモンスターが・・・まあいいか。モンスターなら倒すだけだし)

そう考えた悟は腰にVバックルを装着し変身ポーズをとると。

「変身！」

バックルにデッキをセットし仮面ライダータイガに変身する。

「じゃあ行くかな」

タイガはそう言うと白玉楼階段を駆け上がっていくと、丁度レイドラグーンが長槍を手に橙に襲い掛かる瞬間だった。

(あれは・・・助けた方がいいよね)

タイガはそう思うと即座にデストバイザーにカードを読み込ませる。

<ファイナルベント>



戦いが終わり白玉楼の一室で悟が紫達に色々と説明する。

「……という事です」

「そう、ありがとう大体の事は分かったわ」

「いえ、お役に立てて良かったです」

悟がそう言った後に藍が悟に話しかける

「そういえば悟はこの後何処に行くあてでもあるのか？」

「いえ、まだ決まってませんけど・・・」

「それなら〜此処に住んだらどうかしら？」

「え！？・・・いいですか？」

「別に構わないわよ〜幸いこの屋敷は部屋が結構余っているから好きな部屋を使ってくれていいし。貴女も問題ないわよね？妖夢」

「幽々子様が決めたのなら私は別に問題ありません、それに悟さんは悪い人には見えませんから」

「決まりね。それじゃあさっそく歓迎会の用意をしないとね」

「いえ、そんな・・・悪いですよ」

「気にしないでいいわよ悟、幽々子はたんに歓迎会という名目で料理を沢山食べたいだけだから」

「む〜！紫、その言い方は酷いわよ」

「あら？本当の事じゃないかしら？」

「まったくも〜」

「ふふふ、じゃあ今日は何時もより多く作りますよ、幽々子様」



「妖夢、それなら私も手伝おう」

「あ！私も手伝います！」

「じゃあ、お願いします」

「あら、じゃあ言い出しっぺの私も手伝おうかしら？構わない？妖夢」

「幽々子様が言うのであれば別に構いませんが・・幽々子様、摘み食いはしないでくださいね？」

「・・・・・そ、そんな事・・するわけないじゃない」

口元を扇子で隠し視線をあちらこちらに動かす幽々子。  
それを見た悟を除く4人は。

(( ((この人する気マンマンだよ)))

と同じ事を思うのだった。

妖夢はフウと軽く溜息をつく。

「とりあえず料理を作りに向かいますよか・・幽々子様、摘み食いはダメですよ？」

「もう！分かってるわよ！」

幽々子はそう言つとドシドシと台所に歩いていき妖夢達も軽く笑いながらその後を付いていった。

「さてと・・・私は料理が出来るまでゆっくりしていようかしら。貴方はどうするの?」

「僕はちよつと外の空気を吸ってきます」

悟はそう言い部屋を出ると外は日が暮れ、空には月が出ていた。

「もう夜になっていたんだ・・・」

悟はそう言つと夜空を見上げながら妖夢の言葉を思い出していた。

(悪い人には見えない、か・・・本当は悪い人なんだけどな)

悟がそう思いながら月を見ていると。

「月を見て何か考え事かしら?」

悟が振り返ると紫が立っていた

「紫さん・・・どうしたんですか? ゆっくりするんじゃないあなかつたんですか?」

「まあ、そのつもりだったんだけど」

紫はそう言いながら悟の横に並ぶ。

「貴方が何か悩んでるように見えたからちょっと気になってね」

「え!？」

「どつやら図星みたいね」

「ど、どうして分かったんですか？」

「長く生きているとそういうのがなんとなく分かるのよ」

「・・・そうなんですか」

「悩みがあるなら聞いてあげるわよ? 橙を助けてくれたお礼を兼ねて、まあ言いたくないんなら無理に言わなくてもいいわよ」

「・・・」

紫の言葉に悟の脳裏にある男の言葉が蘇る、自分の一撃を防ぎながらあの男の言った言葉を。

『なあお前さ、絶対英雄になれない条件が1つあるんだけど、教えてやるうか? 英雄ってのはさ、英雄になろうとした瞬間に失格なのよ。お前、いきなりアウトってわけ』

悟は暫く考えると口を開いた。

「紫さん・・・英雄ってどうすればなれると思いますか?」

「英雄? 悟・・・貴方、英雄になりたいの?」

「いや・・・今はもういいです。英雄には成れましたから・・・」

「ならなんでそんな事を聞くのかしら？」

「ある人から言われたんです。英雄は英雄になろうとした瞬間、失格ってじゃあどうすれば英雄になれるんだらうって・・・その事をずっと考えていたんです」

悟の言葉に紫は目を閉じ口元を扇子で隠す、そして目を開け、扇子を閉じると静かに言う。

「英雄になる方法なんて結構あるわよ」

「え？」

「たとえば戦争で敵を沢山殺せば味方からは英雄と称えられるは・・・まあ当然の事だけど敵からは悪魔とか色々言われるし恨みを買う更には後世で大罪人と言われることも在りえるわね。逆に人を沢山救ったり世間で言う所の良い事をしていくと英雄と言われるわ、他にちよつとした事でも英雄と言われる事もあるわ。こんな風に英雄になる方法は色々あるのよ」

「そ、そうなんですか・・・」

「まあ、要するにあんまり悩む必要ないんじゃないかしら」

「え？」

「いきなり話が飛んじやったけど、さっきから貴方の顔を見ていると最初のように悩んでる風に見えないもの。なんだか吹っ切れたって顔してるわよ？」

「・・・」

「話してみて少しは楽になったんじゃないかしら？」

「・・・そうかもしれません、なんだか紫さんと話している内にちよつと悩んでいた事がどうでもよくなりました」

「そう・・・それは良かったわ」

紫が微笑みながら言う。

「紫様、悟さん、食事の用意が出来ました」

障子の向こうから妖夢が2人を呼ぶ声がした。

「じゃあ行きましょうか」

「はい」

障子を開けながら紫が言い、悟は答えると紫の後を追うのだった。

## 番外編 タイガの悩み（後書き）

タイガのデッキもカードの枚数が変化しています。

フリーズベントについて

フリーズベントの効果は原作同様に対象を瞬間凍結させ行動を封じるものです。

ただ対象の幅が広がっています、詳しく言うとライダー以外のもの、モンスターは当然の事ながら東方キャラ更には弾幕すらも凍結させてしまう（弾幕がその場で止まる）効果を得ています。

この凍結効果はタイガが任意で解くか一定時間経つ（大体一週間くらい）またコンファインの様な特殊カードを使用しないと解除されません。

タイガはこのカードを2枚所持。

リターンベントについて

こちらも原作同様に一度使用したカードを再度使用可能にし。コンファインで消された効果も戻せます。

タイガはこのカードを2枚所持。

それでは次回も仕事の関係上遅れるかもしれませんが読んで貰えたら幸いです。

第23話 悪戯は時に思わぬこと招く(前書き)

なんとかか今月中に投稿出来ました・・・では！今回も見て貰えたら幸いです。

### 第23話 悪戯は時に思わぬこと招く

人里の入り口近くで雅史を含めた6人が話し合っていた。

「それでは悟君ご協力感謝します」

「いえ、モンスターを放っておく訳にもいきませんし」

雅史の言葉に悟が答える。

何故この様な流れになっているのかというと。

ミラーワールドでモンスターを倒したシザースがインペラーと合流すると見たことの無いライダー、タイガが居た為インペラーに事情を聞き、現実世界に戻って妖夢達と合流した後には雅史が悟に協力を要請しこれに悟が了承したという流れだった(ついでに自己紹介も行った)。

「ではこの事は紫様にも伝えておこう」

「ありがとうございます、藍さん」

「なに気にするな、今回の異変は互いに協力した方が早く方が付きそうだからな」

「そうですか」

「では私達はこれで失礼する、まだ買い物途中だからな。では悟、  
橙、妖夢、行こうか」

「はい」

「分かりました」





迷いの竹林の中にひっそりと建てられた屋敷『永遠亭』の廊下を一人の女性が欠伸をしながら歩いていった。

「ふわ〜なんかすることないかな〜」

女性、霧島 美穂が言いながら歩いていると襖の一つが開けられ中から頭に赤十字マークの付いたナース帽を被り、長い銀髪を三つ網みにした左右で青色と赤色に分かれる特殊な配色の服（スカートは上の服の左右逆の配色）を着た女性、八意 永琳が出てくる。

「ああ、美穂、丁度良かったわ」

「あたしに何か用？永琳」

「ええ、ちよつとてゐを探してきて欲しいの」

「てゐに何か用事？」

「実はてゐに薬草を採ってくるように頼んだんだけど・・・まだ戻ってきてないの」

「てゐの事だからまた竹林で遊んでんじやないの？」

「恐らくそうでしょうね、まったく・・・寄り道はするなど言っているのに・・・ウドンゲは今、家事をやっているし。姫様に行かせるわけにもいかないし、だから美穂。頼めるかしら？」

「まあ、退屈してたところだし別にいいけど」

「ありがとう、美穂」

「じゃあ、行ってくるな」



「といつても何して遊ぼうかな〜・・・ん？」

ふとてゐが歩みを止め、ある場所を見つめる。

其処には地面に不自然に出来た穴が在った。

（あれって確か・・・ずっと前に作った落とし穴だ。でも出来が凄く悪いから誰も引つ掛からなかったやつなんだけどな〜）

そう思いながらてゐが落とし穴に近づいていく。

（こんな簡単な落とし穴に引つ掛かる奴だし、ちよつとからかつてやろう！）

そう思ったてゐが穴の中を覗き込むと。

「あ？誰だお前？」

穴の底（深さは大体10メートルくらいだろうか）で一人の男が座り込みながらてゐを見上げていた。

それを見たてゐは。

「私はてゐ・・・しっかし、よくこんなすぐばれるような落とし穴に

引っ掛かったわね貴方？」

「・・・これを仕掛けたのはお前か？」

「ええ、そうよ・・・もつとも誰も引っ掛からないと思ったんだけどね。貴方・・・妖精以上のバカ？」

「・・・」

「まあ、私も鬼じゃないわ。助けてあげるから「イライラするぜ」へ？」

てゐるが男を見ると、男は立ち上がりてゐるを睨んでいた。

「お前・・・潰してやろうか？」

男、浅倉 威がてゐるを睨み付けながらそう言った。

ズルズル

そして・・・てゐるは気が付いていない自分の背後から紫の大蛇が忍び寄っている事に。

第23話 悪戯は時に思わぬこと招く(後書き)

なんか書き終わって読み返すとてゐがピンチな状況に！自分でもビツクリだ！！(マテ！)

では次回も読んで貰えたら幸いです。

第23・5話 アイツが落ちた訳（前書き）

これは浅倉が何故落とし穴に落ちたかを書いた物です。

かなり短いですが読んで貰えたら幸いです。

## 第23・5話 アイツが落ちた訳

浅倉が落とし穴に落ちる数時間前の出来事。

「う、ううう〜」

幻想郷でも屈指の実力を持つ古参妖怪、風見 幽香は自宅のベットの上で苦しんでいた。  
何故彼女の様な実力者が寝込んでいるのかといえば。

「お前・・・まだ寝てたのか？」

この男、浅倉 威のせいなのである。

「うう〜誰のせいでこんな事なってると思ってるのよ・・・」

「たかが鍋一つで腹を壊すお前が悪い」

「なんでそうなるのよ・・・むしろ妖怪の体調を崩す様な鍋を作る貴方に責任があるでしょう？」

そう幽香が体調を崩したのは威が作った鍋が原因だった。

その日、幽香は鍋を食べたいと思い、早速材料を集め鍋を作り始めようとした時。



『おい幽香、鍋を作るなら俺に作らせる』

と威が言ってきた。

普段は妖怪やモンスターと戦い、家事は一切しない威がそう言ったのに驚いた幽香だが、たまにはいいかと思いい調理を任せた。その結果・・幽香は体調を崩してしまったのだった。

因みに鍋の材料は豚肉、白菜、豆腐、その他の定番材料が使われたが其処に後から威が追加した物がいけなかったそれはトカゲ、カエル、ネズミ、魔法の森で採った派手な色のキノコ、その辺で仕留めた妖怪と妖怪といった材料だった。

しかもどれも既に捌かれており幽香も気づけなかった。

「俺は何とも無かったぞ？」

「・・それは貴方の胃が非常識な程頑丈だからでしょうね」

「そうか？」

「はぁー・・もついいわ。それより威、永遠亭で胃薬を貰ってきて欲しいんだけど？」

「何で俺が「アンタのゲテモノ鍋せいなんだからそれぐらいしろー

ー！ー！ー！」

バコーーーン！！

フルスイングされた日傘が威に当たり威は壁を突き破り外に飛んでいく。



第23・5話 アイツが落ちた訳（後書き）

浅倉がてゐの作った落とし穴に落ちたのはただ単に前を見てなかったという非常にマヌケな理由です。

では感想をお待ちしております。

第24話 蛇と白鳥(前書き)

何とか・・・更新出来ました・・・



ズルズル・・・カチ

「シャ？」

妙な音がした瞬間。

ビッヨーーーン！！

「シャアアアーーー！？」

いきなり地面の中から巨大なバネが飛び出しベノスネーカーを押し上げ、ベノスネーカーが宙を舞う、そして。

「・・・おい」

ドーーーン！！

威が落ちた、落とし穴の中に吸い込まれる様に落ちていった、それを見たてゐは。

「え？・・・あ！？あれは時間かけて仕掛けたわいいけど使い道がまったくないからそのままにしておいた『バネで飛ぼう君！』まさかこんなところで役に立つとは・・・とりあえずチャンス！逃げなきや」

てゐはそう言うつと脱兎の如く逃げ出した（ウサギだけに）。

「おい・・・ベノスネーカー、アイツを捕まえる。食い殺すなよ？」

「シヤアアア！！」

落とし穴から出てきた威がベノスネーカーに命令するとベノスネーカーはてゐを追っていった。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

そして現在、見事に追いつかれてしまったてゐは必死に考えていた。

「（あー！？このままじゃ追いつかれ！？）きやあー！？」

てゐは足を躓いて倒れてしまう。

「シャアアアア!!」

「逃げ!?!イタ!!」

ベノスネーカーがてゐに迫る、てゐは逃げようとするが足に痛みが走る。

どうやら転んだ時に足を挫いてしまったようだ、ならばと飛ばうとするがもうベノスネーカーが目の前に迫っていた。

(に、逃げられない!)

てゐがもう駄目だと思った時。

「クエエエエエン!!」

「シャ、シャアアア!?!」

巨大な白鳥型のモンスター、閃光の翼ブランウイングが現れるとベノスネーカーに体当たりし、ベノスネーカーを吹き飛ばした。

「どうしてブランウイングが?」

「てゐ!大丈夫か!!」



「み、美穂！？なんで此処に？」  
「永琳に頼まれてアンタを探してたらモンスターの気配がしたんだ、それで来てみればアンタが襲われてたから助けてやったんだよ。それにしても・・・あのモンスターは浅倉の「ほお〜」！？」

美穂とてみが声のした方を見る

「モンスターの気配がしたから来てみれば・・・さっきのガキに女か」  
「浅倉 威！？」  
「げっ！？さっきの人相の悪い男！！」  
「あ？なんでお前、俺の名前を知ってたんだ？」  
「はあ！！お前、私の事憶えていないのかよ！」  
「知らん」  
「お姉ちゃんを殺した事もか！！」  
「お姉ちゃん？・・・お前あの女の妹か？」  
「そうだ！」  
「・・・ん？」

ふと威は美穂の頭上にいるブランウイングを見ると。

「モンスターが襲わないという事はお前・・・ライダーか？」  
「そうだ！なんか文句でもあるのかよ！！」  
「面白い」

威はポケットからカードデッキを取り出しVバックルを装着すると。

「変身！」

ポーズを取りバックルにデッキをセットし仮面ライダー王蛇に変身する。

「え！？あの男もライダーだったのー！！」

「（何で浅倉が私の事を知らないのかは後回しだ！）てゐ！危ないから下がってろ！」

美穂はそう言うとデッキを取り出しバックルを装着すると両手を胸の前でクロスさせ両手を下方へ、そして白鳥が翼を広げる様な動作を取ると左手を左腰に右腕を左胸位置へすばやく動かし。

「変身！」

バックルにデッキをセットすると美穂の姿が黒いライダースーツに純白の鎧そして同じく白いマントに白鳥の様な仮面を着けた騎士・仮面ライダーファミにその姿を変えた。

それを見た王蛇はベノバイザーにカードを読み込ませ、ファミも羽召剣ブランバイザーにカードを読み込ませた。

<<ソードベント>>





ファムの体が吹き飛び地面を転がる王蛇は追撃しようとするが。

「クエエエエン！」

「グワ！？」

ブランウイングが王蛇に体当たりし王蛇をファムから引き離す。

「ありがとう！ブランウイング」

「クエエン」

「このまま戦っても前みたいに押されるだけ・・・だったら一気に決めてやる！」

ファムはカードを抜くとバイザーに読み込ませる。

<ファイナルベント>

認証音声が鳴るとブランウイングが王蛇の近くに行き翼で突風を起こし王蛇を吹き飛ばす。

「うおおっ！？」

吹き飛ばされる王蛇の向かう方向にウイングスラッシャーを構えた  
ファムが待ち構えていた。

「終わりだ！浅倉！！」

「終わるにはまだ早いだろっ！！」

王蛇は吹き飛ばされている状態でカードを引き抜くとバイザーに読  
み込ませる。

<ファイナルベント>

「シャアアアア！！」

「ウオオオオオオ！！」

認証音声がなると竹林の向こうからベノスネーカーがやって来るの  
を見た王蛇は吹き飛ばされる体を強引に動かし足をファムに向ける、  
そして吹き飛ばされる勢いとベノスネーカーの吐き出す毒液の勢い  
が重なり王蛇が物凄い速度でファムに向かっていく。

ファムは王蛇の行動に驚くが直にウイングスラッシャーを構え直す。

そして。

ドーン！！

迷いの竹林に激しい音が響いた。

第24話 蛇と白鳥（後書き）

それでは次回も読んで貰えたら幸いです。



## 第24・5話 ババ抜き（前書き）

これは24話で出てきた雅史達がババ抜きをしている時の話を書いた物です。

短いですがどうぞ。

## 第24・5話 ババ抜き

「久々の我が家だな」

雅史が上月家を見ながら言うと玄関を開け中に入ると。

「あ！雅史さん！！」

琢磨が廊下を走りながらやって来た。

「琢磨君、走ると危ないですよ」

「だって雅史さんが帰って来るのって、久しぶりなんだもん」

「言われてみれば確かにそうですね」

「あ、雅史さん戻ったんですか」

「ええ」

「ねえ、ねえ、雅史さん、兄ちゃん！今から一緒に遊ぼうよ！」

「私は別に構いませんよ」

「俺も丁度用事が終わった所だから大丈夫だぞ」

「決まりだね！あつ！雅史さん、ボルさんも呼んでもらえる？」

「ボルキャンサーをですか？一体何をして遊ぶんですか？」

雅史の言葉に琢磨は手に持っていたカードケースを雅史達に見せると。





今晚の夕食を見ながら雅史がボルキャンサーに声を掛けた。

「お前のその腕でちゃんと料理を作れたのにはハッキリ言って凄く驚いた・・だがな」

雅史の言ったとおり夕食はボルキャンサーが作ったのだ何故ボルキャンサーが夕食を作る事になったのかといえば琢磨が。

『今日の晩ご飯はボルさんが作ってみたら』

と言ったからだった。

雅史はモンスターであるボルキャンサーに料理は無理だろうと思っただが、好奇心ゆえに許可したその結果。

目の前に深鍋（鍋の深さが1メートルもある）に入ったこった煮が置かれていた。

「作りすぎだー！ー！というかこんな深鍋どこにあったー！ー！  
！！！」

「雅史さん！？落ち着いて！！」

「そっだよ！！」

信吾と琢磨の2人は雅史を落ち着かせようとするが雅史の耳には入らずボルキャンサーに向かって回し蹴りを放つが。

「・・・(クルリ)」

ボルキャンサーが背中の中甲羅を向ける、ボルキャンサーの甲羅は龍騎のドラグセイバーの斬撃も防ぐ強度がある更に今のボルキャンサーは力を上げており当然甲羅の強度も上がっている対して雅史も身体能力等が上がっているがボルキャンサーの甲羅を打ち破る程の破壊威力を出せる訳もなく当然。

ドン！！ バキ！！

「グワーーーーー！！！！！」

「「雅史さん!?!」」

雅史が足を押さえ床を転げまわるのだった。

因みに鍋はボルキャンサーが殆ど平らげてしまった。

第24・5話 ババ抜き（後書き）

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

第25話 王蛇VSフナム 戦いの決着(前書き)

それでは第25話

今回も見て貰えたら幸いです。



## 第25話 王蛇VSファム 戦いの決着

互いにファイナルベントを発動させぶつかり合う王蛇とファム。

「ハア!!」

ファムがウイングスラッシャーを振るい王蛇を斬り付けようとするが。

「アアアア!!」

王蛇はウイングスラッシャーを『蹴飛ばす』事でこれを回避する。

「なっ!?!」

王蛇の行動に驚くファム（まあ普通、刃物を蹴飛ばすという行為自体誰もしようとしないだろっ。それをするあたり流石は浅倉と言えるが）に王蛇の連続蹴りが入る。

「美穂!?!」

てゐが叫ぶ。

「アアアアア！！！！」

「うわぁぁー！？」

肩や胸を何回も蹴られ、ファムの体が吹き飛び地面を転がり、王蛇も着地の体勢をとる事が出来ずに地面に落ちた。

王蛇のファイナルベント「ベノクラッシュ（非殺傷）」

「ぐ、ぐう・・・」

王蛇がウイングスラッシュを蹴飛ばした右足を押さえ苦痛の声を出す（例え装甲で守られていたとしても鋼鉄も容易く切り裂く程の切れ味を持つ刃物を蹴飛ばせばダメージも受けるのは当たり前といえるが）が腕に力を込め立ち上がりファムを見ると。

「・・・う、ううう・・・」

「美穂！大丈夫！」

地面に倒れ伏すファムとそれに駆け寄るゐの姿が目に入った。

「ほお・・・」

王蛇はカードを引き抜きバイザーに読み込ませる。

<ストライクベント>

王蛇はベノクローを装備すると右足を引きずりながらゆっくりとフ  
アムに近づいていく。

「クエエエン!!」

「美穂に近づくな!!」

ファムを王蛇から守るためブランウイングは突撃し、てゐは弾幕を  
放つが。

「シャアアアア!!」

ベノスネーカーがブランウイングとてゐの前に立ち塞がり、てゐの  
放った弾幕から王蛇を守るとブランウイングとてゐに向かって毒液  
を吐き出す。

「クエエエン!？」

「うわっ!？」

ブランウイングとてゐは上昇する事で避けるがそれを見たベノスネーカーは体をバネの様に縮めると。

「シャアア!!」

縮めた体を伸ばしその反動を利用して跳ぶ。

「クエツ!？」

「ええええ!？」

驚くブランウイングとてゐを余所にベノスネーカーは尻尾をブランウイングに叩きつける。

「クエエエ!？」

ブランウイングは地面に叩きつけられ土煙が立ち上がる。

「ブランウイン!」シャアアア!!「わっ!？」

てゐるがブランウイングのもとに行こうとするがベノスネーカーがそれを許さず、てゐに噛み付く（牙は突き立てていない）。そして地面に着地すると頭をおもいきり振りかぶるとてゐを投げ飛ばした。

「きゃあああ!？」

てゐの体は竹林の中を物凄い勢いで飛んでいき、やがて一本の竹に叩きつけられた。

「がはっ!？」

ぶつかった衝撃と痛みにてゐは意識は闇に落ちていった。

「うう・・・てゐ・・・ブランウイング・・・」

なんとか立ち上がったファムがてゐとブランウイングの安否を確認するために強化されている視力で確認するとダメージこそ負っているがどちらも生きている事が確認出来た。

「良かった・・・」

両者の安否を確認したファムはそう言うと王蛇を睨みつける。

「浅倉あー!!」

ファムの怒声を無視し王蛇は装備したベノクローを見下ろしながら。

「城戸みたいにやってみるかあ」

そう言うとベノクローを後ろに引くと、ベノスネーカーが王蛇の周りを取り囲み頭をファムに向ける。

(!?!?あの動きは!)

王蛇の動きを見たファムの脳裏に自分を死に追いやった黒龍騎士の動きが重なる。

「ハアッ!」

「シャアアアア!」

王蛇がベノクローを前に突き出すと同時にベノスネーカーがファムに毒液を吐きかける。

「くっ！」

ファムは横に転がる事で避けるが。

「フツ（ニヤリ）」

王蛇が仮面の中で笑う。

そしてベノクローの口の部分から毒液が発射される。

「なっ!?!」

それを見たファムは咄嗟にカードをバイザーに読み込ませる。

<ガードベント>

ファムは召喚されたウイングシールドで毒液を防ぐがウイングシールドはドロドロに溶け落ちていった。

「シャアアアア!」





「何の音？ウドンゲ」

台所に入ってきた永琳は、足元に届きそうなほど長い薄紫色のストリートロングに紅い瞳を持ち頭にはヨレヨレとしたウサギの耳を持ち、白のブラウスに赤いネクタイを締めその上から紺色のブレザーそして薄いピンク色のミニスカートといった女子高生の様な服装で身を包んだ少女、鈴仙・優曇華院・イナバに問い掛ける。

「あつ！師匠・・・実は美穂のマグカップを落としちゃって・・・」

鈴仙はそう言うのと取っ手の部分が壊れたマグカップを見せる。

「あら、本当ね」

「どうしましょう・・・これ美穂のお気に入りなのに・・・」

「大丈夫、ちゃんと謝れば許してくれわ」

「そうでしょうか・・・私・・・直せるか試して見せます！」

「そう？ならこれを使いなさい」

永琳はチューブ状の容器を鈴仙に渡す。

「これは？」

「前に暇だったから作ってみた接着剤よ、まあ使う機会が無かつたけどね（苦笑）。でもマグカップを直すのにつかえるでしょう？」

「ありがとうございます！師匠！！」



毒液を発射しようとした王蛇は何処からとも無く現れた紅色のエイに跳ね飛ばされ宙を舞う。

そしてそのまま地面に顔面から叩きつけられた。

「まったく・・・まさか此処でお前に再会するとはな、浅倉」

紅色のエイことエビルダイバーを横に控えさせ仮面ライダーライアがそう言った。

## 第25話 王蛇VSファム 戦いの決着（後書き）

という訳で王蛇VSファムの戦いは王蛇の勝利で終わり、次回は王蛇VSライアです。

それとベノクローについてですが使い方がほぼ龍騎のドラグクローと一緒にですから今回の様な攻撃も出来ます。

またベノクロー自体からも毒液を発射でき龍騎のドラグクローも同様の事が出来ます（ゲーム版やディケイド版みたいに）。

それでは次回も読んで貰えたら幸いです。

## 第25・5話 エビルダイバーVSチルノ（前書き）

この話は手塚が何故、迷いの竹林に居たのかを書いた話です。  
ですから王蛇VSライアはまた今度です（汗）。

では今回も見て貰えたら幸いです。

## 第25・5話 エビルダイバーVSチルノ

紅魔館の地下にある大図書館で海之が小悪魔と共に本の整理をしていた。

「すみません、海之さん。本の整理を手伝って貰って」

「気にするな。それにしてもこの図書館は本当に広いな、俺が通っていた大学よりも遥かに広いな」

「まあ、弾幕ごっこをやったりロケット製作所兼発射場にも出来ますからね」

「それは凄いな・・・ん？・・・ロケット製作所兼発射場？」

「はい、少し前？でしょうか・・・お嬢様が月に行くためにこの図書館でロケットを作ったんです」

「・・・月に行く？何でまた？」

「何でも月を侵略するためだそうです・・・もつとも返り討ちにあつたみたいですけど（苦笑）」

「だいぶなれたが本当に何でもありだな・・・」

「因みにロケット発射の際には天井が大きく開くんですよ？」

「何処の秘密基地だ・・・しかしそれだけやってよく本が無傷で済むな？」

「それはですね、パチユリー様が図書館の本に防火防水防刃防弾魔法障壁色々といったものを掛けているからですよ。因みにパチユリー様曰く大妖怪が全力攻撃でもしないかぎり、ちよつとやそつとでは傷一つ付かないらしいですよ？」

「凄いな・・・」

そんな風に海之と小悪魔が話している。

「こあ、少しいいかしら？」

机で本を読んでいたパチュリーがやって来て小悪魔に話しかける。

「何でしょうか？パチュリー様」

「喘息の薬のストックは後どれくらい持ちそうかしら？」

「そろそろ切れそうですから補充した方がいいですね」

「そう・・鈴仙や永琳が薬の補充に来るのはまだ先ね・・こあ、悪いのだけど永遠亭に行つて薬をもらつてきてもらえるかしら？」

「分かりました。では今か」「待つてくれ小悪魔」「どうしたんですか海之さん？」

「薬なら俺が貰つてこよう」

「え？でも海之さんは永遠亭の場所知りませんよね？」

「場所なら地図があるから大体分かる。それに少し幻想郷を見て回りたいしな、構わないかパチュリー？」

「私は別に構わないわ。こあは？」

「パチュリー様がいいなら私も構いません」

「そう・・じゃあ海之お願い出来るかしら？」

「ああ、じゃあ行つてくる」

海之はそう言うと大図書館を出て行った。

(レミリアにも伝えておくか)

大図書館を出た海之はレミリアの部屋に行くとドアをノックする。

「レミリア、少しいいか？」

「いいわよ、入りなさい」

「ああ」

部屋の中に入ると椅子に座り紅茶を飲むレミリアとその傍でティーポットを持った咲夜が居た。

「海之どうかしたの？」

「いや、少し永遠亭に行こうと思ってな」

「永遠亭にですか？どうしてまた？」

「パチュリーの喘息の薬を貰いにな」

「あら？でも薬を貰いに行くのは小悪魔じゃなかったかしら？」

「薬を貰いに行くついでに少し外を見ようと思ってな」

「そういえば、貴方。庭以外ではまだ外に出たことがなかったわね」

「ああ、だから出かける事を伝えようと思ってな」

「分かったわ。貴方にはモンスター の件で色々と助けて貰っているからこの機会に外の景色でも見てきなさい」

「海之様、お気をつけて」

「ああ」

.....





「ちよ〜とまった〜!!」  
「ん？止めるエビルダイバー」

海之の命令で止まるエビルダイバー、そして声の主の姿が霧の中から現れた。

「ここはアタイの縄張りよ！それを許可なく通ろうなんて！どついでう獵犬よ!!」

またしても見と獵犬を間違えたチルノ（第10話 霧の湖の氷精を参照）。

「獵犬？了見の間違いだろうか？」  
「そんな細かい事はいいわ！それよりも無断で通ろうとした罰よ！」

雪符「ダイヤモンドブリザード」

大量の氷の結晶（かなり大きめ）が海之とエビルダイバーに襲い掛かる。

「っ!?!いきなり攻撃か！」  
「!?!」









- - - - -

「エビルダイバーも手加減したようだし大丈夫だと思うが・・・」

海之がチルノを心配している頃、本人は湖をプカプカと浮いており暫くして友人に救出された。

(しかしあの時は本当に死ぬかと思ったな・・・ん?)

ふと海之が正面を見ると先の方で戦う王蛇とファムの姿が目に入る。

(あれは浅倉!?それともう一人は誰か分からないがライダーか!)

そう思っているうちに吹き飛んで倒れたファムにベノクローを向ける王蛇が目に入った。

「エビルダイバー!」

王蛇にエビルダイバーを差し向けると海之もデッキを取り出し。

「変身！」

ライアに変身し王蛇に向かって駆け出した。



第25・5話 エビルダイバーVSチルノ（後書き）

それでは次回も見えて貰えたら幸いです。

第26話 第2ラウンド 王蛇VSライア（前書き）

王蛇VSライアの話です。

今回も見て貰えたら幸いです。

第26話 第2ラウンド 王蛇VSライア

迷いの竹林で対峙する王蛇とライア

「ぐう・・・お前は」

「久しぶりだな、浅倉」

ライアが王蛇に話しかけると王蛇は片手を首に置いた後に首を回すと。

「確か手塚だったか？」

「そうだ・・・よく覚えていたな？」

「まゝな、俺が潰した奴だからな？」

「・・・確かにそうだな」

ライアはそう言うのと倒れているファムに視線を向ける。

「お前はこの世界に来てても変わってないな？」

「悪いか？」

「そうだな・・・少しは変わってくれてた方が良かったな」

「ハッ・・・それよりさっきは邪魔したって事は今度はお前が遊んでくれるんだよね？」

「別に戦ってもいいが浅倉、お前大分カードを消耗してるんじゃないのか？」

「それぐらいハンデがあつた方が面白いだろう?」

王蛇はそう言つたとライアに向かつて走り出し、ライアも王蛇に向かつて駆け出す。

「オラッ!」

「フッ!」

王蛇はベノクローでライアに殴りかかるがライアはエビルバイザーを盾にして防ぐ。

それを見た王蛇は即座にもう片方の手でライアの顔目掛けて拳を突き出す。これもライアの右腕に防がれ、互いに睨み合う体勢になる両者。

「なかなかやるな。前と比べるとかなり違つぞ?」

「それは良かった・・・なっ!」

ライアは王蛇の腹にヤクザキックを叩き込む。

「ウオッ!?!」

キックを食らわし王蛇と距離を取つたライアはカードを引き抜きバイザーに読み込ませる。

<コピーイベント>

認証音声が鳴るとライアの手にはスペルカードが現れ発動する。

禁忌「フォーオブアカインド」

発動されたスペルカードによってライアが4人に増える。

「何だ？お前、秋山と同じカード（トリックイベント）を持っていたのか？」

「確かに秋山のカードとこのスペルカードは似ているな」

「四対一か？いいぜ、こいよ！」

「『行くぞ！浅倉！』」

4人のライアはそう言うそれぞれカードを取り出す。

<<コピーイベント>>

<<スイングイベント>>

4人の内2人にエビルウィップが装備され、もう2人にはスペルカードが現れ発動する。

神槍「スピア・ザ・グングニル」  
神槍「スピア・ザ・グングニル」

スペルカードを発動させた2人のライアの手には真紅の槍が握られる。そしてエビルウィップを手に持ったライアが王蛇に向かって駆け出しエビルウィップを振るう。

「ハア！」  
「フツ！」

振るわれたエビルウィップをベノクローで防ぐ王蛇だが。

「セイ！」  
「うわ!?!」

背後に回りこんだライアのエビルウィップが王蛇の背中を叩く。王蛇は背後のライアに後ろ蹴りを食らわすと正面に居るライアの肩を掴み引き寄せるとベノクローで殴る。

「グッフ!?!」

顔を殴れ怯むライアに王蛇はベノクローをライアの顔面に押し当て毒液を発射する。

「ぐわーーーー！！！」

至近距離から毒液を浴びライアの頭部が溶ける。

「ハッ！」

王蛇は頭が無くなったライアにヤクザキックを入れて倒すと別のライア達に向かっていった。

倒れたライア（分身）の体は暫くすると幻の様に消えていった。

「一人やられたか・・・」

「来るぞ！」

走って向かってくる王蛇（因みに王蛇は右足のダメージを無視しています）にライア達は槍を振りかぶると槍を投げつける。

「来るか！！！」

飛んで向かってくる真紅の槍を見た王蛇はベノクローを放り捨てる

と。

「ハッ!」

飛んで来た槍の一本を『掴む』と槍を振り回しもう一本の槍を叩き落し、叩き落された槍が地面に突き刺さる。

「何!?!」

「驚いている暇は無いだろっ!」

王蛇はそう言いながらライアの一人に槍を投げつける。  
そして。

「ガッ!?!」

投げつけられた槍がライアの心臓を貫きライア（分身）の体が倒れると同時にその体が消える。

「クッ!」

残ったライアはカードを引こうとするが王蛇は地面に突き刺さった槍を抜くとライアに向かって跳躍し両手に持った槍でライアの喉を



突き刺した。

「!?!?!」

喉を突き刺されたライア（分身）の体が地面に倒れ消えていく。  
その時。

<ファイナルベント>

「!?!」

王蛇が認証音声がした方向を見るとエビルダイバーに乗ったライアが突っ込んできた。

「浅倉!!」

「チツ!?!?!」

舌打ちする王蛇だが偶然地面に落ちていたファムのウイングスラッシュャーを見るとそれに飛びつき。

「ハッ!!」

ウイングスラッシャーをライアの足目掛けて投げる。  
投げられたウイングスラッシャーが回転しながらライアの足目掛けて飛んでいく。

「不味い!?!」

それを見たライアはジャンプで避けるが。

「オラアアア!?!」

「な!?!」

ライアがウイングスラッシャーを避けるためジャンプするタイミングを見計らって王蛇がライアに向かって跳躍しライアの首元にラリアットを食らわす。

「ゴツホ!?!」

強い衝撃に息が止まるライア、そしてそのまま地面へと叩きつけらる。

「ぐぐぐう〜」

ライアは何とか立とうとするが。

「ハアアア!!」

遅れて落ちてきた王蛇がライアの腹を踏みつけながら着地する。

「ガハ!?!」

「どうした? もう終わりか?」

ライアの腹を踏みつけながら王蛇が言う。

「まあ、かなり楽しめたがな」

「ぐっ……」

王蛇はベノバイザーを手に持ち振り上げた瞬間。

<ファイナルベント>

「!?!」

迷いの竹林に認証音声が響く。  
そして。

「だあああああー！ー！ー！ー！」

「何！？くおおおおおおお！？！？！」

激しい衝撃が王蛇を襲い、王蛇が火だるまになりながら竹林の地面のうえを転がっていき意識を失った。  
そして地面に倒れたまま意識が朦朧するファムが竹林の中に立つ赤き龍騎士を見ながら。

「う、うう・・・真・・・司」

と言い意識が闇に落ちていった。

第26話 第2ラウンド 王蛇VSライア(後書き)

では感想をお待ちしています!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9243p/>

---

東方蟹騎士伝

2011年12月21日23時52分発行